

富士市埋蔵文化財発掘調査報告書

# ジンゲン沢遺跡

宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

富士市教育委員会





# 序

富士市は南に駿河湾を臨み、北に霊峰富士を仰ぐ温暖で自然に恵まれた環境にあり、太古から豊かで多様な文化を育んできました。現在、富士川の対岸、庵原郡富士川町との合併を控えて、静岡県で第3位の人口を有する都市として、大きく脱皮を図る時期を迎えています。

富士市の歴史は愛鷹山南麓の旧石器時代からはじまります。その後、縄文時代に入ると遺跡数も増えました。これらの遺跡から私達は、噴煙を噴き上げる富士山を仰ぎ、自然災害にもめげず活発に活動する、逞しく精気に満ちた縄文人の姿を想像することができます。

今回報告するのは、縄文時代が最も栄えた中期を中心とする時代のジンゲン沢遺跡です。

このジンゲン沢遺跡は、富士市の西北、富士宮市との境に位置する天間地区に所在しています。近隣の天間沢遺跡は、昭和の初期にはすでにその存在が知られていました。ジンゲン沢遺跡は昭和36年に遺跡名が付され、富士市の歴史の一ページを占めることとなりました。両遺跡は、ともに富士市を代表する縄文時代中期を主体とする遺跡として、研究や検討が行われてきました。長い間地中に埋もれていたジンゲン沢遺跡ですが、今回初めて調査の手が入ったのです。

調査では、今まで云われてきた縄文時代早期から中期の土器の出土を確認し、かつ集落の一部である住居跡と土坑を検出しております。今回報告する成果は、天間沢遺跡や富士宮市若宮・代官屋敷遺跡とともに、富士山南麓に展開する縄文時代遺跡の研究や検討の重要な素材となりました。これらの内容は、わかり易い形で広く、富士市民をはじめ近隣の皆様にも伝えてゆきたいと考えております。

報告書刊行にあたり、調査費用の負担等、調査に多大なご理解と協力をいただいた、株式会社「日峰興業」有限会社「アバンス」株式会社「緑地シントク」及び、地権者の方々、また地元の皆様に深く感謝申し上げる次第です。

本書が富士市の歴史を刻む資料として、各方面の人々に広く活用していただけるように願うものであります。

平成19年3月30日

富士市教育委員会  
教育長 平岡彦三

## 例 言

1 本書は、富士市天間字堰戸 955-1 外(第 2 地区)954-3 外(第 3 地区)に所在する「ジンゲン沢遺跡」の発掘調査報告書であり、2・3 地区の調査成果をまとめたものである。

2 2 地区の調査は、株式会社「日峰興業」並びに有限会社「アバンス」による宅地造成工事に伴い、両社からの委託を富士市が受託し、教育委員会文化振興課が現地発掘調査を平成 17 年 10 月から同年 11 月まで行った。

発掘調査は、教育委員会文化振興課が以下のような体制で実施した。

事務局 富士市教育委員会 教育長 平岡彦三

文化振興課 課長 長橋 均

調査担当 前田勝己、小林一也、吉田博子

※ 3 地区も同様の体制で行った。

3 3 地区の調査は、株式会社「緑地シNTAX」による宅地造成工事に伴うもので、同社からの委託を富士市が受託し、教育委員会文化振興課が現地発掘調査を平成 17 年 11 月から同年 12 月まで行った。

4 資料整理は、2 区・3 区ともに、平成 18 年度事業とし、平成 18 年 7 月 1 日から平成 19 年 3 月 30 日まで、以下の体制で行った。

事務局 富士市教育委員会 教育長 平岡彦三

文化振興課長 村田 猛

整理担当 前田勝己

5 本書の執筆、図版作成等、すべて前田勝己が行い、事務局が編集を行った。

6 本遺跡の調査に関わる諸記録、出土遺物等は富士市教育委員会が保管している。

# 目 次

## 第1章 ジンゲン沢遺跡と周辺の環境

- 第1節 遺跡の位置と自然環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 第2節 歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- 第3節 基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

## 第2章 調査の経緯

- 第1節 ジンゲン沢遺跡の調査歴・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
- 第2節 調査に至る経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

## 第3章 遺構の調査

- 第1節 2区 調査の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
- 第2節 2区 検出された遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
- 第3節 3区 調査の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
- 第4節 3区 検出された遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

## 第4章 出土した遺物

- 第1節 土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
- 第2節 石器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38

## 第5章 調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47

# 挿 図 目 次

第 1 図	富士火山南麓・愛鷹火山地質図	1
第 2 図	周辺遺跡分布図	3
第 3 図	ジンゲン沢遺跡・天間沢遺跡分布図	4
第 4 図	土層柱状図	5
第 5 図	ジンゲン沢遺跡全体図	8
第 6 図	2区全体図	10
第 7 図	2区土坑実測図(1)	14
第 8 図	2区土坑実測図(2)	15
第 9 図	3区全体図	16
第 10 図	3区第1号住居跡実測図	18
第 11 図	3区第1号住居跡 炉実測図	19
第 12 図	3区第2号住居跡実測図	20
第 13 図	3区第3号住居跡実測図	22
第 14 図	3区第1号配石実測図	23
第 15 図	3区土坑実測図(1)	25
第 16 図	3区土坑実測図(2)	27
第 17 図	2区出土遺物(土器)(1)	30
第 18 図	2区出土遺物(土器)(2)	31
第 19 図	3区出土遺物(土器)(1)	32
第 20 図	3区出土遺物(土器)(2)	33
第 21 図	3区出土遺物(土器)(3)	34
第 22 図	3区出土遺物(土器)(4)	35
第 23 図	3区出土遺物(土器)(5)	36
第 24 図	3区出土遺物(土器)(6)	37
第 25 図	2区出土遺物(石器)(1)	38
第 26 図	2区出土遺物(石器)(2)	39
第 27 図	3区出土遺物(石器)(1)	40
第 28 図	3区出土遺物(石器)(2)	42
第 29 図	3区出土遺物(石器)(3)	43
第 30 図	3区出土遺物(石器)(4)	44
第 31 図	3区出土遺物(石器)(5)	45

## 挿表目次

第1表	出土土器観察表	・ ・ ・ ・ ・ 49
第2表	出土石器観察表	・ ・ ・ ・ ・ 53

## 写真図版目次

図版1	2区調査区全景、3区調査前景・調査区全景	・ ・ ・ ・ ・ 55
	3区1号住宅跡炉	
図版2	3区2号住居跡完堀・遺物出土状況・炉	・ ・ ・ ・ ・ 56
	3区3号住居跡完堀・遺物出土状況・配石・石器出土状況	・ ・ ・ ・ ・ 56
図版3	2区包含層出土土器(挿図1～24)	・ ・ ・ ・ ・ 57
図版4	3区2号住居跡出土土器(挿図22～33)	・ ・ ・ ・ ・ 58
	3区3号住居跡出土土器(挿図42)	・ ・ ・ ・ ・ 58
図版5	3区3号住居跡出土土器(挿図36～41)	・ ・ ・ ・ ・ 59
	3-2区出土土器(挿図44・46～57)	・ ・ ・ ・ ・ 59
図版6	3-2区出土土器(挿図43・45、61～80)	・ ・ ・ ・ ・ 60
図版7	3-2区出土土器(挿図59～77)	・ ・ ・ ・ ・ 61
	2区出土石器(石鏃・磨石)	・ ・ ・ ・ ・ 61
図版8	3区出土石器(石鏃・石匙・打製石斧)	・ ・ ・ ・ ・ 62
図版9	3区出土石器(敲石・磨製石斧・磨石)	・ ・ ・ ・ ・ 63

# 第1章 ジンゲン沢遺跡と周辺の環境

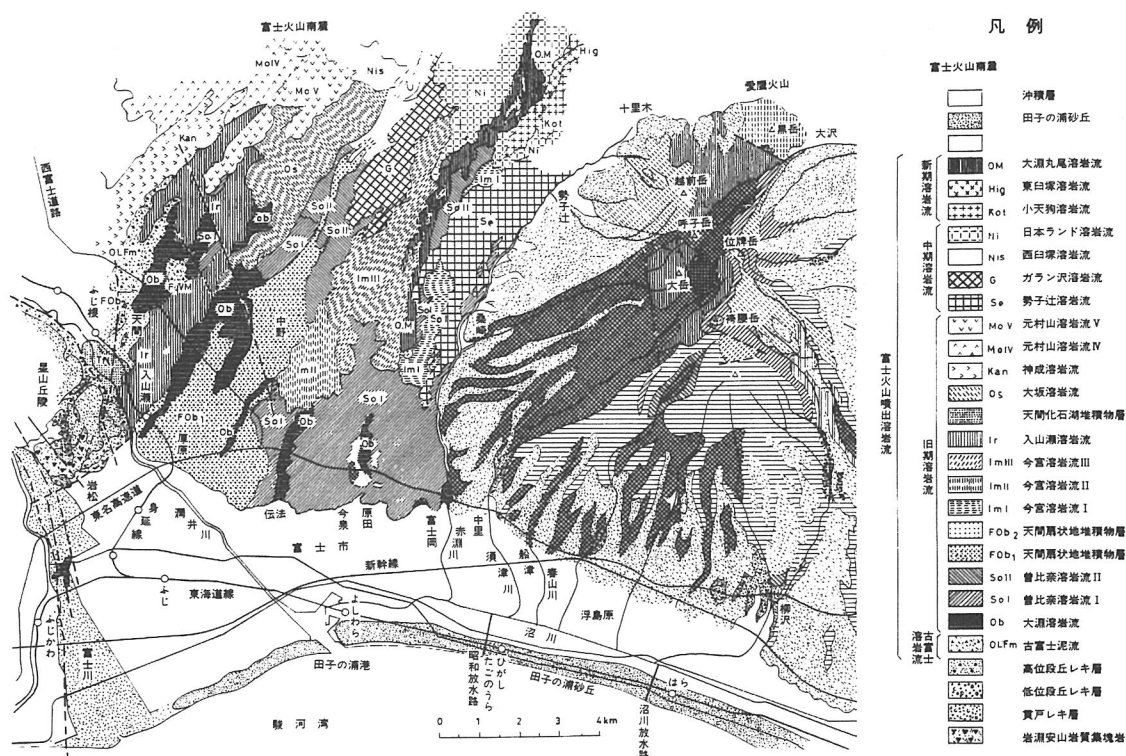
## 第1節 遺跡の位置と自然環境

ジンゲン沢遺跡は富士市の北西部、天間地区に所在し、富士宮市と接する市境に位置する。富士市街地から山梨県大月市に至る国道139号を北上し、現在建設中の第二東名を抜けると天間地区に入る。ここは富士山南麓のなだらかな丘陵部と、潤井川沖積地で形成される地域である。ジンゲン沢遺跡は丘陵を縦断する福泉川（慈眼寺川）の左岸、標高100m前後に位置し、埋没谷の東側は天間沢遺跡が所在している。

富士山南麓の縄文時代の遺跡分布は、本遺跡と東隣为天間沢遺跡以东には連続せず、約7km南東の中島遺跡まで空白となっている。この範囲は、新富士火山起源の大淵扇状地に該当するため、縄文時代の遺跡が深く埋没している可能性がある。富士山南麓の遺跡は、活発に活動する新富士火山の被害や自然災害というリスクを伴うものの、愛鷹山南東麓とともに、縄文人の生活により適合した環境にあったことが想定される。

潤井川を挟んだ西岸、岩本山の丘陵にも縄文時代の遺跡が立地するが、潤井川の他に河川はなく、なだらかな丘陵も発達せず、かつ急斜面である。このような地形からみても、富士山南麓は縄文時代の遺跡立地には最適な環境であったといえる。

富士山南麓のなだらかな丘陵上に立地する本遺跡の自然的環境としては、富士宮市の若宮・代官屋敷・杉田・箕輪遺跡と類似した環境が想定され、次節では同一環境の遺跡群として、歴史的環境を概観してみたい。



第1図 富士火山南麓・愛鷹火山地質図

## 第2節 歴史的環境

富士市内の遺跡立地については、『富士市の埋蔵文化財（遺跡編）1986』において、地理的特徴から四つの地域区分がされている。これらは、西から「岩本山と潤井川以西の遺跡」「富士山南麓の遺跡」

「浮島沼と愛鷹山南西麓の遺跡」「田子浦砂丘上の遺跡」からなる。なお、加島平野と呼ばれる、潤井川から現富士川までの間、旧富士市域は富士川の氾濫原であり、古代以前の遺跡の分布は皆無である。この地域が歴史の舞台として登場するのは、戦国時代以降であり、「蓼原」「前田」「鮫島」「宮島」という集落が戦国期の文書に登場してくるのが最初である。

本遺跡は「富士山南麓の遺跡群」に該当しており、この立地は前節で述べたように、富士宮市の南東部、若宮・代官屋敷遺跡と同一の地理的自然的環境にあるといえる。本節ではこのような認識をもとに、富士宮市の縄文時代の遺跡をも含めて、富士山南麓遺跡群として、縄文時代を概観してみたい。縄文時代以外の遺跡と、他地域の状況は必要に応じて取り上げる。

「富士山南麓遺跡群」の範囲は南北に長く、大淵扇状地堆積物で空白域となった地域の東西で大きく二分される。西半の区域は本遺跡を南端とし、富士宮市村山を北端とし、その範囲は、南北6 km、東西3 kmに及ぶ。東半は空白地帯をはさんで、富士市中島・宇東川・花川戸遺跡等が所在し、その範囲は東西南北約3kmである。

富士山南麓遺跡群の旧石器時代遺跡の痕跡は薄く、この時期に該当する遺物として、富士市天間沢遺跡からナイフ型石器が表採されている程度である。旧石器時代の遺跡は、新富士火山の溶岩流が及ばない範囲で分布が確認され、富士宮市沼久保・星山地区、富士郡芝川町で遺跡の存在が認められている。なかでも芝川町大鹿窪遺跡は国指定史跡として著明な遺跡である。

縄文時代の開始は早期中葉の時期と云われ、田戸式系土器群が盛行する時期に押型文が共伴することが知られていた。しかし、西富士道路建設に伴い調査された富士宮市若宮遺跡では、竪穴住居跡・炉穴・集石跡が発見され、この地域では最古の集落と位置づけられた。表裏縄文を施す土器から始まるこの集落の発見は、それ以前の貧弱な縄文早期の姿を覆す大きな成果をあげた。

早期後葉の条痕文系土器群（茅山式系）の時期は、富士宮市星山丘陵一帯に集中して遺跡が展開しているが、富士山南麓にも富士宮市代官屋敷遺跡、富士市天間沢遺跡天神原地点にも当該土器が出土し、この時期以降の遺跡増加の前兆を示している。

富士山南麓の縄文時代遺跡群の最盛期は中期である。前葉の時期において、この地域は勝坂式土器文化圏の周辺部となる。この時期の遺跡は小規模で、単独の時期で消滅する傾向が強い。こうしたなかで中期中葉の加曾利E式期になると、状況は一変する。

加曾利E式期の特徴として、富士山南麓の遺跡の爆発的な増加があげられる。この時期は、遺構や遺物の数量からみても、富士山南麓の遺跡群が最も繁栄した時期であるといえる。ある試算では、富士山南麓の縄文時代遺跡の70%がこの時期に集中するという（若宮遺跡 1983）。富士宮市箕輪・滝ノ上・滝戸遺跡、富士市天間沢遺跡が代表的な遺跡である。

富士市天間沢遺跡では、竪穴住居跡・配石・土坑が検出され大規模集落の実態が次第に解明されつつある。これは、富士市内の愛鷹南麓の遺跡でも同一の傾向が指摘され、富士市・富士宮市域に展開



第2図 周辺遺跡分布図

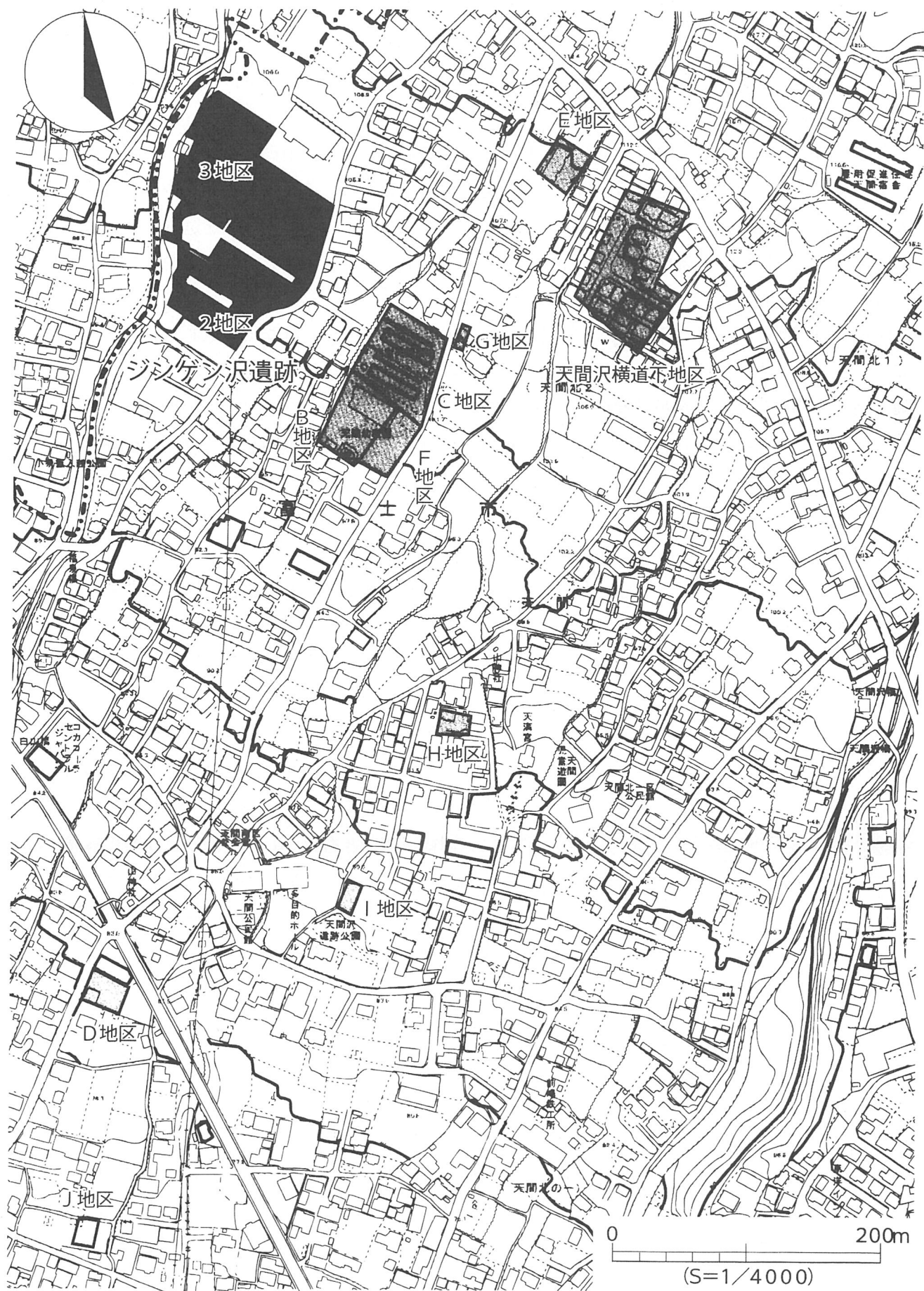
1 念信園遺跡	11 川窪遺跡	21 祢宜ノ前遺跡	A 上井奈古墳群	K 滝川古墳群
2 上井奈遺跡	12 中桁・中ノ坪遺跡	22 向山遺跡	B 鎌研古墳群	L 比奈1古墳群
3 奥の原A遺跡	13 東平遺跡	23 宮添遺跡	C 滝戸原古墳群	M 富士岡1古墳群
4 羽渕平遺跡	14 滝下遺跡	24 的場遺跡	D 土手内・中原1古墳群	N 中里4古墳群
5 天間沢遺跡	15 国久保遺跡	25 上の段遺跡	E 伝法1古墳群	O 神谷古墳群
6 ジンゲン沢遺跡	16 舟久保遺跡	26 寺の上遺跡	F 片倉3古墳群	P 船津1古墳群
7 川坂遺跡	17 中島遺跡	27 三新田遺跡	G 石坂1古墳群	Q 船津7古墳群
8 天間代山遺跡	18 宇東川遺跡	28 柏原遺跡	H 高山古墳群	
9 沢東A遺跡	19 沖田遺跡		I 一色2古墳群	
10 沢東B遺跡	20 花守遺跡		J 一色8古墳群	

する広範な動きといえる。

縄文時代後期になると、遺跡数が激減する。この時期は、低地への進出が顕著に認められる時期で、縄文時代の大きな転換期に位置づけられる。富士山南麓遺跡群では、富士市域の天間沢遺跡、原田・藤岡地域の中島・赫夜姫・斉藤上遺跡が営まれている。さらに愛鷹山南麓遺跡群の花川戸遺跡（後期）田子ノ浦砂丘遺跡群の三新田遺跡（晩期）が認められるが、明確な遺構を伴わず土器が出土する程度である。

さらに富士宮市域では、堀ノ内Ⅱ式期には遺跡数が激減し、わずかな歴代遺跡を残すだけとなり、晩期では数箇所でも微量な資料が得られている程度という（若宮遺跡 1983）。富士市・富士宮市域においては、後期～晩期の遺跡は低地に立地する共通点が認められ、かつ遺構・遺物の様相も貧弱となるようである。





第3図 ジンゲン沢遺跡・天間沢遺跡分布図

中期を画期とする前後で遺跡立地の標高を比較してみよう。早期～中期の遺跡は、富士市においては標高 300m の桑崎遺跡、富士宮市では 500m の村山浅間神社遺跡を高所の北限とする。これに対し、後期～晩期の遺跡は富士市域においては、赫夜姫遺跡が標高 40m に、天間沢遺跡は 70m ～ 150m に分布している。

前者の時期にも、低地には縄文遺跡が分布している。このことは、地理的環境や標高の高低に関係なく、生業を営む上での条件を満たした場所の選択が優先したことを類推させる。後者の遺跡については、遺跡の垂直分布が低地に限定され、遺跡は平野部を望む丘陵や河岸段丘を選択している。従って、後者の時期には、生業を営み生活環境を確保するのに、平野部に面した低地が第一の条件であったことが考えられる。

晩期の資料はほとんど表採によるもので、遺跡の範囲や内容は不明確な状況である。富士川下流域では、富士川町浅間林遺跡と駿河山王遺跡がこの時期の代表的な遺跡である。縄文時代後期～晩期の遺跡数の激減は、生業形態や自然環境の変化等、様々な要因が考えられるが、静岡県中東部地域において広範囲にみられる現象であり、今後の検討課題として重要なテーマといえる。

### 第3節 基本層序

ジンゲン沢遺跡の基盤層は古富士火山の噴出物に起因する古富士泥流上扇状地堆積物であり、第2地区・3地区共通の層序を以下に記す。

GL-0 —	I	第Ⅰ層 表土、埋土、旧耕作土等
	II	第Ⅱ層 黒色土 (10YR1.7/1) 橙色をした粉末状のスコリア＝大沢スコリアを極多量に含み、硬く締まっている。乾燥すると白っぽくなる。第2地区の南半には良好に残存するが、第3地区にはほとんど残存しない。遺構・遺物ともになし。大沢ラピリ層相当層。
	III	第Ⅲ層 黒褐色土 (10YR2/2)。橙色のスコリア粒を少量含む。締まりが強く、粘性はあまりない。縄文中期の包含層並びに遺構覆土となる層である。第3地区内においては主に南西部に残存し、試掘確認調査及び本調査で検出した竪穴住居跡の覆土は本層が主体となっている。出土遺物は藤内期から曽利期が主体である。栗色土層相当層。
	IVa	
GL-0.5M—	IVb	
	V	
	VI	
GL-1M —	VII	
	VIII	

第4図 土層柱状図

第Ⅳa層 黒褐色土 (10YR3/2)。第Ⅲ層に比べてやや明るい。橙色のスコリアを少量含む。粘性がややあり、締まりは強い。縄文早期の遺物を含む。断面観察における第Ⅲ層と第Ⅳ層の分層は比較的容易であるが、平面精査時や遺物の帰属層位を決める場合には区別が付きにくい。富士黒層相当層。

第Ⅳb層 第3地区の南側で確認される。スコリアを含まない層である。富士黒相当層か。

第Ⅴ層 暗褐色土 (10YR2/3)。第Ⅳ層と比べてかなり明るい。鮮やかな橙色のスコリアを少量含む。

縄文早期の遺物を少量ながら含む。漸移層

第Ⅵ層 褐色土 (7.5YR4/4)。ローム質土。やや赤みの強い層。溶岩小礫を含む。橙色のスコリア粒をやや多く含む。粘性がやや強くなる。無遺物層。休場相当層。

第Ⅶ層 黄褐色土 (10YR4/4)。ローム質土。水分が多くなり、粘性がかなり強くなる。溶岩礫を多く含むようになり、スコリアが散見される。本層を掘り下げると、人頭大の溶岩礫が固結した状態ででてくる。これは本地域の基盤層である古富士泥流である。不透水層のため本層を剥ぎ出しの状態にしておくと数時間で水が溜まる。

## 第2章 調査の経緯

### 第1節 ジンゲン沢遺跡と天間沢遺跡

ジンゲン沢遺跡は、発見以来、天間沢遺跡の一部に包括されて扱われてきた。今回、天間沢遺跡も含めて、調査履歴を整理してみる。

文献上におけるジンゲン沢遺跡の初出は、昭和36年静岡県教育委員会刊行の『静岡県遺跡地名表』である。同書において富士郡・富士宮市・吉原市を担当した中野国雄によれば、昭和32年以前にはジンゲン沢遺跡は確立されておらず、天間沢遺跡の一部として扱っていたようである。ちなみに同書において、ジンゲン沢遺跡は加曾利E式期の遺跡と紹介されているが、昭和59年富士市刊行の『鷹岡町史』において、中野の調査成果を検討した植松章八は、本遺跡から採集される土器を、早期中葉の押型文土器、早期末の茅山上層式土器、早期末から前期の木島式土器としている。

天間沢遺跡の発見は、富士宮地域において精力的に遺跡踏査及び遺物収集を行っていた大宮町（富士宮市）の医師佐野武勇によるもので、昭和2・3年のことである。天間沢遺跡発見の経緯については氏の『人類学雑誌』寄稿の2編の論文に詳しい。戦後の高等学校郷土研究部活動で多くの学生が、この遺跡に足を踏み入れたようである。

天間沢遺跡における発掘調査は、昭和35年に中野国雄・稲垣甲子男による学術調査を第一次調査とし、現在までに25地区の発掘調査が実施されている。天間沢遺跡発掘調査の歴史上特筆すべき点は、遺跡範囲確認のため計画的な確認調査が行われてきたことにある。天間幼稚園建築に伴って調査されたA地区、市営住宅のB地区で中期全般を通じて、住居跡や集石等を確認している。

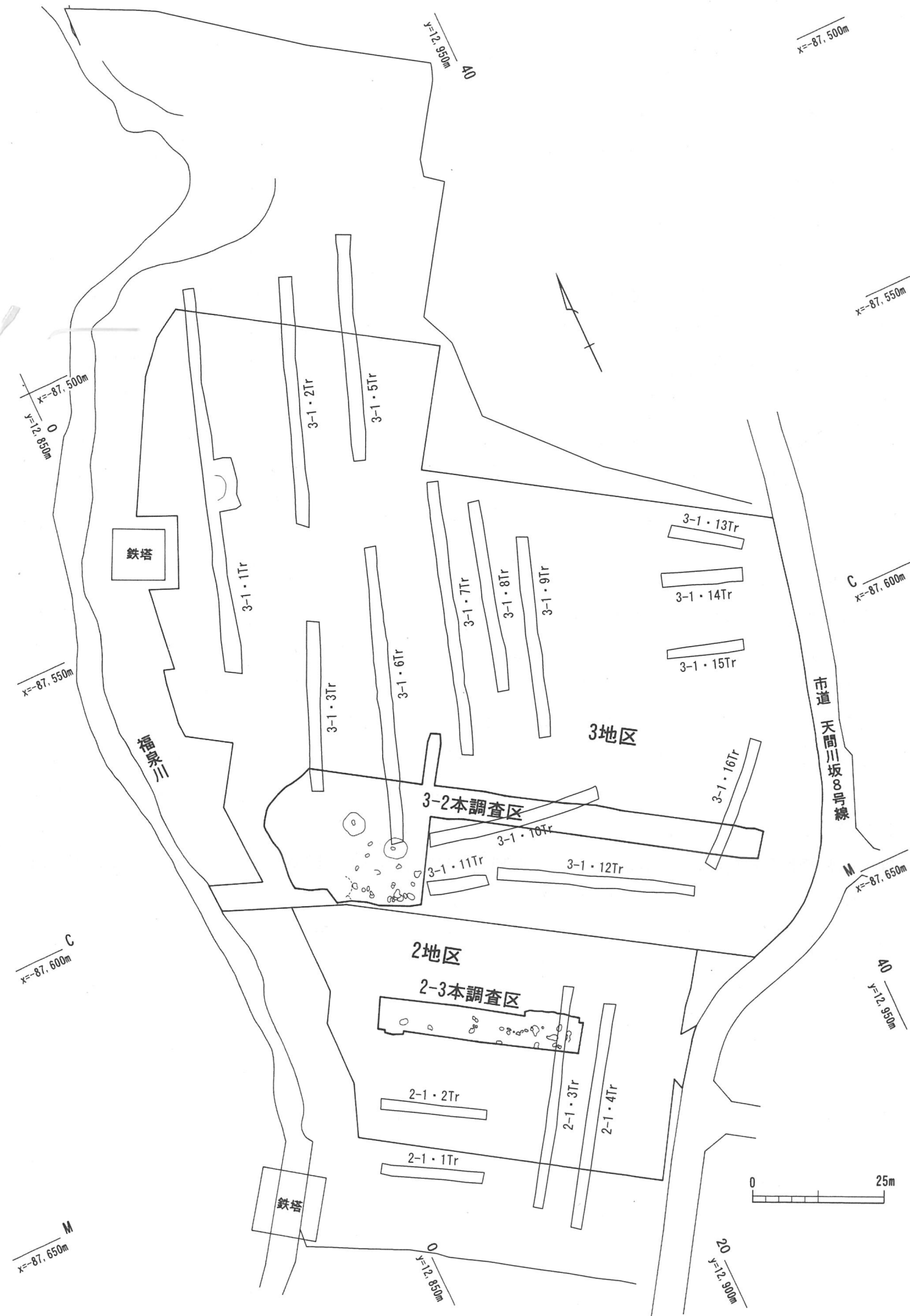
### 第2節 調査に至る経緯

今回報告する第2・3地区は、隣接する調査区である。発掘調査事業としては異なる委託契約のもとに実施されたが、同一遺跡でかつ隣接地ということで報告は二つの調査区を合わせて行うこととした。以下、調査に至る経過をまとめてみる。

#### 第2地区

第2地区は長らく製紙関連会社の所有地で、今回の開発計画が持ち上がる以前は、地区のグラウンドとして利用されていた。当地における埋蔵文化財調査計画は平成14年12月に建設業者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出」に対応して行われた、試掘確認調査を一次調査としている。この調査では、トレンチを4本掘削した結果、本来は北から南に傾斜する地形であるが、北側を削り南に盛り平坦地を創出していることが判明した。

このため、敷地内北側では表土直下に縄文早期の包含層である基本層序の第4層が残存し、土坑・集石とみられる礫群が検出されが、大半の土坑は5層上面で検出されている。



第5図 ジンゲン沢遺跡全体図

出土した遺物は、縄文早期後半の条痕文系のみで、一部鵜ヶ島台式が認められるが、大半は野島式であった。

この一次調査以降、地権者が変更したこともあり、当地の開発の動きはしばらく止まった状態であったが、平成 17 年に第 3 地区の開発計画が立ち上がったことにより、この地区にも再度の動きがみられることが明らかになってきた。その動きとは 3 名の地権者が、それぞれ開発行為のかからないミニ開発で対応しようとしている内容であった。

これを受けて、文化振興課では、有限会社アバンスに対して、当該地が埋蔵文化財包蔵地である「ジゲン沢遺跡」であることを説明し、試掘確認調査の実施について同社から了承を得た。この結果、第二次調査を平成 17 年 7 月 8 日から行った。同調査では、縄文早期後半の遺物と土坑を確認した。その後、この事業を開発行為とするよう富士市土地対策課からの指導を受け、平成 17 年 9 月 30 日付で「埋蔵文化財発掘の届出」が、株式会社「日峰工業」代表取締役佐野守、有限会社「アバンス」代表取締役大木昭幸の連名で提出された。これを受けて、過去の試掘調査と開発内容を精査した結果、新設される道路部分 234㎡について、事業者負担で、本発掘調査を実施することになった。委託契約書と協定書は平成 17 年 10 月 11 日に締結された。

### 第 3 地区

ここは製紙関連会社の所有地で、以前はゴルフ練習場として利用されていたが、調査時には荒蕪地となっていた。当地において株式会社「緑地シンタク」代表取締役芹沢貢は分譲宅地造成事業を計画し、平成 17 年 3 月 4 日付で埋蔵文化財試掘確認調査依頼書を提出した。同依頼に対し、市教委文化振興課は、平成 17 年 5 月 12 日から 6 月 10 日まで試掘確認調査を実施した。

その結果、当該地は土砂の移動が激しく、調査区内の南と西以外は包含層が掘削されていたことを確認した。また東北東から西南西に向かって谷状の落ち込みが確認され、旧地形は起伏に富んでいたことが想定できた。発見された遺構は第 1 トレンチで円形プランと推定される竪穴住居跡で、覆土はほとんど残存しないが、炉穴及びそれに伴う縄文中期の曽利式土器を検出した。南端部において、遺構未確認であるが包含層中から縄文早期後半の土器や石器を検出した。

この調査結果をもとに取り扱いについての調整を行ったが、保護層が確保できない調整地部分と、道路敷の一部、あわせて 1040㎡について、事業者負担で本発掘調査を実施することとなった。委託契約書と協定書は平成 17 年 10 月 21 日付けで締結された。



## 第3章 遺構の調査

### 第1節 2区 調査の経緯

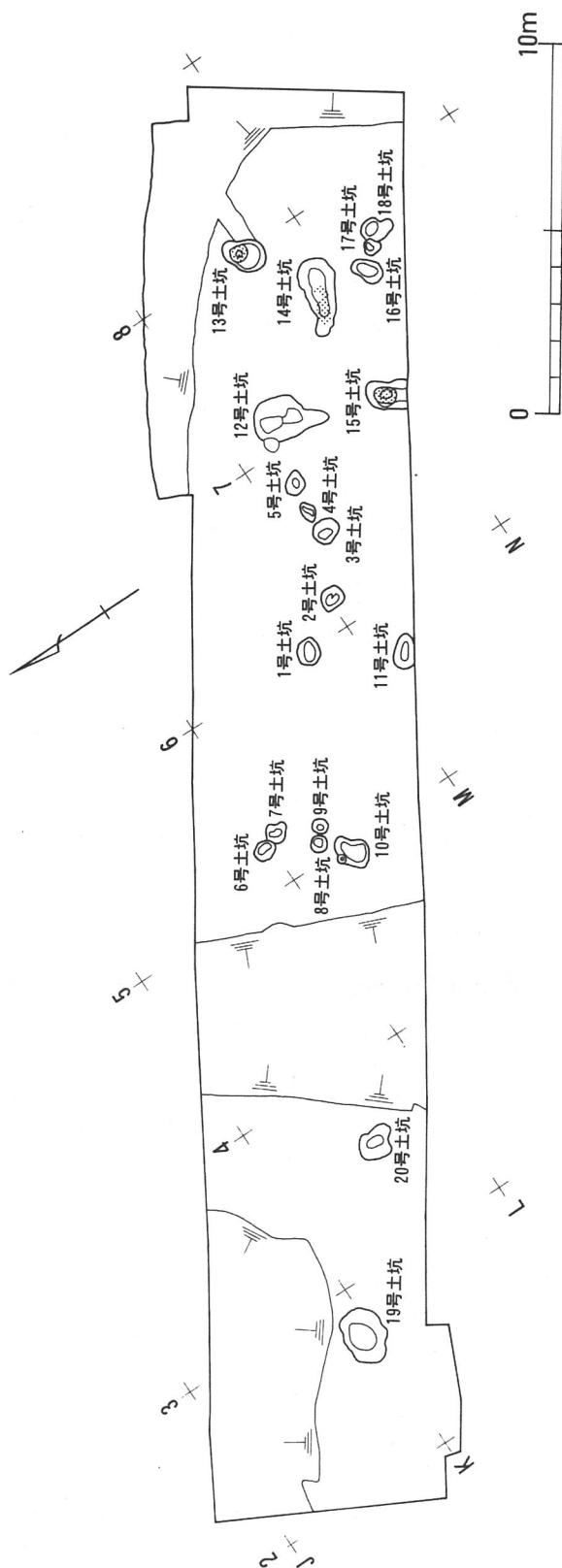
本発掘調査は平成17年10月17日に開始した。表土は0.45m<sup>3</sup>バックホーで除去し、人力により包含層を除去し、遺構の検出に務めた。包含層遺物はトータルステーションを用い、全点に座標をつけて取り上げた。確認された遺構は検出順に遺構番号を付し、遺構サイズによって半裁または十字トレンチを掘削して断面図を作成した後完掘した。調査図面のうち各遺構図は主に1/10で作成し、全体図は1/100で作成した。写真は35mm(白黒、リバーサル)、6×4.5(白黒、リバーサル)を適宜撮影した。調査は平成17年11月10日に全景写真を撮影して終了した。

#### 資料整理と報告書作成

資料整理と報告書作成業務は平成18年度事業として平成18年7月1日に委託契約を締結した。遺物の洗浄については現地調査と並行して行っていたため、18年度は遺物の注記から始めている。遺物注記がなされた土器は接合を行い、接合関係を遺物出土状況図として作成した。土器実測には拓本を併用した。なお、石器類の内、打製石斧・石鏃・石匙の実測は株式会社フジヤマに委託した。最終的に平成19年3月30日に本報告書を刊行して発掘調査業務を終了した。

### 第2節 2区 検出された遺構

縄文時代の遺構は第Ⅴ層を検出面として、土坑20基を検出した。土坑20基の内訳は、明瞭な焼成面と、焼土塊を含むものが2基、礫が充填されるものが1基、特徴を見出せない単純なものが17基である。形態は不整円形のものが多い。大きさは小規模なものも一括して土坑として扱った。



第6図 2区全体図

## 土坑

### 1号土坑（第7図）

L-6 グリット南西隅に位置し、第Ⅴ層上面で検出した。直径 0.80 m のほぼ円形で、検出面からの底までは、約 10cm と浅い。覆土はⅣ a 層が主体でⅥ層を少量混入し、炭化物が微量含まれる。遺物は認められない。

1	暗褐色土層	しまり強い。橙色スリア少量混入。ローム・ロック少量、炭化物微量混入。
---	-------	------------------------------------

### 2号土坑（第7図）

L-6 グリット南西隅に位置する。直径 0.70 m のほぼ円形で、検出面から底までは約 20cm と浅い。覆土はⅣ a 層が主体でⅥ層を少量混入する。遺物は認められない。

1	黒褐色土層	しまり強い。橙色スリア少量混入。下部にローム・ロック混入。
---	-------	-------------------------------

### 3号・4号土坑（第7図）

3号・4号土坑は、M-6 グリット内北に位置する隣接する土坑である。3号土坑は、直径は 0.74 m、五角形に近い円形である。検出面から底までの深さは約 25cm を測る。覆土はⅣ a 層が主体で、土坑縁辺部と底部付近はⅥ層を多量に混入する。遺物は出土していない。4号土坑は、長さ 0.56 m、幅 0.38 m でやや丸みのある三角形である。検出面から底面までは 15cm と浅い。覆土は第Ⅳ a 層が主体である。遺物は出土していない。

1	黒褐色土層	しまり強い。
2	黒褐色土層	しまり強い。橙色スリア少量混入。下部にローム・ロック混入。
3	黒褐色土層	しまりやや強い。橙色スリアやや多く混入。ローム・ロック多量混入。

### 5号土坑（第7図）

M-6 グリット北東隅に位置し、4号土坑に隣接する。長さ 0.66 m、幅 0.47 m で卵型をしている。検出面から底面までの深さは 23cm である。覆土はⅣ a 層が主体であるが、底部付近はⅥ層が主体となる。遺物は出土していない。

1	黒褐色土層	しまり強い。橙色スリア少量混入。下部にローム・ロック混入。
2	黒褐色土層	しまりやや強い。橙色スリアやや多く混入。ローム・ロック多量混入。
3	褐色ローム層	しまりやや弱い。黒褐色土少量混入。

### 6号・7号土坑（第7図）

6号・7号土坑は、隣接する土坑である。6号土坑は、K-5 グリットに位置し、長さ 0.59 m、幅 0.48 m で不整円形をしている。覆土はⅣ a 層が主体となり検出面から底面までの深さは 10cm を測る。7号土坑は、L-5 グリットに位置し、直径は 0.58 m でほぼ円形を呈する。覆土はⅣ a 層が主体となり検出面から底面までの深さは 18cm を測る。底面は平である。

1	黒褐色土層	しまり強い。橙色スリア微量混入。下部にローム・ロック、礫少量混入。
2	褐色ローム層	しまり強い。橙色少量混入。黒褐色土、炭酸物粒微量混入。

### 8号土坑（第7図）



8号・9号土坑は、L-5 グリット北西に位置する隣接する土坑である。8号土坑は、直径は0.48 mでほぼ円形を呈する。覆土はIV a層が主体となり検出面から底面までの深さは12cmを測る。9号土坑は、直径は0.48 mでほぼ円形を呈する。覆土はIV a層が主体となり検出面から底面までの深さは12cmを測る。

1	黒褐色土層	しまり強い。橙色スリア微量混入。下部にロームブロック、礫少量混入。
2	褐色ローム層	しまり強い。橙色スリア少量混入。黒褐色土、炭酸物粒微量混入。

#### 10号土坑（第7図）

L-4・L-5 グリットに位置する。長さ1.08 m、幅0.78 mで不整形な楕円形をしている。底面は平底で、検出面からの深さは18cmを測る。覆土はIV a層が主体となる。

1	黒褐色土層	しまり強い。橙色スリア微量混入。下部にロームブロック、礫少量混入。
2	褐色ローム層	しまり強い。橙色スリア少量混入。黒褐色土、炭酸物粒微量混入。

#### 11号土坑（第7図）

M-5 グリットに位置する。長さ0.94 m、幅0.60 mで卵形をしている。覆土はIV a層が主体となり検出面から底面までの深さは27cmを測る。

1	黒褐色土層	しまりやや強い。橙色スリア微量混入。下部にロームブロック微量、小礫少量混入。
2	褐色ローム層	しまりやや強い。橙色スリア極微量混入。黒褐色土、炭酸物粒微量混入。

#### 12号土坑（第7図）

M-7 グリットに位置する。長さ1.86 m、幅1.12 mで南側の一部が張り出した不整形な楕円形をしている。覆土はIV a層が主体となり検出面から底面までの深さは46cmを測る。底面の北側は、やや落ち込んでいる。

1	黒褐色土層	しまり強い。橙色スリア多量混入。下部にロームブロック混入。
2	褐色ローム層	しまりやや強い。粘性あり。橙色スリアやや多く混入。炭酸物粒微量混入。

#### 13号土坑（第8図）

M-7・M-8 グリットに位置する。長さ1.20 m、幅0.80 mで卵形をしている。覆土はIV a層が主体となり検出面から底面までの深さは22cmを測る。底面の東側はピット状に落ち込み、覆土には焼土塊を多量に含んでいる。

1	黒褐色土層	しまり強い。橙色スリア多量混入。下部にロームブロック混入。
2	暗褐色土層	しまりやや強い。粘性あり。橙色スリア多量混入。炭酸物粒微量、焼土多量混入。

#### 14号土坑（第8図）

M-7 グリット南に位置する。長さ2.12 m、幅0.97 mで不整形な卵形をしている。覆土はIV a層が主体となり、焼土が混入している。底面は平であり、検出面からの深さは42cmを測る。

1	黒褐色土層	しまり強い。橙色スリアやや多く混入。褐色土多量混入。
2	黒褐色土層	橙色スリア多量混入。
3	黒褐色土層	しまりやや弱い。橙色スリア多量混入。焼土混入。

#### 15号土坑（第8図）

M-6 グリット南東に位置し、南端は調査区域外へ出る。長さ1.12 m、幅0.80 mで不整形な卵形

をしている。覆土はIV a 層が主体となり、焼土塊を多量に含んでいる。底面は平であり、検出面からの深さは 43cm を測る。

1	黒褐色土層	しまり強い。粘性ややあり。焼土やや多く混入。
2	黒褐色土層	ローム・ロック少量、焼土多量混入。

#### 16号・17号土坑（第8図）

16号・17号土坑は、N-7 グリット北西に位置する隣接する土坑である。16号土坑は、長さ 0.85 m、幅 0.60 m で不整形な楕円形を呈する。底面は平である。覆土はIV a 層が主体となり検出面から底面までの深さは 19cm を測る。17号土坑は、直径 0.43 m で不整形円形を呈する。覆土はIV a 層が主体となり検出面から底面までの深さは 19cm を測る。

1	暗褐色土層	しまり強い。粘性なし。
2	黒褐色土層	しまりあり。粘性ややあり。

#### 18号土坑（第8図）

N-7 グリットに位置する。長さ 0.88 m、幅 0.72 m で南側に張り出す不整形円形を呈する。覆土はIV a 層が主体となり検出面から底面までの深さは 22cm を測る。覆土中には礫が充填されている。

1	暗褐色土層	しまりあり。粘性あり。橙色珪砂混入。炭化物混入。
---	-------	--------------------------

#### 19号土坑（第8図）

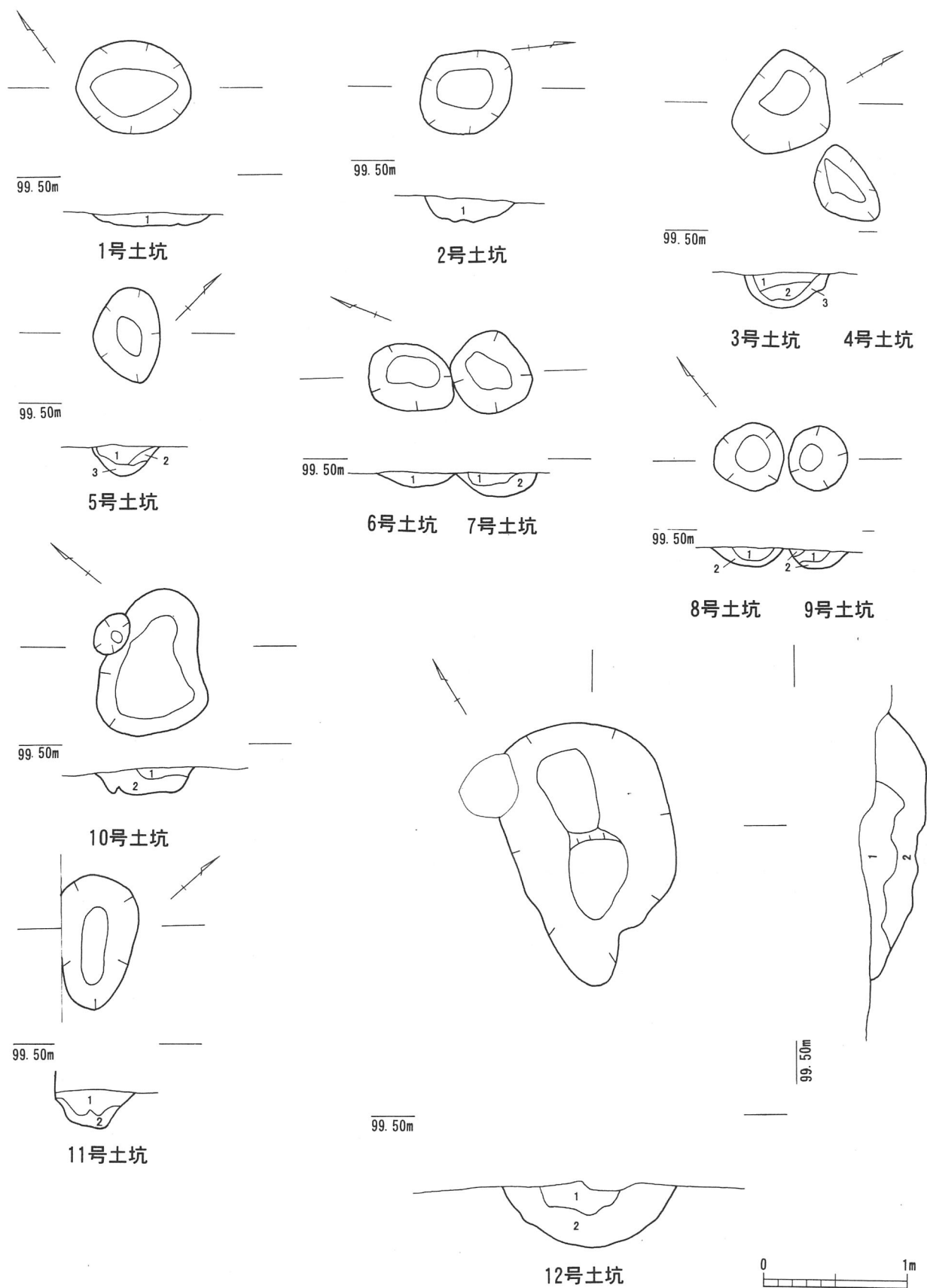
J-2・K-2 グリットに位置する。長さ 1.54 m、幅 1.12 m で楕円形を呈する。覆土はIV a 層が主体となり検出面から底面までの深さは 25cm を測る。

1	黒褐色土層	しまりあり。粘性少量。橙色珪砂少量混入。炭化物粒微量混入。
2	暗褐色土層	しまり弱い。粘性ややあり。橙色珪砂混入。ローム・ロック、溶岩粒少量混入。
3	黄褐色土層	しまりやや弱い。粘性あり。橙色珪砂微量混入。溶岩粒微量混入。

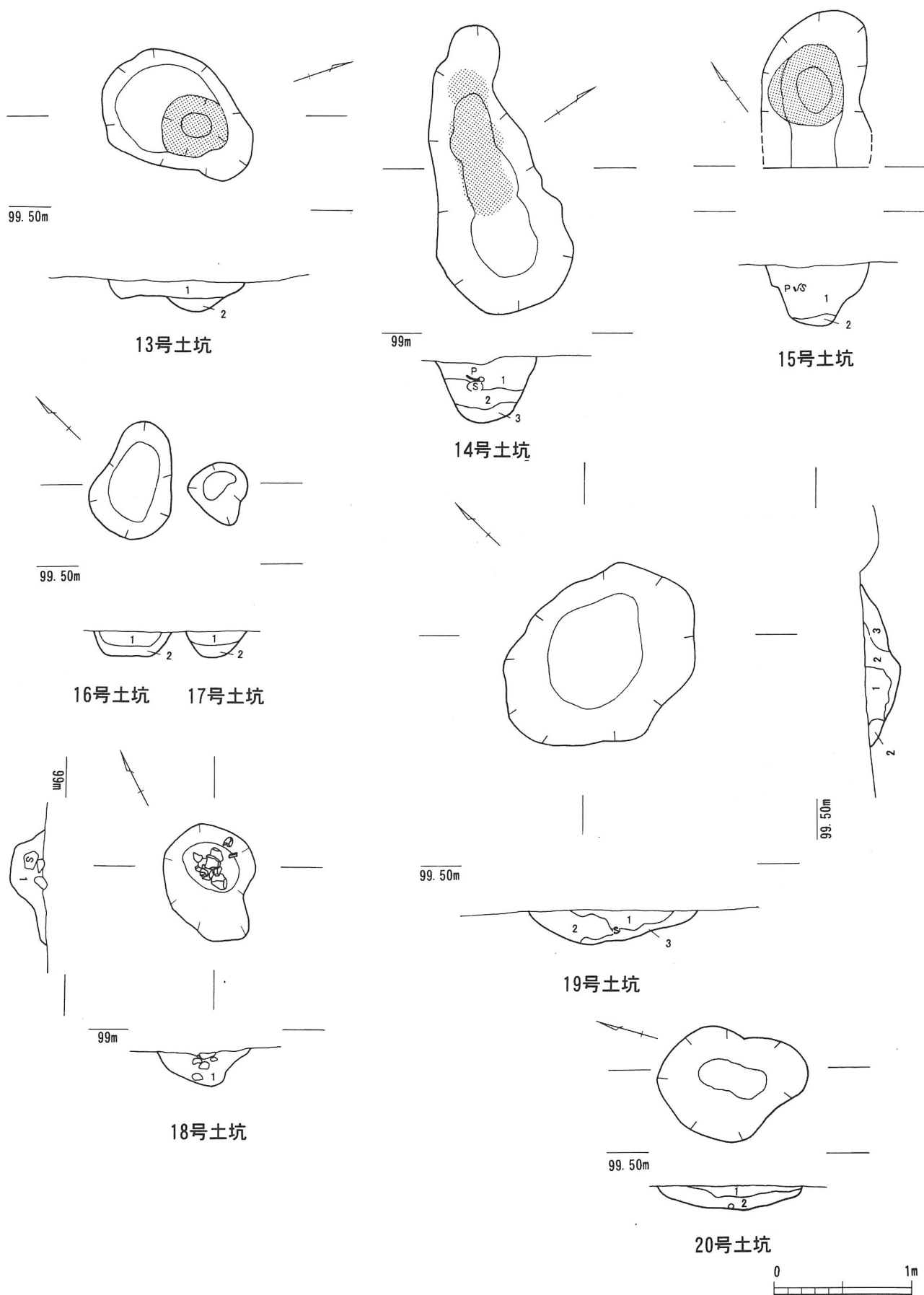
#### 20号土坑（第8図）

K-3 グリットに位置する。長さ 1.54 m、幅 1.12 m でやや南側に張り出す不整形円形を呈する。楕円形を呈する。覆土はIV a 層が主体となり検出面から底面までの深さは 25cm を測る。

1	黒褐色土層	しまり強い。橙色珪砂多量混入。下部にローム・ロック混入。
2	褐色ローム層	しまりやや強い。粘性あり。橙色珪砂やや多く混入。炭化物粒微量混入。



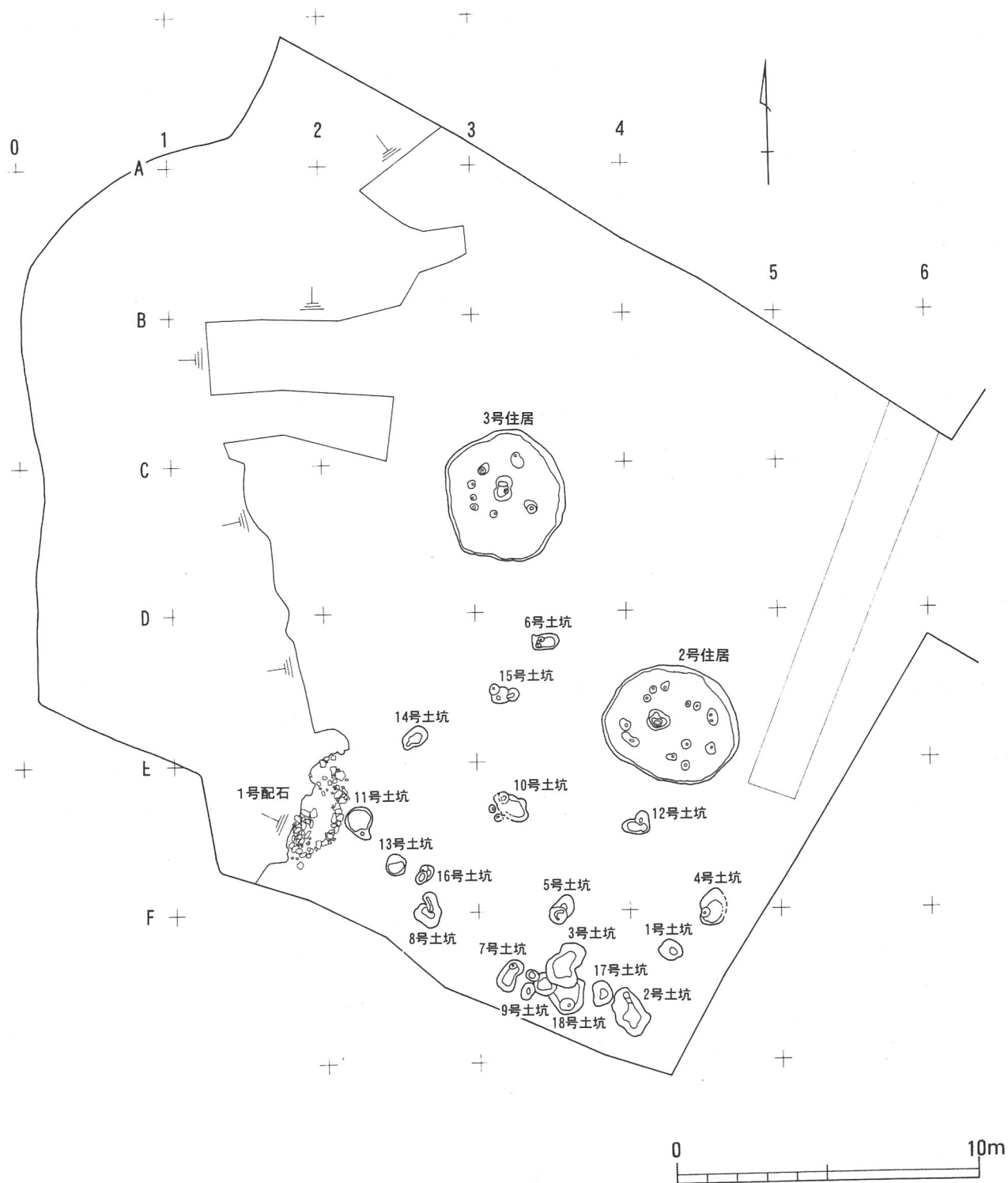
第7图 2区土坑实测图(1)



第8图 2区土坑实测图(2)

### 第3節 3区 調査の経緯

第3地区の本調査は平成17年11月7日から開始した。表土は0.7m<sup>3</sup>バックフォーで除去した後、人力による包含層掘削、遺構検出に努めた。包含層出土遺物はトータルステーションを用い、全点に座標値を付し取り上げた。



第9図 3区全体図

確認された遺構は、検出順に遺構番号を付し、遺構の規模に応じて半裁または十字のトレンチを掘削し、土層断面図を作成した。

各遺構図は主として 1/20 で作成し、全体図は 1/100 とした。写真は 35mm（白黒・リバーサル）と 6 × 4.5（白黒・リバーサル）を使用した。

調査は、平成 17 年 12 月 21 日に全景写真を撮影して終了した。

#### 資料整理と報告書作成

資料整理と報告書作成業務は平成 18 年度事業として、平成 18 年 7 月 1 日に委託契約を締結した。遺物の洗浄作業は現地調査で終了し、整理では遺物の注記から作業を開始した。遺物注記後の土器は接合を行い、接合関係を遺物出土状況図として作成した。土器実測には拓本を併用した。なお、打製石斧・石鏃・石匙の実測は株式フジヤマに委託した。最終的に平成 19 年 3 月 30 日に本報告書を刊行して発掘調査業務を終了した。

### 第 4 節 3 区 検出された遺構

縄文時代の遺構は第Ⅴ層を検出面として竪穴住居跡 2 軒、配石状遺構 1 基、土坑 18 基を検出した。竪穴住居跡は第Ⅳa 層を主体とする覆土で埋没し、藤内期～井戸尻期の遺物が検出されている。配石状遺構は西半を攪乱にて消失しているが形状は円形になることが想定でき、敷石住居の可能性も否定できない。土坑 18 基の内訳は、特徴を見出せない単純な覆土のものが全てで、焼成面や焼土塊を含むもの、あるいは礫が充填されるものは認められない。形態は不整円形のものが多い。大きさが小規模なものも一括して土坑と表現している。

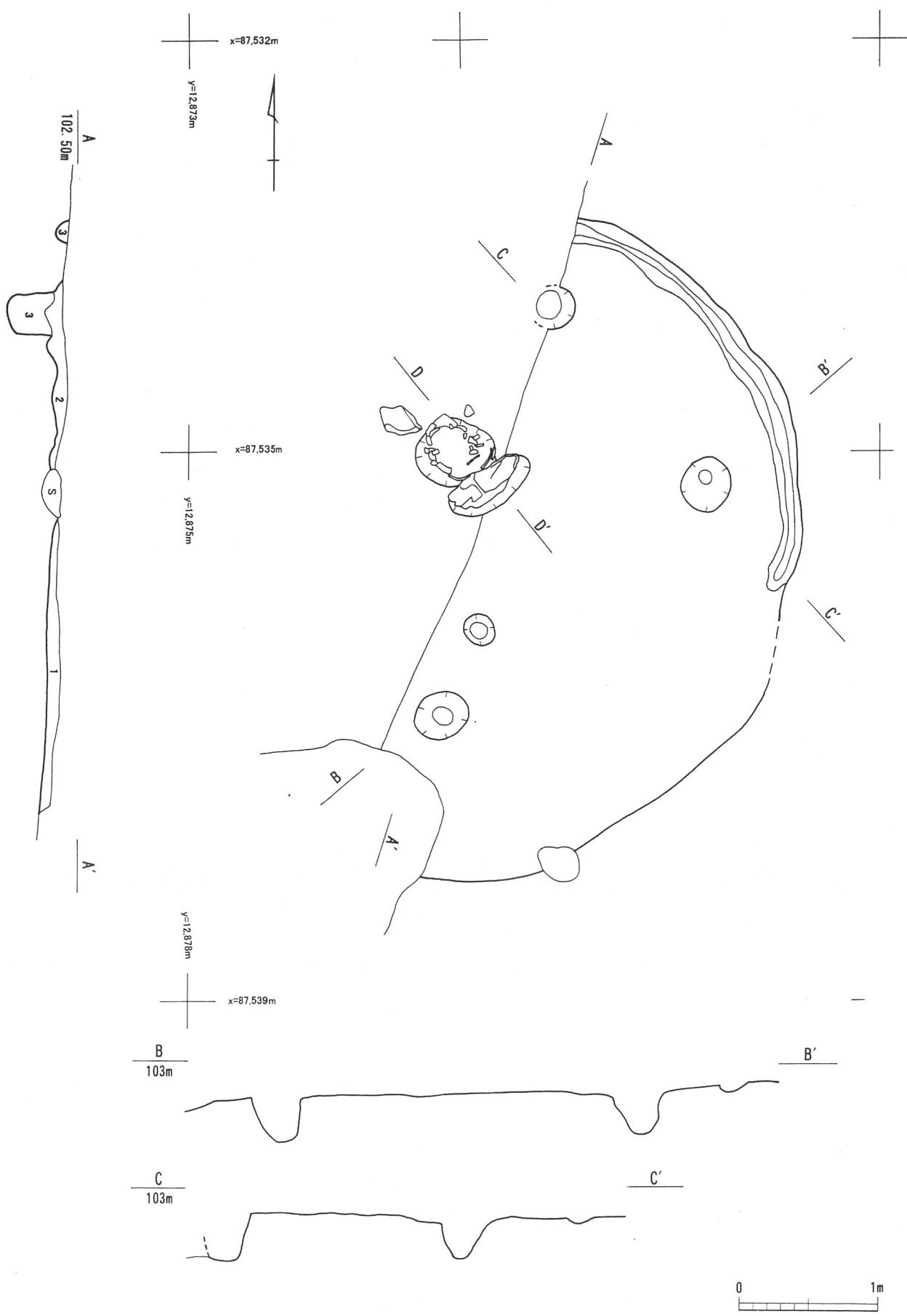
#### 竪穴住居跡

##### 1 号住居跡（第 10 図・第 11 図）

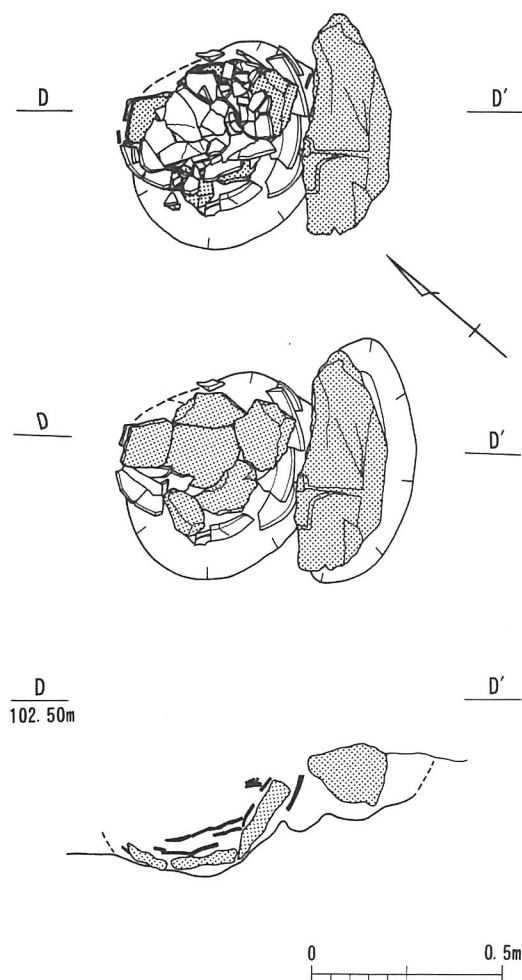
試掘確認調査第 1 トレンチ掘削時に旧耕作土直下から炉石と見られる板石とそれに伴う土器が出土したことから東側を拡張した結果、竪穴住居跡であることが判明した。覆土の遺存状態が数 cm と極めて不良なことから、今後の調査資料とするため完掘している。住居跡の西側はトレンチにより破壊されていて詳細な規模、形状に不明な点を残す。復元される住居プランはほぼ円形を呈し、最大で南北 4.92 m を測る。覆土はⅣa 層の黒褐色土が極一部で確認されたに過ぎず床面の残存状況も不明である。炉跡は住居跡のほぼ中央で、円形の炉穴を掘削後、板石を敷き形成される。炉内の縁辺部には主に深鉢形土器の口縁部の大破片を一重または二重になるように立てられており、被熱状況から炉壁として利用されていたと判断している。柱穴と考えられるピットは 4 ケ所で検出された。直径 40 cm 前後と 25 cm 前後のものがあ、床面より 30 cm 程の深さを持つ。

本住居跡からの出土遺物は、炉壁として利用されていた曽利Ⅲ～Ⅳ期及び加曽利期の深鉢形土器片のみである。（第 19 図 -16、-20 参照）

1	暗褐色土層	しまりやや強い。橙色珪灰微量混入。ローム岩混入。
2	黒褐色土層	しまりあり。橙色珪灰少量混入。
3	黒褐色土層	しまり弱い。橙色珪灰微量混入。ローム岩多量混入。



第 10 图 3 区第 1 号住居跡 实测图



第 11 図 3 区第 1 号住居跡 炉実測図

1	暗暗色土層	しまりあり。粘性弱い。橙色珪灰混入。溶岩粒少量、炭化物少量混入。
2	黒褐色土層	しまりあり。粘性ややあり。橙色珪灰混入。溶岩粒極少、炭化物混入。
3	暗褐色土層	しまりややあり。粘性ややあり。橙色珪灰混入。ロームブロック、炭化物微量混入。
4	暗褐色土層	しまりあり。粘性弱い。橙色珪灰微量混入。
5	黒色土層	焼土混入。
6	黒褐色土層	しまりやや強い。橙色珪灰微量混入。炭化物粒少量混入。

### 3号住居跡（第 13 図）

C-3 グリッドに位置し、第Ⅳ a 層上面で検出した。東西 3.92 m、南北 4.34 m で、円形というよりやや角張った方形に近い形状を成す。各壁はなだらかに立ち上がり、壁高は 20cm 程度を測る。覆土はⅢ層の黒褐色土が主体でほぼレンズ状の堆積をしめす。床面は第Ⅴ層を上面とし、貼床は確認されなかった。炉跡は住居跡のほぼ中央で、瓢箪型の不整円形を呈し、焼土中に被熱して脆くなった深鉢形土器の胴部破片が立てて置かれていた。炉跡内覆土は炭化物が多いが焼け方はあまり強くなく、焼土量は 2 号住居跡同様少ない。柱穴とみられるものを含めてピットは 8 ケ所で検出された。直径 40 cm 前後と直径 25cm 前後のものがあ、床面より 30cm 程の深さを持つ。

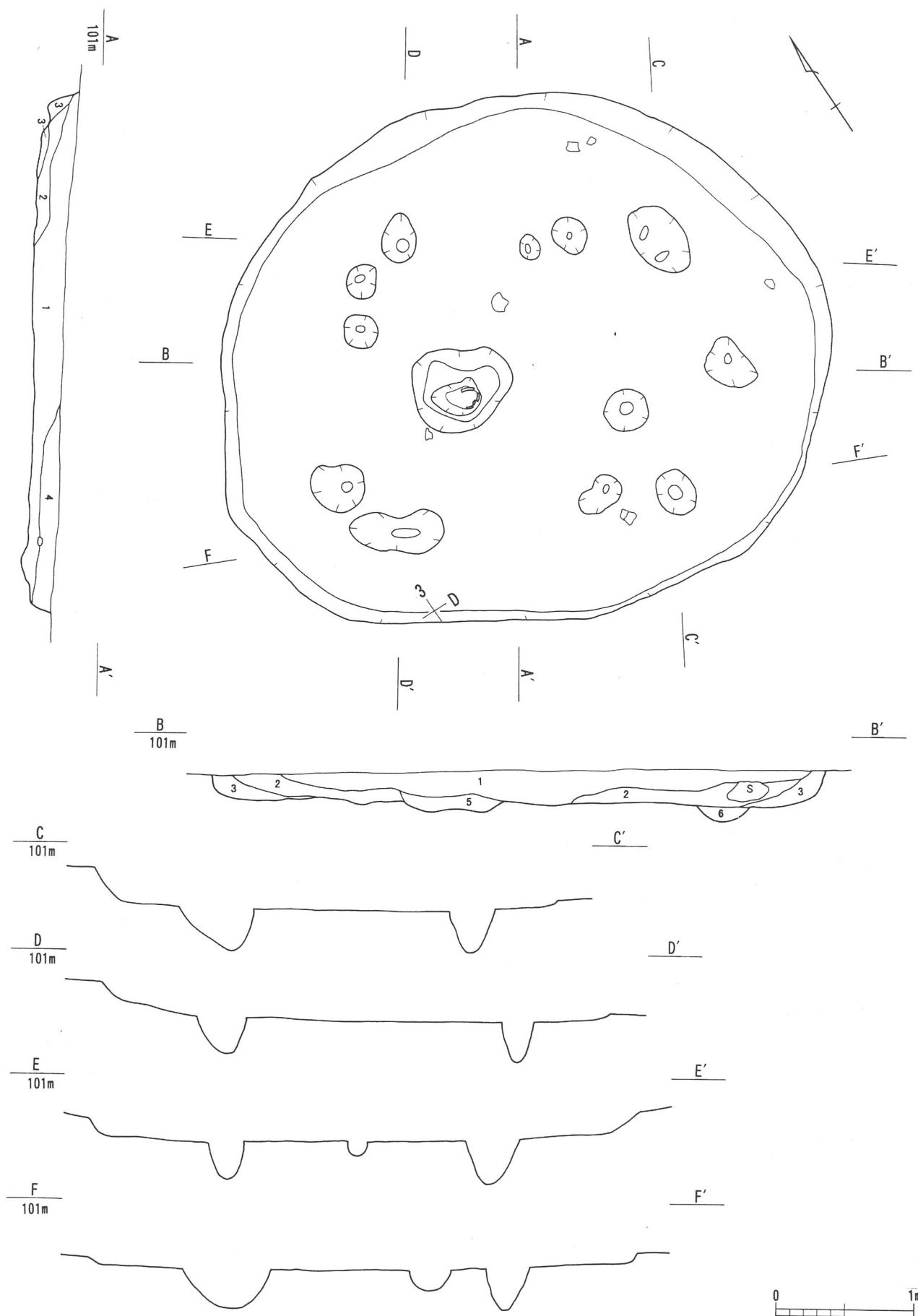
炉跡から出土した深鉢形土器破片は楕円区画隆帯の両脇をキャタピラ文で押さえた藤内式土器であ

### 2号住居跡（第 12 図）

D-4 グリッドに位置し、第Ⅳ a 層上面で検出した。東西 4.46 m、南北 3.84 m で、ほぼ楕円形状を成す。各壁はなだらかに立ち上がり、壁高は 30cm 程度を測る。覆土は第Ⅲ層の黒褐色土が主体でほぼレンズ状の堆積をしめす。床面はⅤ層を上面とし、貼床は確認されなかった。炉跡は住居跡の中央やや西寄り、床面をわずかに掘り窪めたほぼ円形を呈し、住居跡覆土全体を通して焼土の含有は少ない。柱穴とみられるものを含めてピットは 12 ケ所で検出された。直径 30 ～ 40cm と 20cm 前後のものがあ、床面より 30cm 程の深さを持つ。

炉跡・床面からの出土遺物は、床面少量である。覆土中からは打製石斧・石鏃の石製品が 4 点出土している。出土した土器の多くは藤内式土器であるが、東海系の土器の出土も認められる。





第 12 图 3 区第 2 号住居跡 实测图

る。覆土中位の濃密な焼土からはパネル文を展開する藤内式と見られる深鉢形土器が底部を欠いて出土している。なお、覆土中からは打製石斧・石鏃の石製品が7点出土している。出土した土器の多くは藤内式土器であるが、少量ではあるが山田平式土器も出土している。(第21図36～39参照)。

1	黒暗色土層	しまりやや強い。橙色珪灰やや多く混入。焼土少量、炭化物微量混入。
2	黒褐色土層	しまりやや強い。橙色珪灰やや多く混入。炭化物少量混入。
3	黒褐色土層	しまりやや強い。橙色珪灰混入。褐色土少量混入。
4	暗褐色土層	しまりやや強い。橙色珪灰やや少量混入。褐色土やや多量、炭化物粒少量混入。
5	黒褐色土層	しまりやや強い。橙色珪灰極微量混入。褐色土やや多量混入。
6	暗褐色土層	しまりやや強い。橙色珪灰微量混入。黒褐色土少量混入。
7	黒褐色土層	しまりやや強い。橙色珪灰微量混入。炭化物粒少量混入。
8	黒褐色土層	しまりやや強い。橙色珪灰少量混入。炭化物粒少量混入。
9	黒色土層	焼土混入。

## 配石状遺構

### 1号配石(第14図)

E-1・E-2グリッドに位置する。本来は円形になると推定されるが西側の福泉川に向かって地盤が崩落し消失したと見られる。直径4m程の半円状に残存する。石材は周辺から採取したと見られる火山岩質の角礫やわずかに自然研磨された円礫で比較的扁平なものを多く使っている。富士川流域や海岸部から持ち込まれたと見られる礫はまったく使用されていない。本配石は外周部分と内側部分とで礫の使用方法が異なる。外周部分は各礫の平坦面を比較的上面として礫を重複することなくほぼ一重に第Ⅴ層上面に配置する。一方内側部分は扁平な礫を立てて区画を行いその内側に礫を配している。礫を配するにあたっては掘り方を掘削することなく配石内には炉跡は認められず、被熱の痕跡もうかがえない。また配石の下部に土坑等の施設は認められない。遺物の出土は配石内においては認められず、周辺部においてもわずかに早期土器小破片や黒曜石剥片が出土したのみである。

本配石の形状は敷石住居の形状に近いものがあるが、本調査区内において縄文時代中期後半～後期の遺物がまったく認められないことや第Ⅴ層上面に配されていることから縄文時代早期に属すると考えておく。

## 土坑

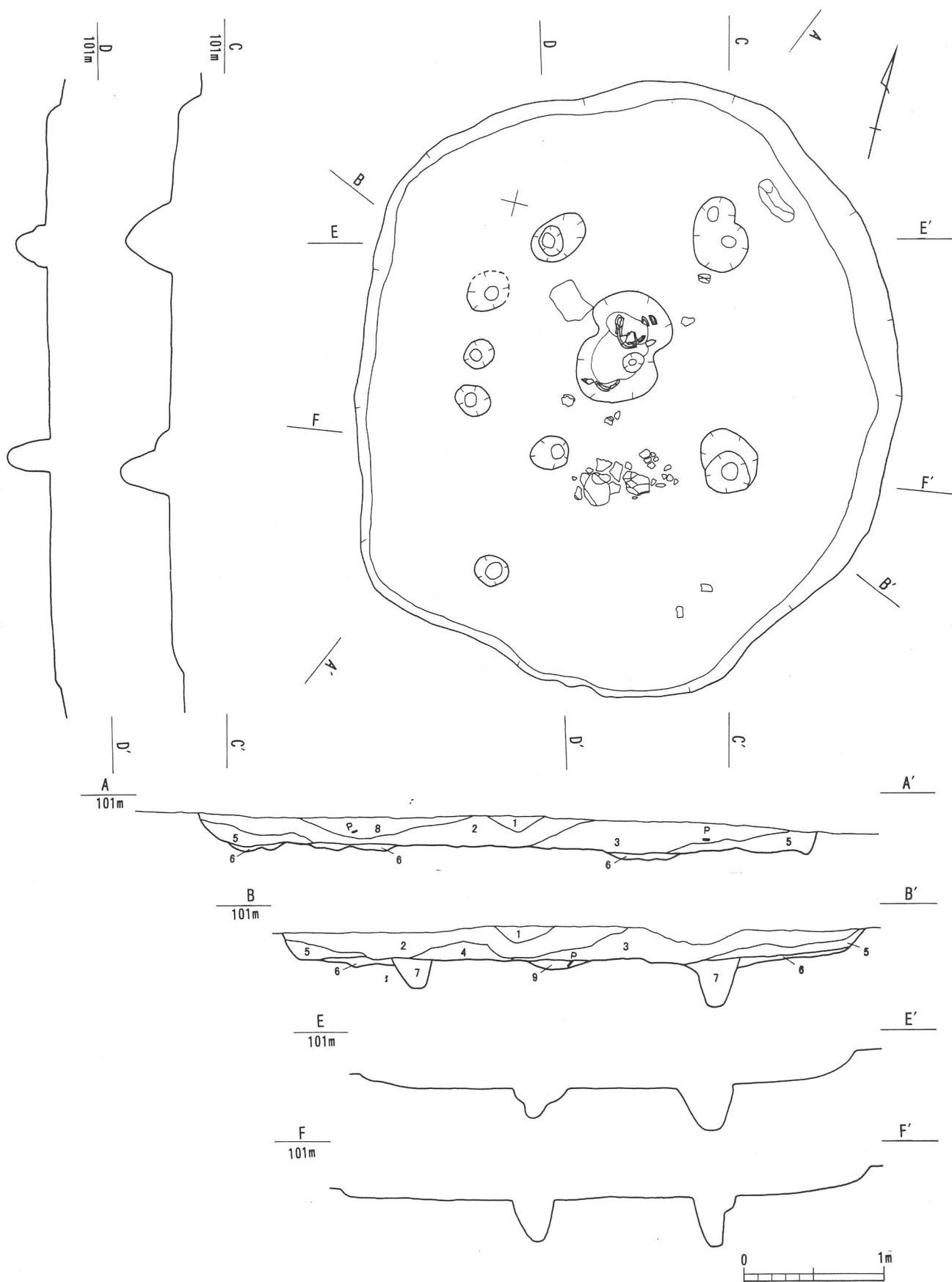
### 1号土坑(第15図)

F-4グリッド北西に位置する。直径70cmのほぼ円形で、検出面から底面までの深さは約25cm。覆土は上層の一部が第Ⅳa層と見られる黒褐色土で、その他の部分は第Ⅴ層や第Ⅵ層の褐色土ブロックを多く混入している。遺物は認められない。

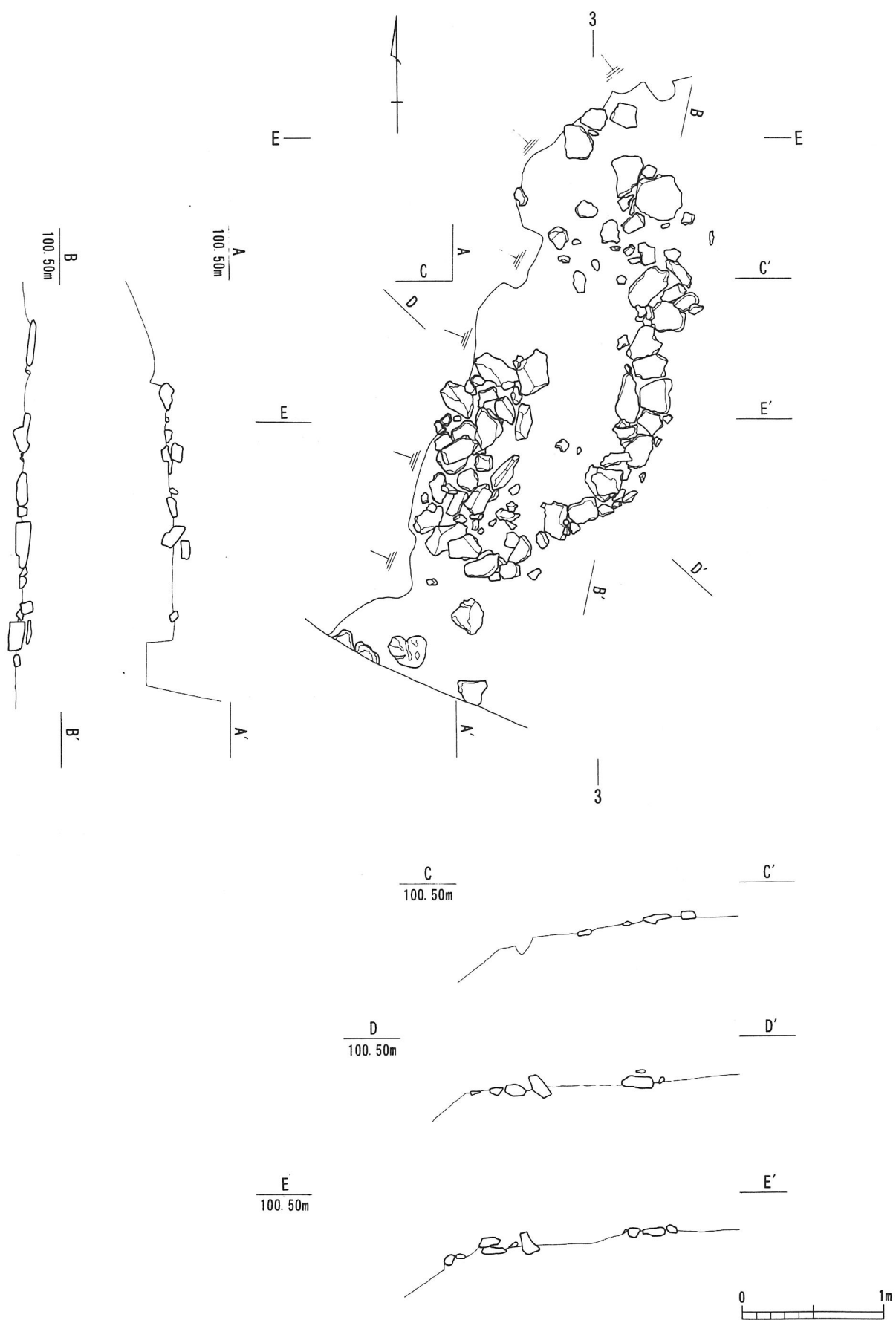
1	黒褐色土層	しまり強い。粘性弱い。橙色珪灰微量混入。
2	暗褐色土層	しまりやや強い。粘性ややあり。橙色珪灰少量混入。ロームブロック多量、溶岩粒混入。

### 2号土坑(第15図)

F-3・F-4グリッドに位置する。長さ1.68m、幅1.10mの不整形な楕円形で、検出面から底面までの深さは30cmを測る。覆土は第Ⅳa層の黒褐色土が主体である。遺物は覆土中から縄文土器片・黒曜石剥片がわずかに認められる。



第13图 3区第3号住居跡 实测图



第 14 图 3 区第 1 号配石实测图

1	黒褐色土層	しまり強い。粘性弱い。橙色スコリア混入。
2	暗褐色土層	しまり強い。粘性弱い。橙色スコリア微量混入。
3	暗褐色土層	しまりやや強い。粘性ややあり。橙色スコリア少量混入。ロームブロック多量、溶岩粒混入。

### 3号土坑（第15図）

F-3 グリッド中央に位置する。第18号土坑を切って存在する。長さ1.56 m、幅1.2 mで瓢箪形の形状をしている。検出面から底面までの深さは約30cmを測る。覆土は上層が第IV a層の黒褐色土で、下層には黒褐色土に褐色土ブロックが多く混入する。覆土中に被熱した礫が1点認められ、遺物は縄文土器小破片が少量出土している。

1	暗褐色土層	しまりあり。粘性あり。ロームブロック混入。
2	黒褐色土層	しまり強い。粘性弱い。橙色スコリア微量混入。
3	黒褐色土層	しまりやや強い。粘性弱い。橙色スコリア混入。ロームブロック、溶岩粒少量混入。
4	暗褐色土層	しまり強い。粘性弱い。橙色スコリア微量混入。
5	暗褐色土層	しまりやや強い。粘性ややあり。橙色スコリア少量混入。ロームブロック多量、溶岩粒混入。

### 4号土坑（第15図）

E-4・F-4 グリッドに位置する。長さ1.18 m、幅0.90 mのやや崩れた楕円形である。検出面から底面までの深さは48cmで西壁際はピット状に落ち込む。覆土は第IV a層の黒褐色土主体で下層に向かうにつれ褐色土ブロックの混入が目立つ。遺物は出土していない。

1	暗褐色土層	しまり強い。粘性あり。橙色スコリア微量混入。
2	黒褐色土層	しまり強い。粘性やや弱い。橙色スコリア微量混入。
3	暗褐色土層	ロームブロック多量混入。

### 5号土坑（第15図）

E-3・F-2 グリッドに位置する。長さ1.04 m、幅0.66 mの楕円形である。検出面から最深の底面までの深さは33cmで、土坑の南半はピット状に落ち込む。覆土は第IV a層の黒褐色土が主体である。遺物は出土していない。

1	暗褐色土層	しまりあり。粘性弱い。橙色スコリア微量混入。溶岩粒微量混入。
2	黒褐色土層	しまり強い。粘性弱い。橙色スコリア混入。溶岩粒微量、炭化物微量混入。
3	暗褐色土層	しまり強い。粘性弱い。橙色スコリア混入。溶岩粒、炭化物微量混入。
4	暗褐色土層	しまりあり。粘性ややあり。橙色スコリア微量混入。ロームブロック、溶岩粒混入。

### 6号土坑（第15図）

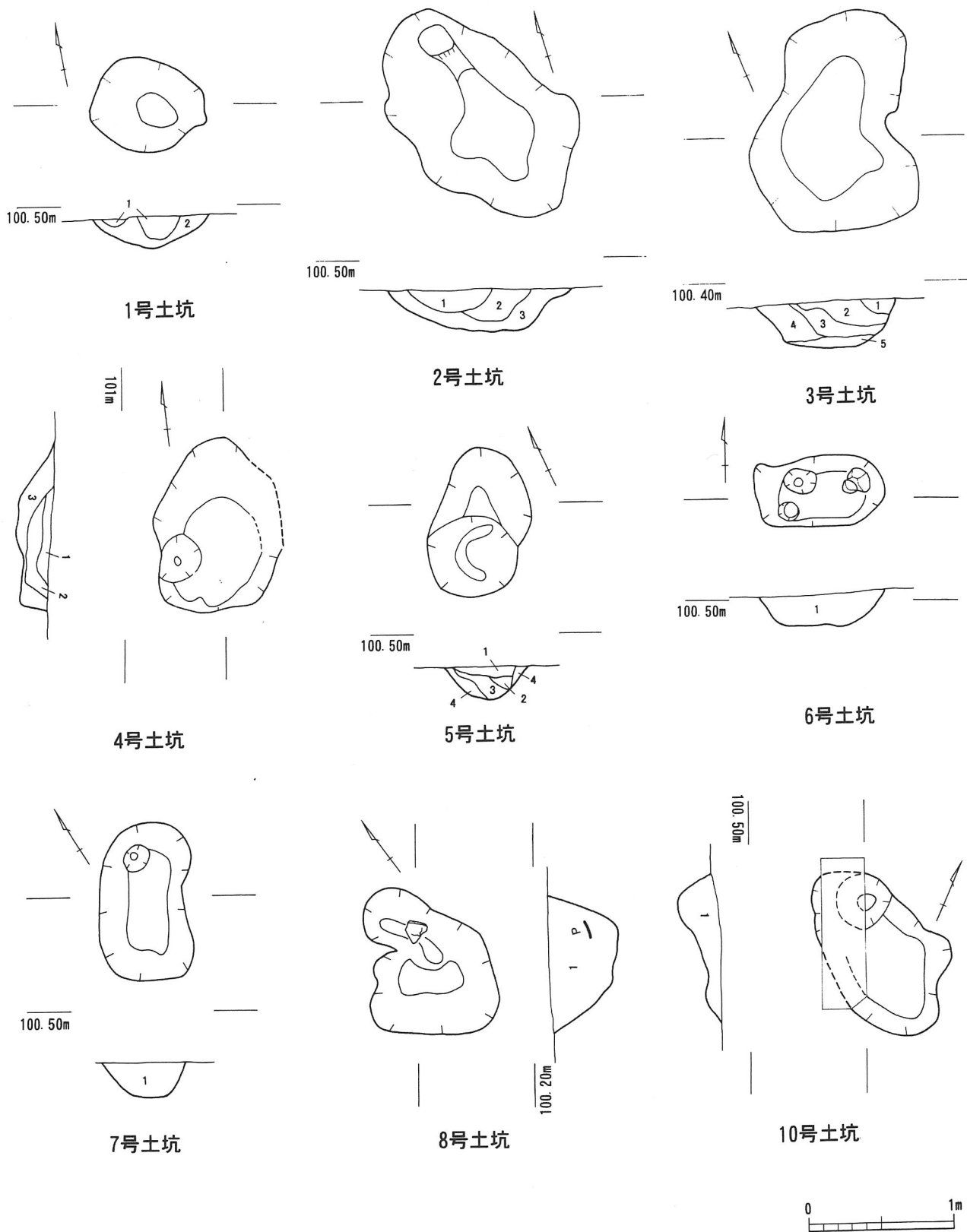
D-3 グリッド北に位置する。長さ0.90 m、幅0.49 mでやや角張った卵形をしている。検出面から底面までの深さは22cmである。底面は平である。覆土は第IV a層の黒褐色土が主体である。東壁際底面で長さ20cmほどと10cmほどの溶岩礫が出土している。遺物は縄文土器片が出土している。

1	黒褐色土層	しまり強い。粘性ややあり。橙色スコリア少量混入。
---	-------	--------------------------

### 7号土坑（第15図）

F-3 グリッド西に位置する。長さ1.11 m、幅0.65 mでやや丸みを持つ長方形をしている。検出面から底面までの深さは27cmを測る。覆土は第IV a層の黒褐色土が主体である。遺物は縄文土器片と

第14図 3区第1号配石 実測図



第 15 图 3 区土坑实测图 (1)

黒曜石剥片が出土している。

1	黒褐色土層	しまり強い。粘性ややあり。橙色珪石少量混入。
---	-------	------------------------

#### 8号土坑（第15図）

E-2・F-2 グリッドに位置する。長さ 1.25 m、幅 0.94 m で丸みを帯びた台形状を呈している。北側は張り出してピット状に落ち込み、検出面からの深さは 50cm を測る。覆土は第Ⅳ a 層の黒褐色土が主体となる。遺物は縄文土器片が出土している。

1	黒褐色土層	しまり強い。粘性ややあり。橙色珪石少量混入。
---	-------	------------------------

#### 10号土坑（第15図）

E-3 グリッド北西に位置する。長さ 1.30 m、幅 0.82 m で形の崩れた長円形をしている。検出面から底面最深部までの深さは 30cm で北壁際はピット状に落ち込む。覆土は炭化物を微量含む暗褐色土で、褐色土ブロックを下部に多く混入している。遺物は縄文土器片と黒曜石剥片が出土している。

1	暗褐色土層	しまり強い。下部にロームブロック混入。礫、炭化物微量混入。
---	-------	-------------------------------

#### 11号土坑（第16図）

E-2 グリッド西に位置する。長さ 1.14 m、幅 0.89 m で南側が張り出す円形をしている。検出面からの深さは最深部で 30cm を測る。底面は平らで南端でピット状に落ち込む。覆土は第Ⅳ a 層が主体の黒色土で、褐色土ブロックが下部に多く混入している。遺物は縄文土器片と黒曜石剥片が出土している。

1	黒褐色土層	しまり強い。下部にロームブロック多量混入。下部にロームブロック多量混入。炭化物微量混入。
---	-------	--

#### 12号土坑（第16図）

E-3・E-4 グリッド西に位置する。長さ 0.95 m、幅 0.45 m で北側の一部が張り出した卵形をしている。検出面からの深さは 20cm を測る。覆土は黒褐色土主体である。遺物は縄文土器片と黒曜石剥片が出土している。

1	黒褐色土層	しまりやや強い。橙色珪石少量混入。下部にロームブロック多量混入。炭化物微量混入。
2	褐色土層	黒褐色土混入。

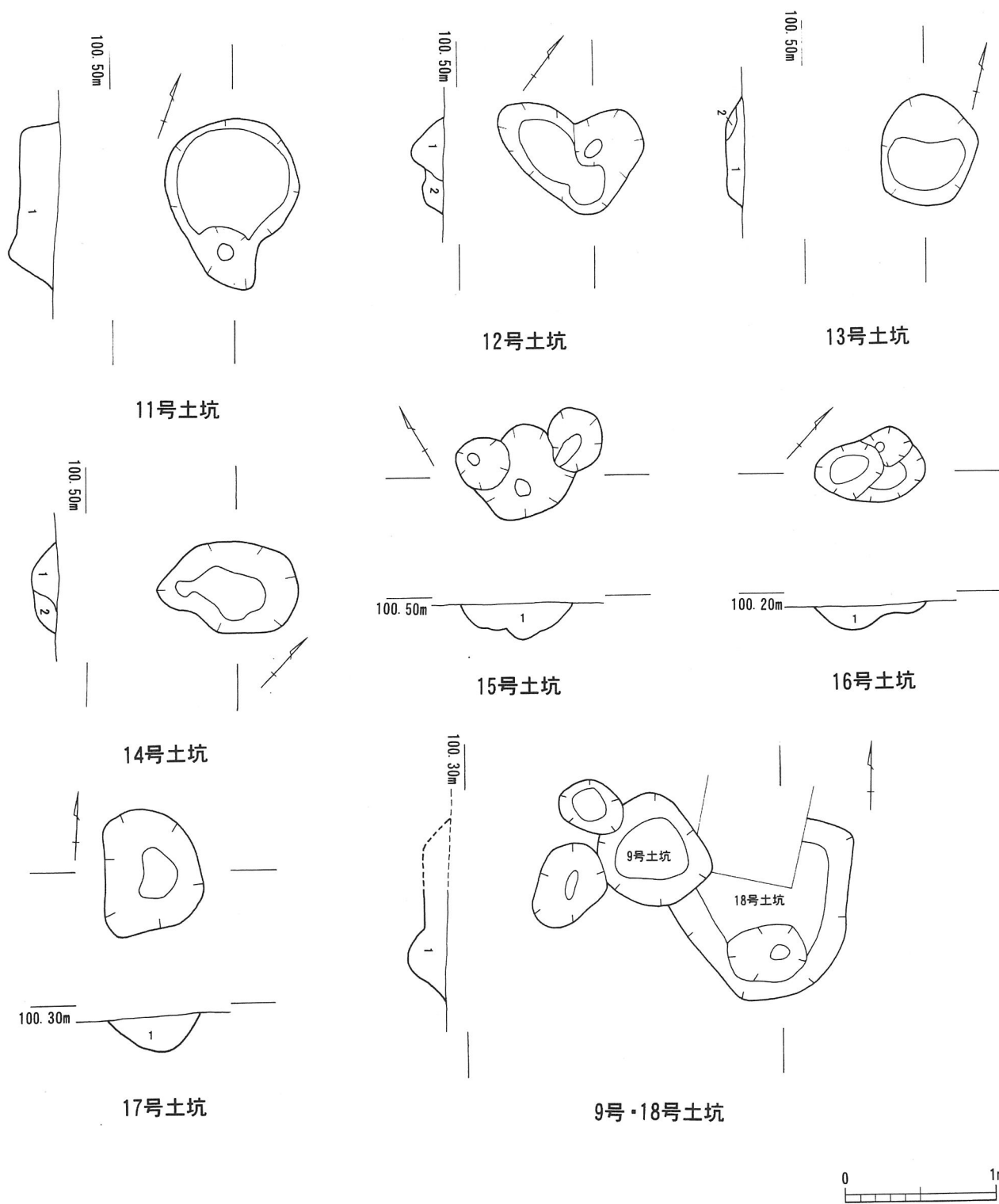
#### 13号土坑（第16図）

E-2 グリッド中央に位置する。直径 0.73 m でほぼ円形を呈する。検出面からの深さは 10cm と浅い。底面は平である。覆土は黒褐色土で褐色土ブロックを混入する。遺物は出土していない。

1	黒褐色土層	しまりやや強い。橙色珪石少量混入。下部にロームブロック多量混入。炭化物微量混入。
2	褐色土層	黒褐色土混入。

#### 14号土坑（第16図）

D-2 グリッド南東に位置する。長さ 0.94 m、幅 0.6 m で歪な卵型を呈する。検出面からの深さは 16cm を測る。底面は平である。覆土は黒褐色土主体の部分と褐色土主体の部分に分層される。遺物



第 16 图 3 区土坑实测图 (2)



は出土していない。

1	黒褐色土層	しまり強い。橙色スリア微量混入。ロームブロック少量混入。
2	褐色土層	黒褐色土混入。

#### 15号土坑（第16図）

D-3 グリッド西に位置する。3個のピットが集まっているようであるが立ち上がりが不明なため土坑とした。長さ0.92 m、幅0.6 mで不整形を呈する。検出面からの深さは最深部で24cmを測る。覆土は褐色土ブロックを下部に多く含む黒褐色土である。遺物は縄文土器片が出土している。

1	黒褐色土層	しまりやや強い。橙色スリア少量混入。下部にロームブロックやや多く混入。炭化物微量混入。
---	-------	---

#### 16号土坑（第16図）

E-2 グリッド南東に位置する。15号土坑同様複数のピットの集合体のような掘り方であるが切り合いを確認できなかったため土坑とした。長さ0.94 m、幅0.48 mで卵形を呈する。検出面からの深さは最深部で20cmを測る。覆土は第IV a 層の黒褐色土が主体で褐色土ブロックを下部にふくむ。遺物は縄文土器片と黒曜石剥片が出土している。

1	黒褐色土層	しまり強い。粘性ややあり。橙色スリア少量混入。下部にロームブロック混入。
---	-------	--------------------------------------

#### 17号土坑（第16図）

F-3 グリッド東に位置する。長さ0.8 m、幅0.66 mでやや丸みを持つ台形状を呈する。検出面からの深さは25cmを測る。覆土は第IV a 層の黒褐色土が主体で褐色土が下部に混ざる。遺物は出土していない。

1	黒褐色土層	しまり強い。粘性ややあり。橙色スリア少量混入。下部にロームブロック混入。
---	-------	--------------------------------------

#### 9号・18号土坑（第16図）

F-3 グリッド中央に位置する。3号土坑に切られている。9号土坑は直径0.7 m程で歪んだ円形を呈し、検出面からの深さは16cmを測る。覆土は暗褐色土が主体である。遺物は出土していない。18号土坑は、9号土坑に切られている。長さ1.3 m、幅1.1 mで丸みを持つ台形状を呈し、南端が一段下がる。検出面からの深さは46cmを測る。覆土は暗褐色土が主体である。遺物は縄文土器片と黒曜石剥片が出土している。

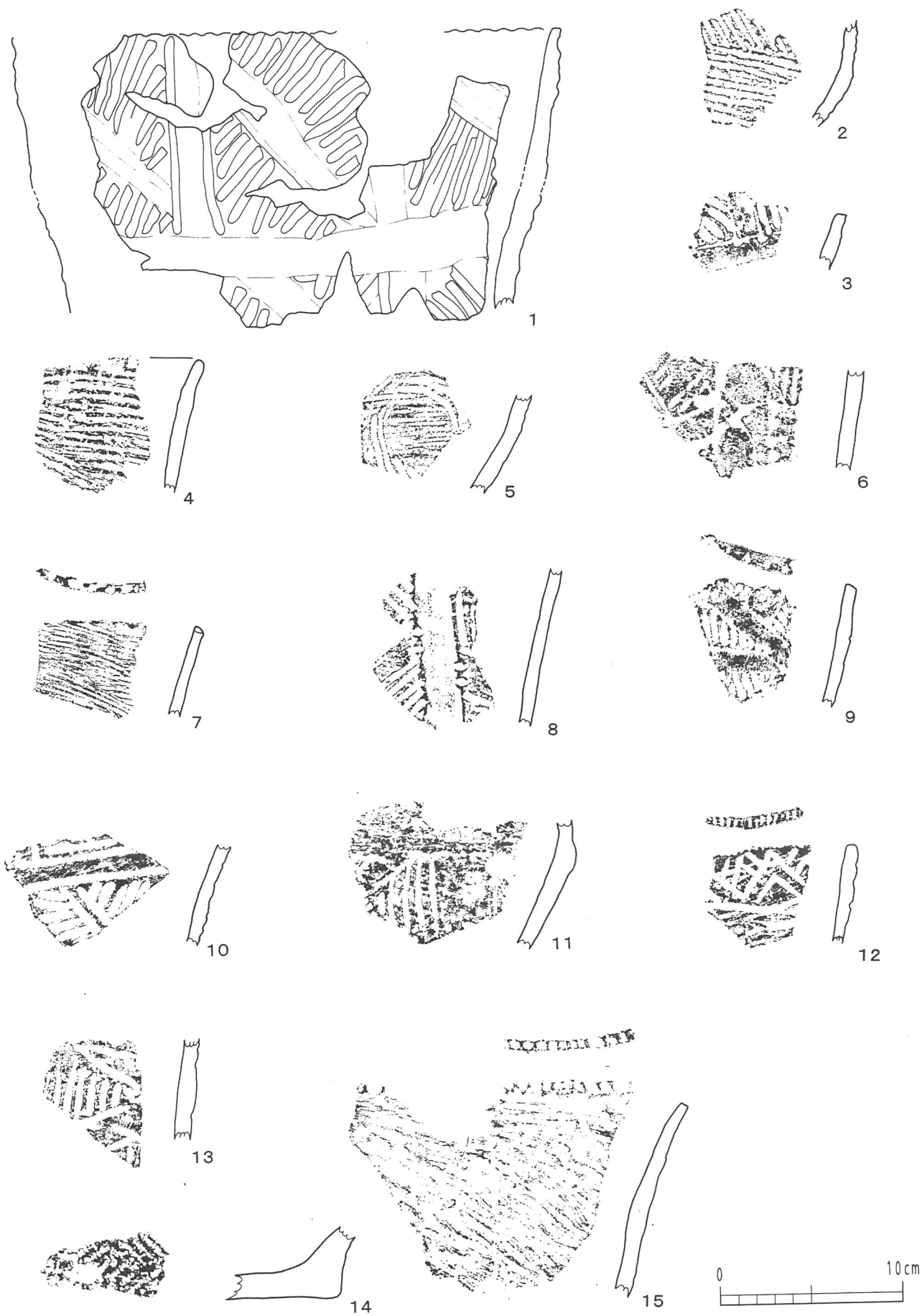
1	黒褐色土層	しまり強い。粘性ややあり。橙色スリア少量混入。
---	-------	-------------------------

## 第4章 出土した遺物

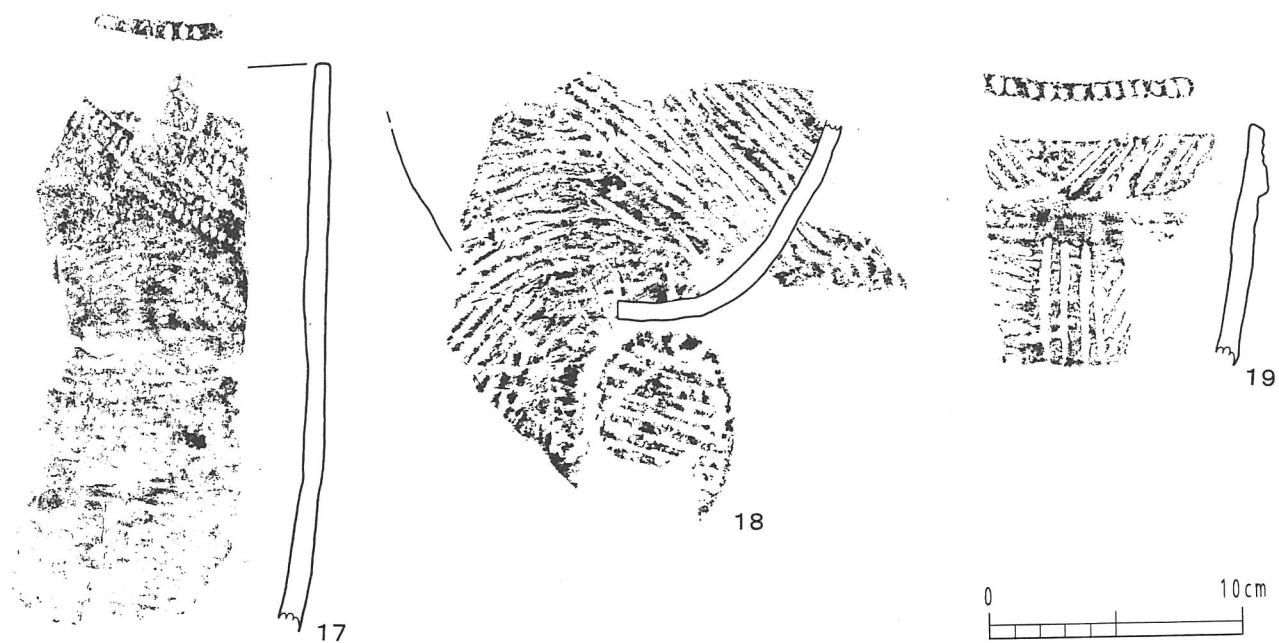
### 第1節 土器

#### 2区

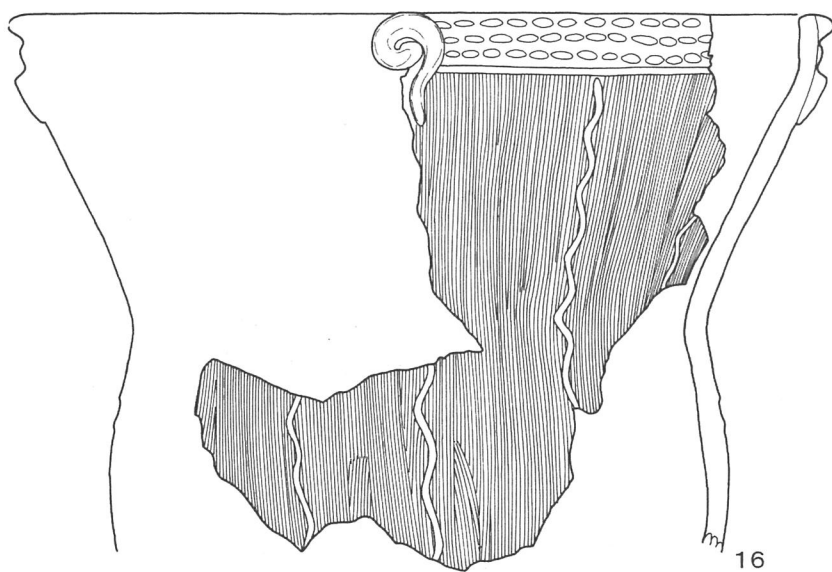
2区出土土器のなかで、17点を図示した。個々の土器については、表1の土器観察表にまとめた。これらはすべて包含層からの出土で20基の土坑からは細片が出土したのみである。従って、遺構の時期を明確に判断する資料は得られていないが、2区の土器は早期が主体となり時期的に近い関係の土器群として把握される。土器形式としては、早期条痕文系の野島式・鶴ヶ島台式で占められている。これらのなかには、第17図-15のように、口唇部刻み、口縁部～胴部にかけて全面条痕を施文するもの、17図-14の底部のように、羽状縄文が胴部最下端にまで達している例もあり、僅かではあるが前期前半までの継続を認めることができる。なお第18図-18の底部は楕円形を呈する平底であるが、静岡県東部地域では類例に乏しい。平底ではあるが胴部への移行が丸みを帯び、底部から胴部にかけて前面条痕を施している。



第 17 图 2 区出土遺物 (土器) (1)



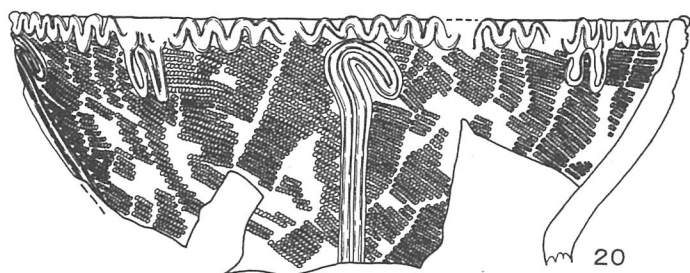
第 18 図 2 区出土遺物（土器）（2）



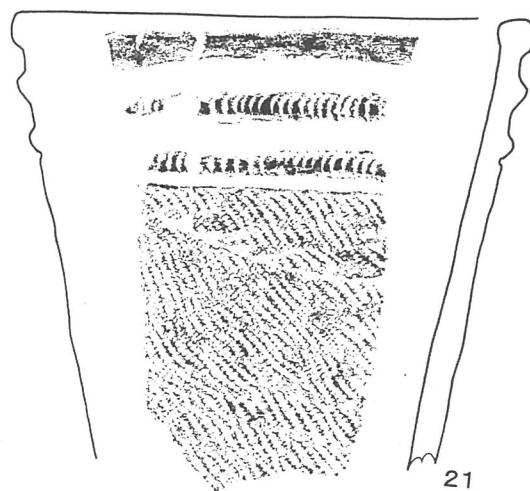
16



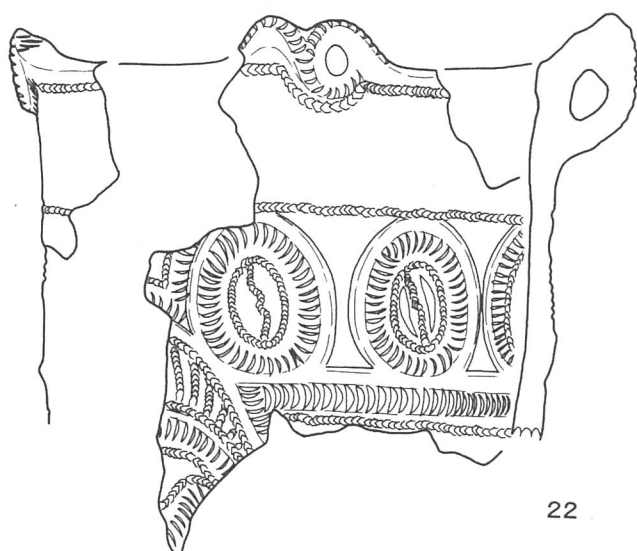
23



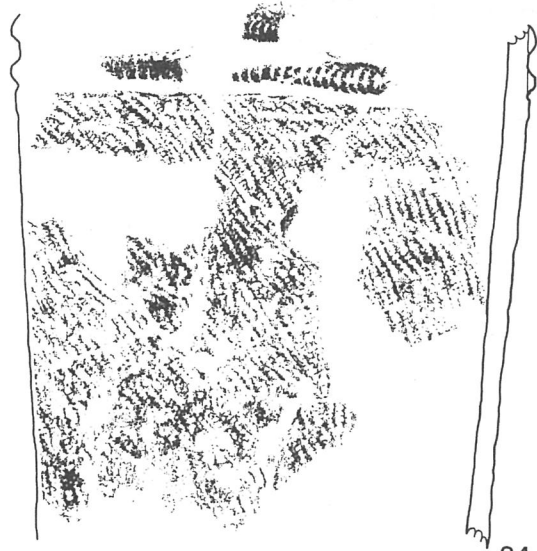
20



21



22



24



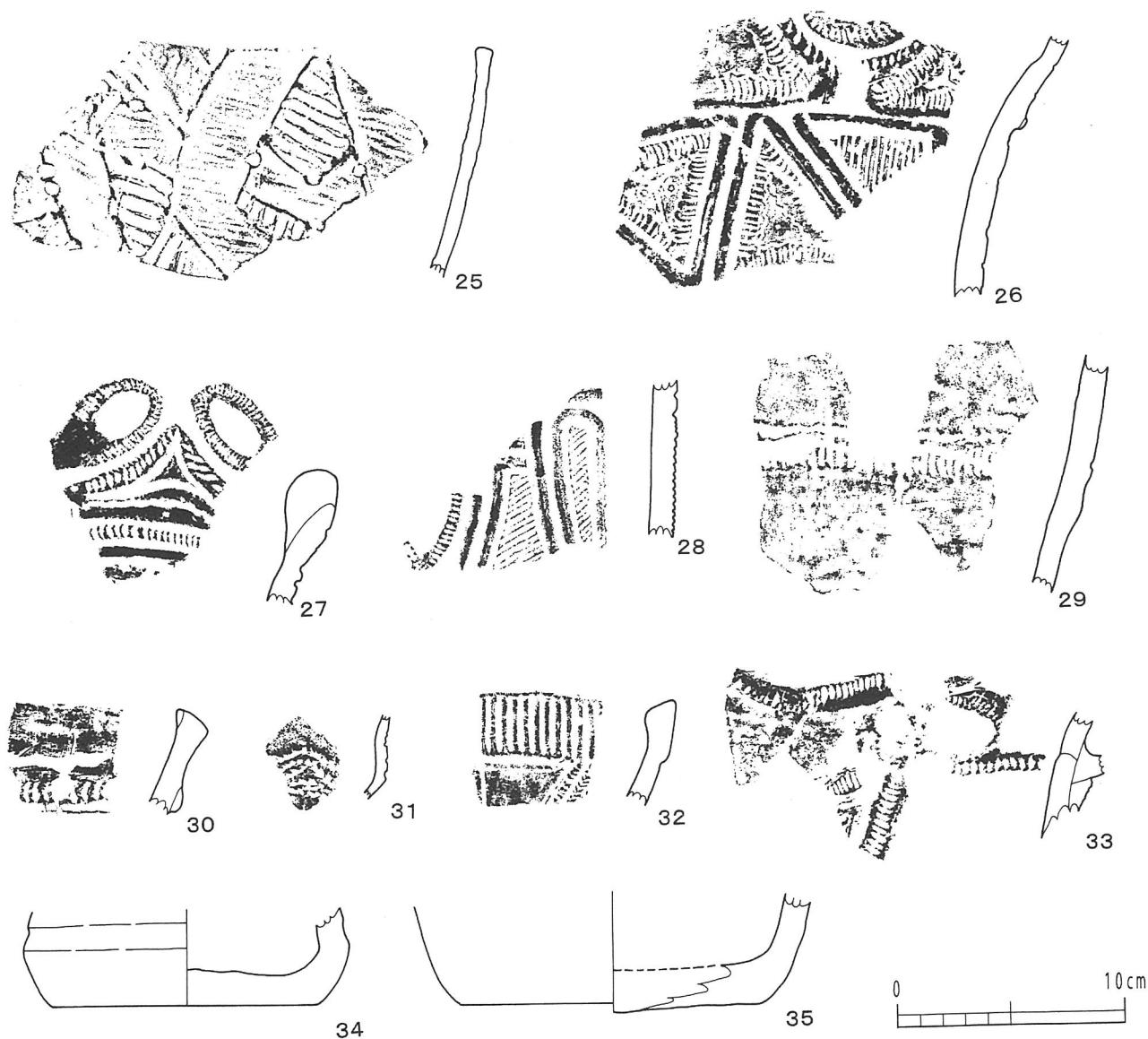
第19図 3区出土遺物(土器)(1)

### 3区

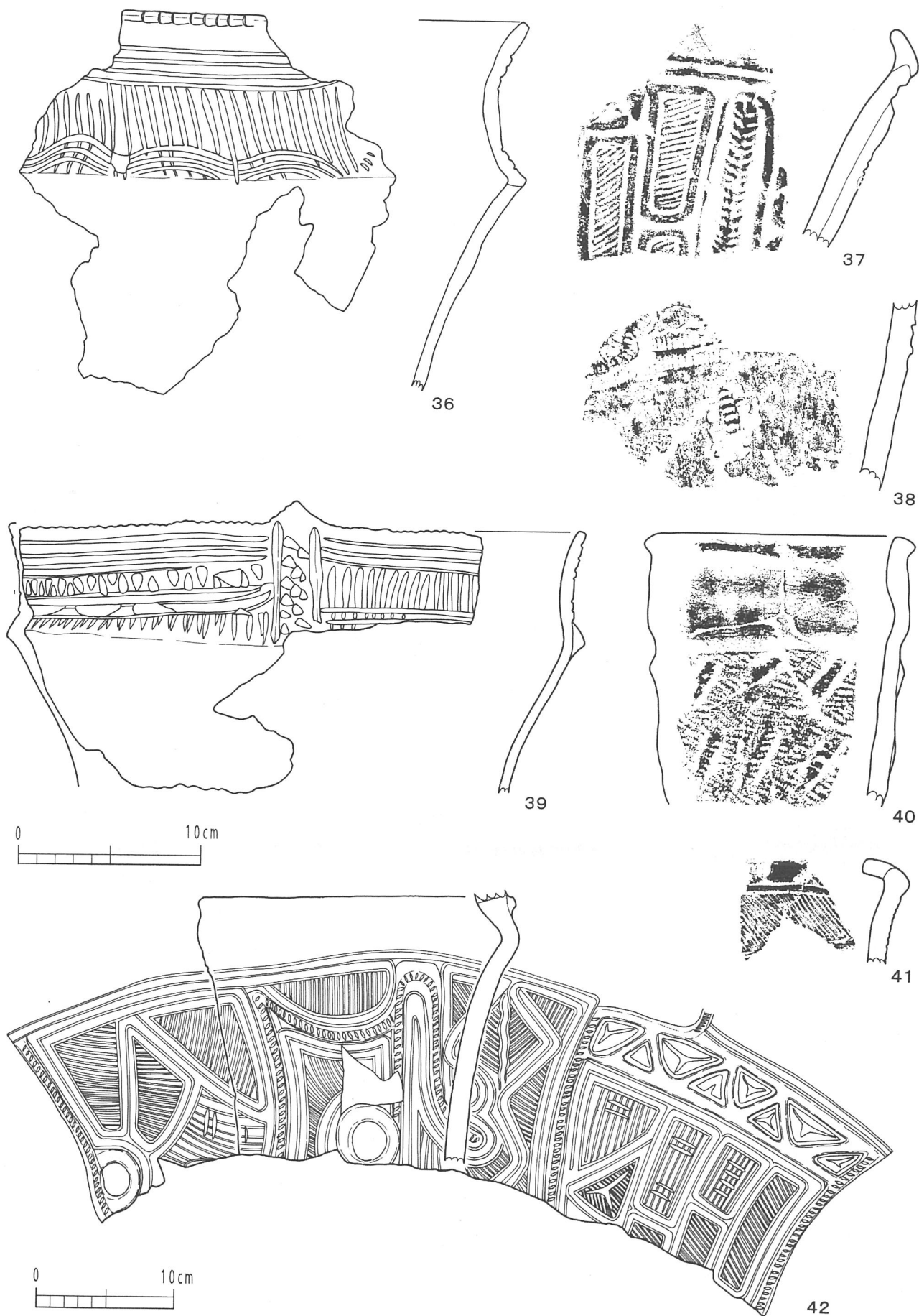
第1表土器観察表に3区出土の個々の土器について、形態や文様、胎土・色調についてまとめた。土器の型式名についても、明確に判断されるものについて記述してみた。

3区出土の土器について次のような特徴が認められる。

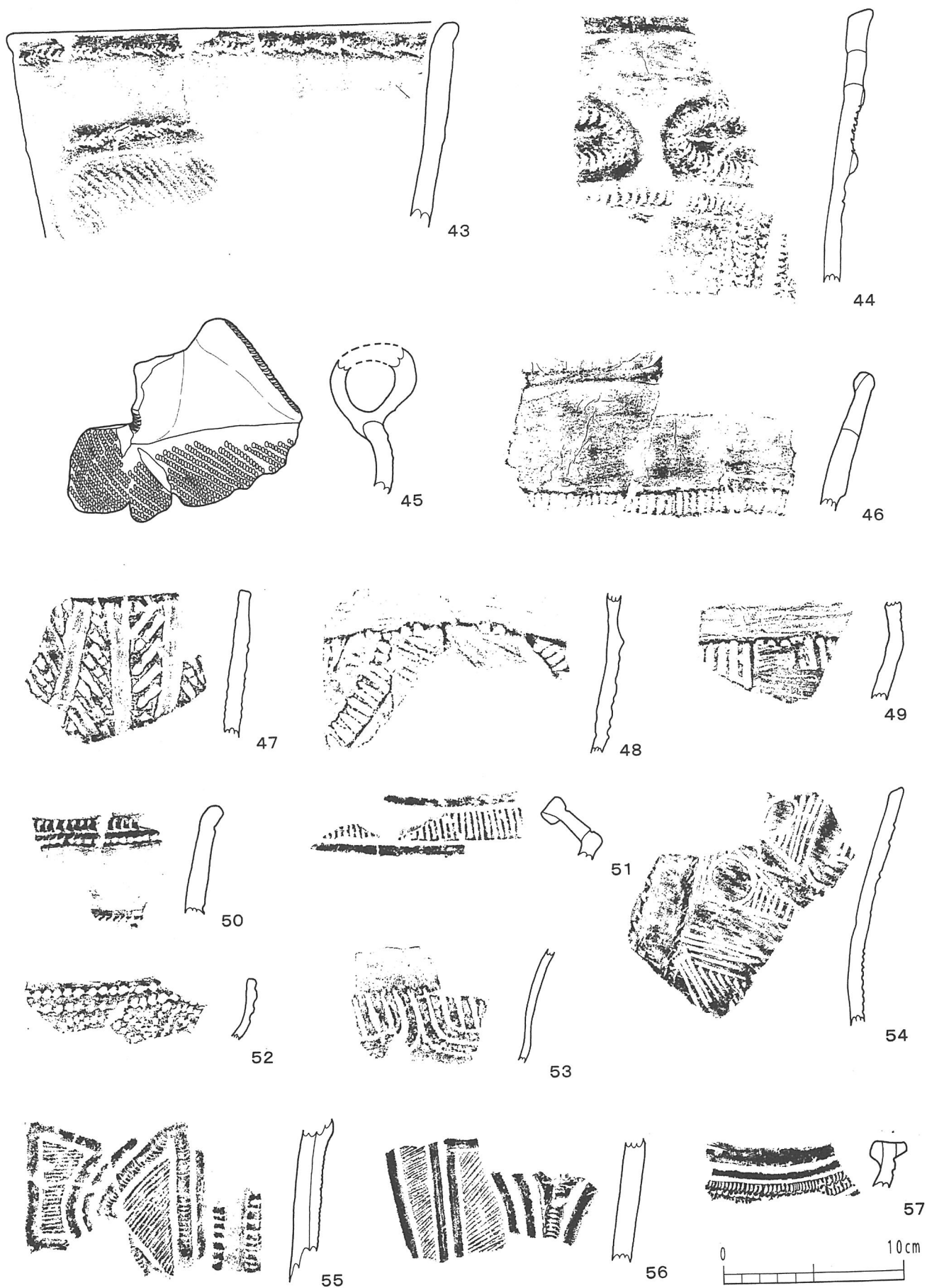
- ①土器の時期が、縄文早期の野島式から中期後半のなかに収まること。なかでも主体となる土器は、西関東地方から山梨県・長野県南半部、静岡県東部地域に分布する藤内式の土器群である。
- ②縄文中期前半期の東海系土器も量的には少ないが確実に共存している。なかでも3号住跡からは、第21図-36・39の山田平Ⅲ～Ⅳ式が出土する。この3号住居跡の土器群は静岡県東部地域における中期前半の良好な共伴資料となった。なお東海系の土器は第20図31、第22図52の北屋敷Ⅱ式、第24図77が認められる。いずれの土器も本遺跡の土器年代中に収まる。
- ③土器の器形は比較的単純であり、深鉢が大部分を占め、主体となる藤内式期において浅鉢が伴う。
- ④3区においては、2区で主体となる早期条痕系土器は少なく、包含層から野島式が出土し、僅かに鵜ヶ島台式が伴う。



第20図 3区出土遺物（土器）（2）

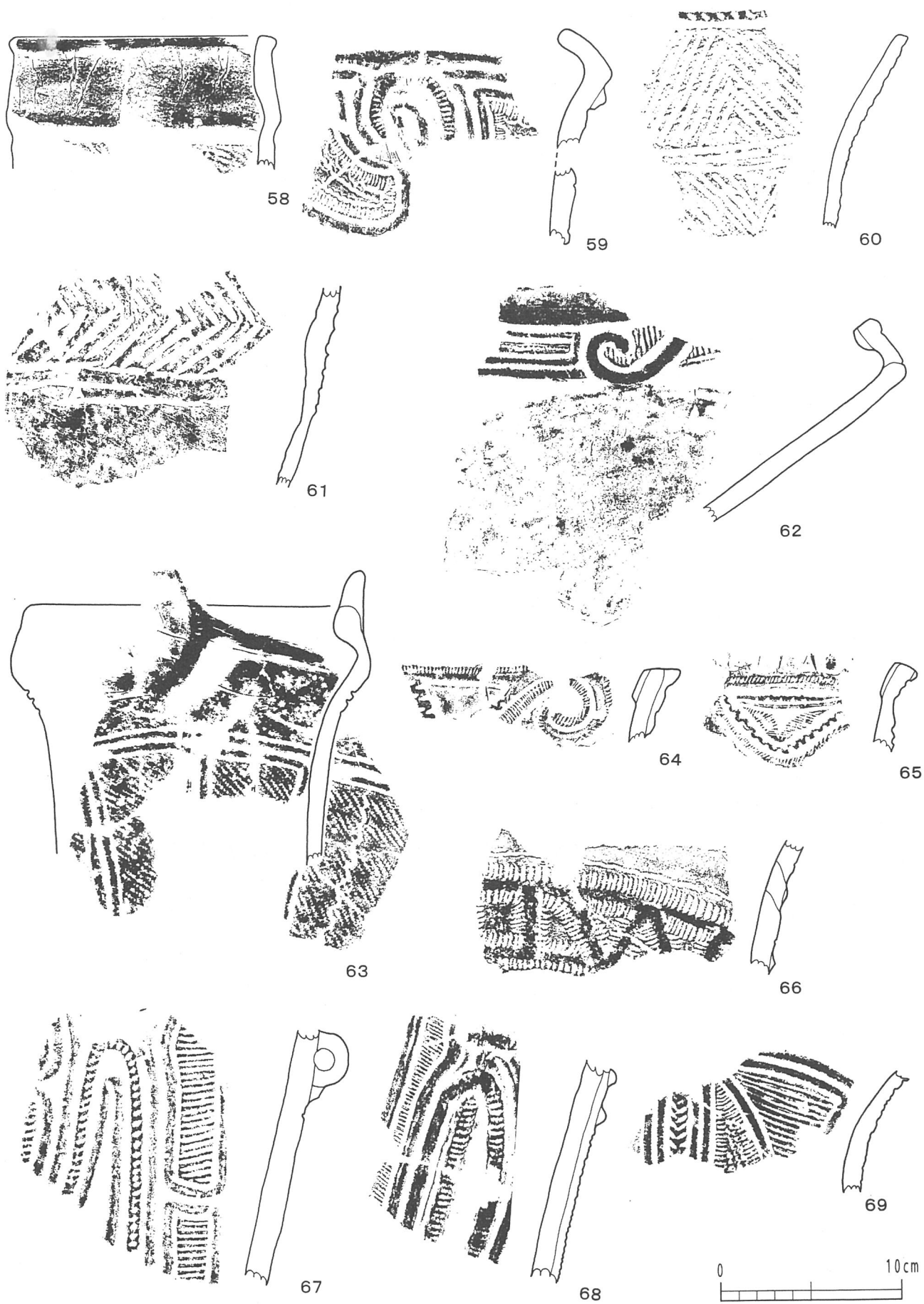


第 21 图 3 区出土遺物 (土器) (3)

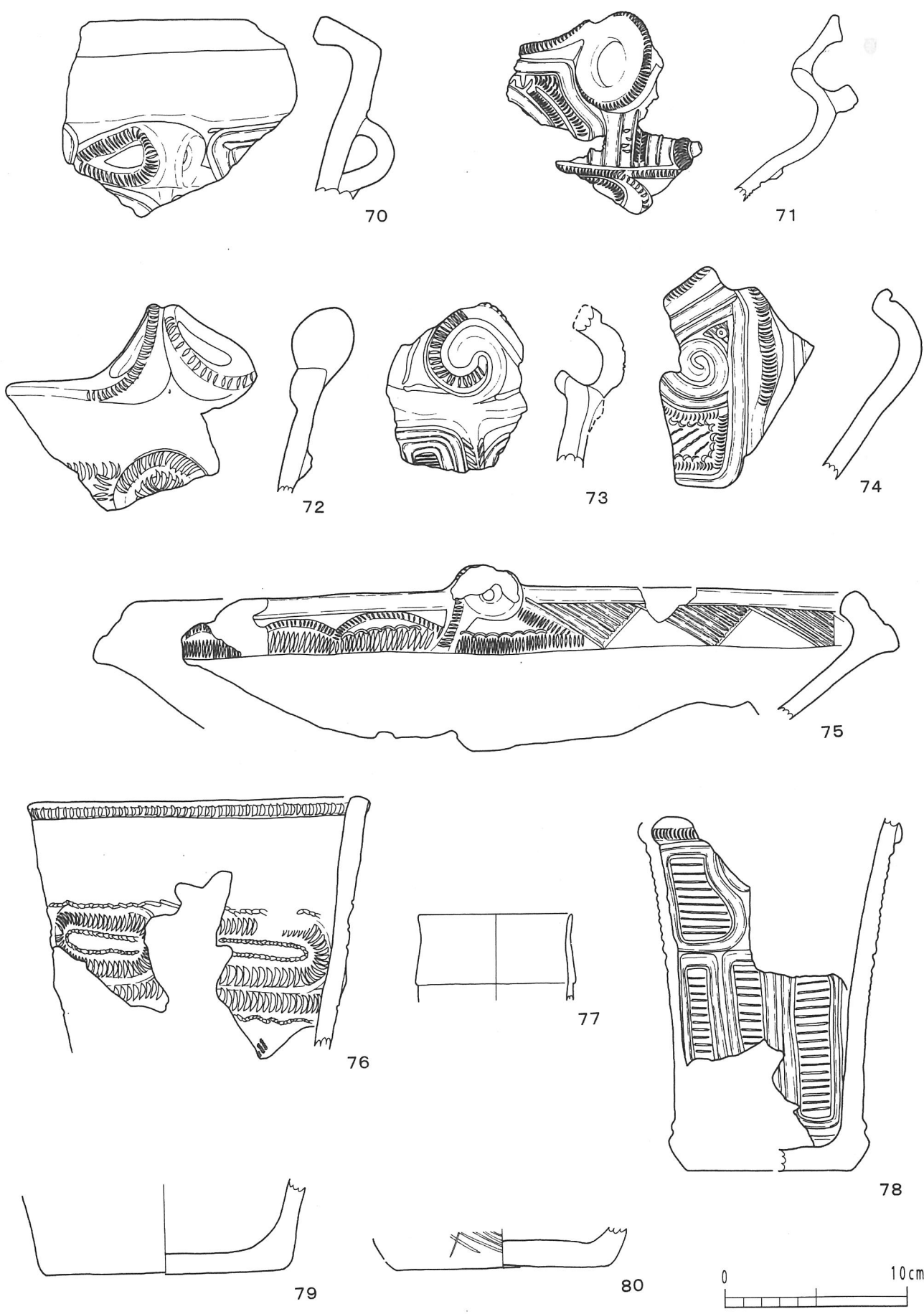


第 22 図 3 区出土遺物 (土器) (4)





第23图 3区出土遺物(土器)(5)



第 24 图 3 区出土遺物 (土器) (6)

## 第2節 石器

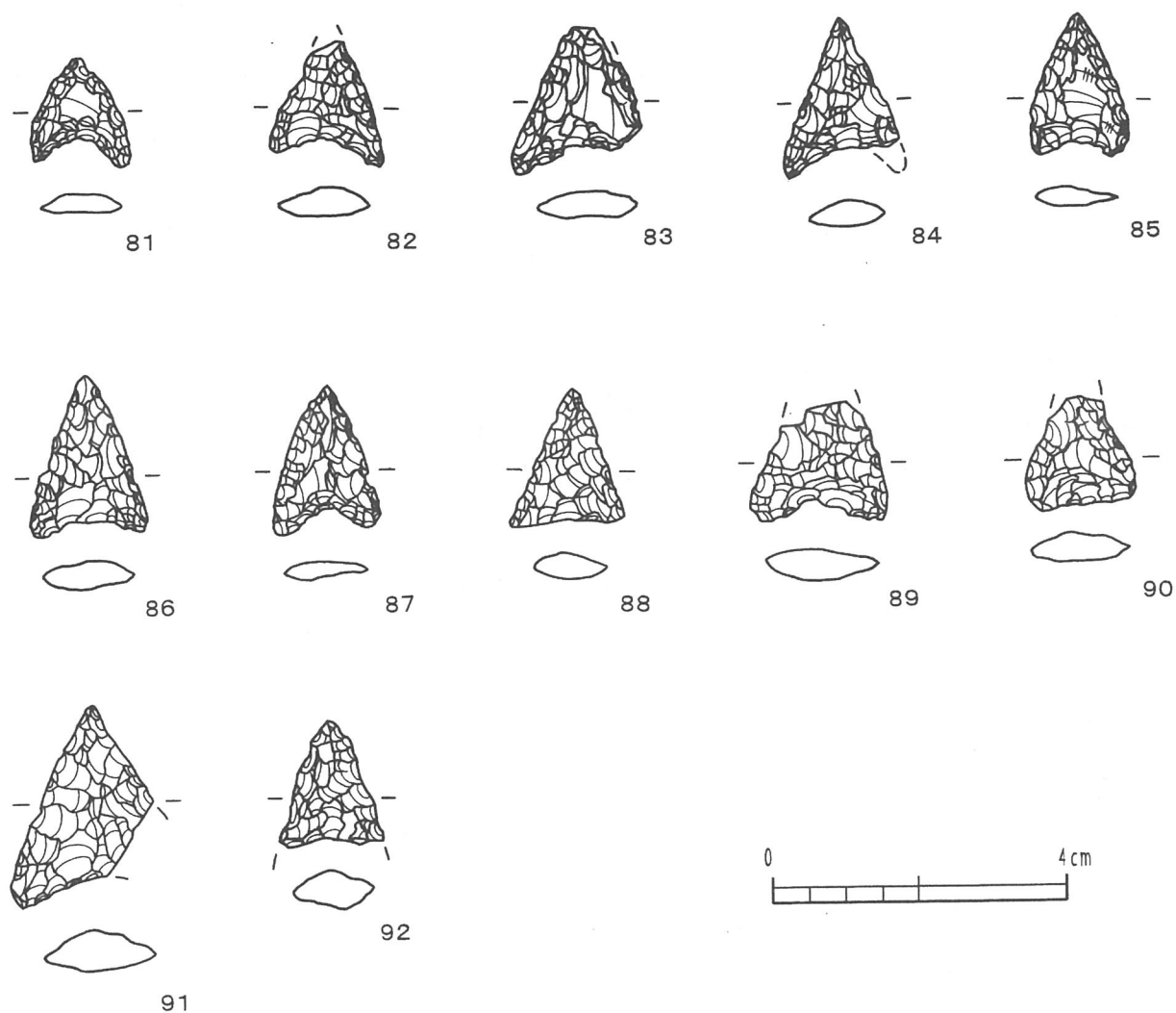
### 2区

2区で出土した石器を19点図示した。種類と点数は、石鏃12点、磨石7点である。個々の石器の形態や大きさについては、第2表石器観察表にまとめた。以下、種類ごとに記述してゆく。

#### (1) 狩猟具

##### ①石鏃(第25図81～92 図版7)

石鏃はすべて無柄であり、形態は二等辺三角形を呈し、基部形態により、中央が凹む凹基式と平らに造られる平基式に二分される。前者の典型例は81や85であり、後者では84・88が認められる。92が平基式に類似した形態と思われるが、12点中の3点という比率は、凹基式が圧倒的に優位であることを示している。側縁部にも、81・85のように弧状を呈するものと、84・88のように直線を呈するものがある。

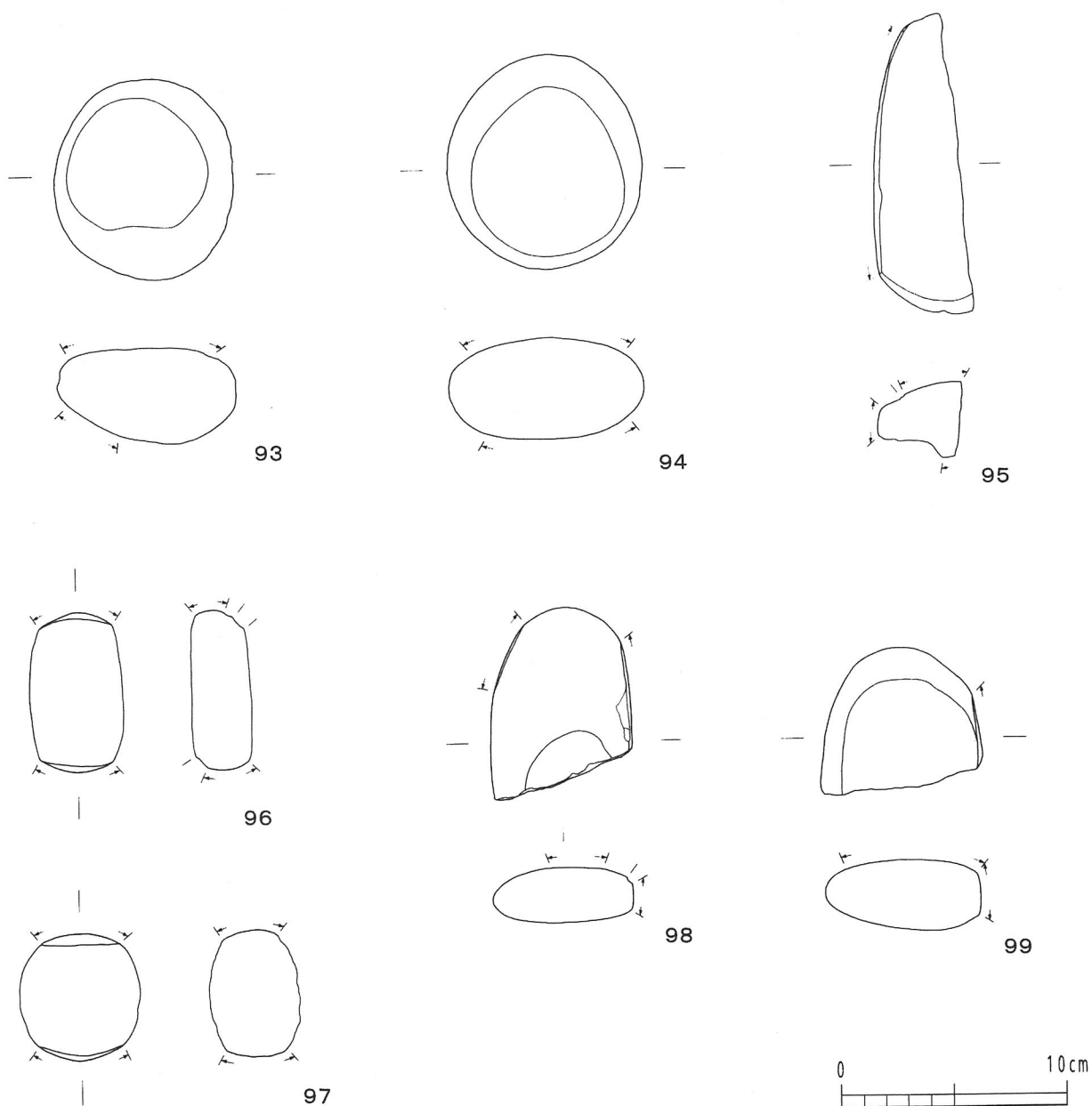


第25図 2区出土遺物(石器)(1)

(2) 調理具 (第 26 図 93 ~ 99 図版 7)

2 区出土の調理具は磨石 7 点である。大きさは、欠損する 95 が 18.45cm 以上と大型であるが、他は 9cm 弱に集中している。形態は円形を呈する 93・94・97 と隅丸長方形の 96・98・99 がほぼ同数認められる。

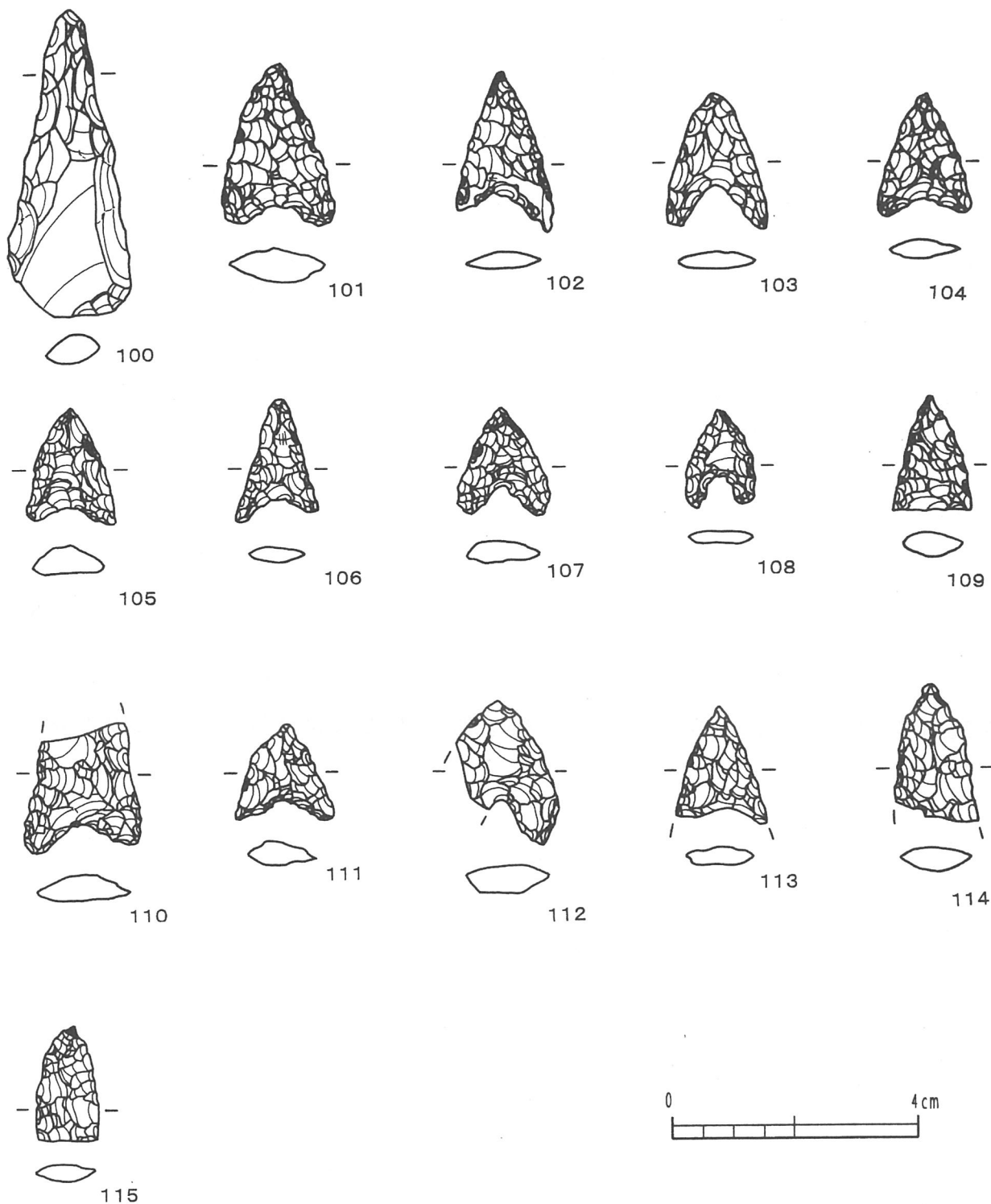
これらには擦痕が顕著にみられ、なかには擦るという機能より、敲いて砕くという機能が優先したと思われる 96 ~ 98 のような例もある。



第 26 図 2 区出土遺物 (石器) (2)

### 3区

3区出土の石器は、尖頭器1点、石鏃15点、打製石斧19点、石錐1点、石匙3点、石錘2点、磨製石斧1点、敲石1点、磨石11点の54点を図示した。個々の石器の形状や大きさ等のデータは、第2表の石器一覧表にまとめてみた。以下に石器の用途や機能別に分類し、種類ごとに、特徴や所見を記すこととする。



第27図 3区出土遺物（石器）(1)

## (1) 狩猟具

### ①尖頭器 (第 27 図 -100 図版 8)

3 区 -2 から出土した尖頭器の未製品である。ホルンフェルス製で、巾広い剥片を横位に用い、主要剥離面側から調整加工を施す。

### ②石鏃 (第 27 図 101 ~ 115 図版 8)

15 点を図示した。ほとんどが包含層からの出土で、2 層から 4 層の間に分散する。大きさは 1.5cm ~ 2.5cm の間を示すが、2cm 未満の小型の石鏃が多くを占めている。

形態や特徴は 2 区でも述べたように、無柄で、二等辺三角形を呈し、基部が凹む形態が圧倒的に多い。明確な平基式石鏃は 15 点中の 1 点 (109) にすぎない。側縁部も弧状を呈するものが多いが、106 の直線を呈するもの、110 のような本体部で内側に屈曲する形態があり、111・114 では本体上部が「く」字状態に外側に張り出している。115 は、下半を欠損するが全体に細長い形態を呈するものと思われる。

3 区の石鏃もまた 2 区と類似する点が多く認められるが、3 区の石鏃は 2 区より形態と大きさがバラエティーに富んでいる。

### ③石錘 (第 30-139・140 図版 9)

3 区 -2 から 2 点が出土している。139 は縦長の楕円、140 は円形を呈する。両者ともに長軸端部を打ち欠き、紐掛けとしている。

## (2) 土木具・工具

### ①磨製石斧 (第 30 図 -141 図版 9)

1 点出土している。残存部の長さ 17cm を計測するが、上下端部を欠損する乳棒状石斧である。表面には成形加工の敲打痕と調整加工の磨痕が観察できる。

### ②打製石斧 (第 28 図 116 ~ 126・第 29 図 127 ~ 134 図版 8)

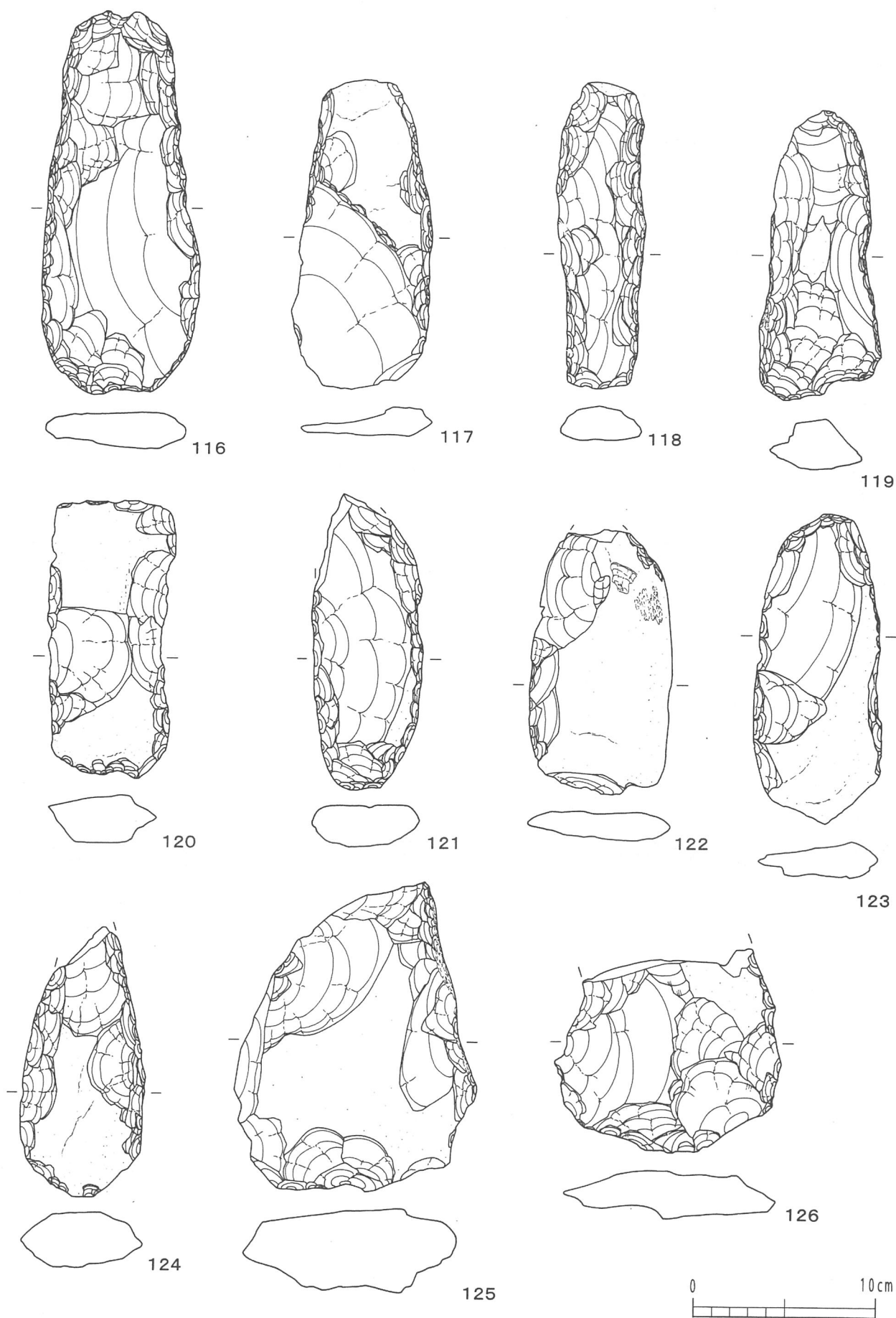
打製石斧は 18 点出土しているが、8 点が住居跡からの出土である。116 ~ 124 は平面形態が撥形を呈する。116 ~ 120 は完形品、121 ~ 124 は基部または刃部を欠損する。全体的に自然面を残した一次剥離面をそのまま利用する粗雑な打製石斧であり、図示した裏面が一次剥離のみが 8 点 (117・119・120・122・123・126・132・134) を数え、他の石斧もまた、二次剥離は僅かである。比較的丁寧な二次剥離といえる例は、128・130・133 に認められる。

これらの打製石斧は撥形に分類されるが、幅が狭く細長い棒状を呈するもの (118・121・131) 短冊状のもの (120) 厚みがあって重く大型のもの (125) というように、各々の細部の特徴は変化に富んでいる。刃部は素材の持つエッジを利用するが (122) 使用による剥離や欠損が顕著である。

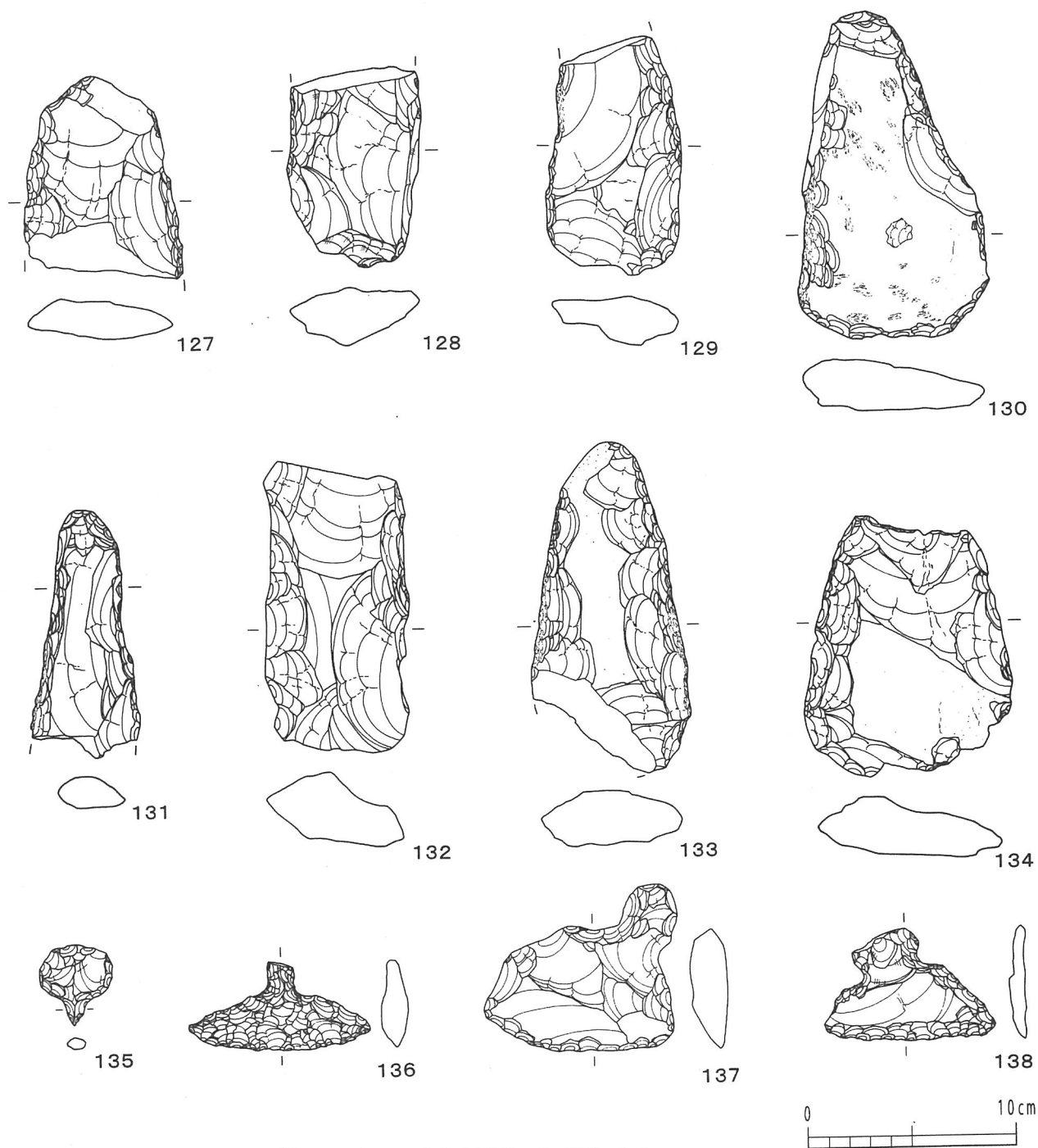
打製石斧は一般的に土堀具とされるが、一部に肉厚で重い大型品や、肉厚で細長い棒状のものは、土堀具としても他とは異なる用途・機能が類推される。本遺跡の打製石斧は、粗雑な加工で、自然面を最大限利用し、ほとんどが一次剥離で成形される。縄文時代の打製石斧でも比較的古い時期の手法を伝えている。

### ③石錐 (第 29 図 -135 図版 8)

石錐は 1 点出土した。素材を縦位に用い、両剥離面からの二次加工により鋭い刃部を作出する。



第28图 3区出土遺物(石器)(2)



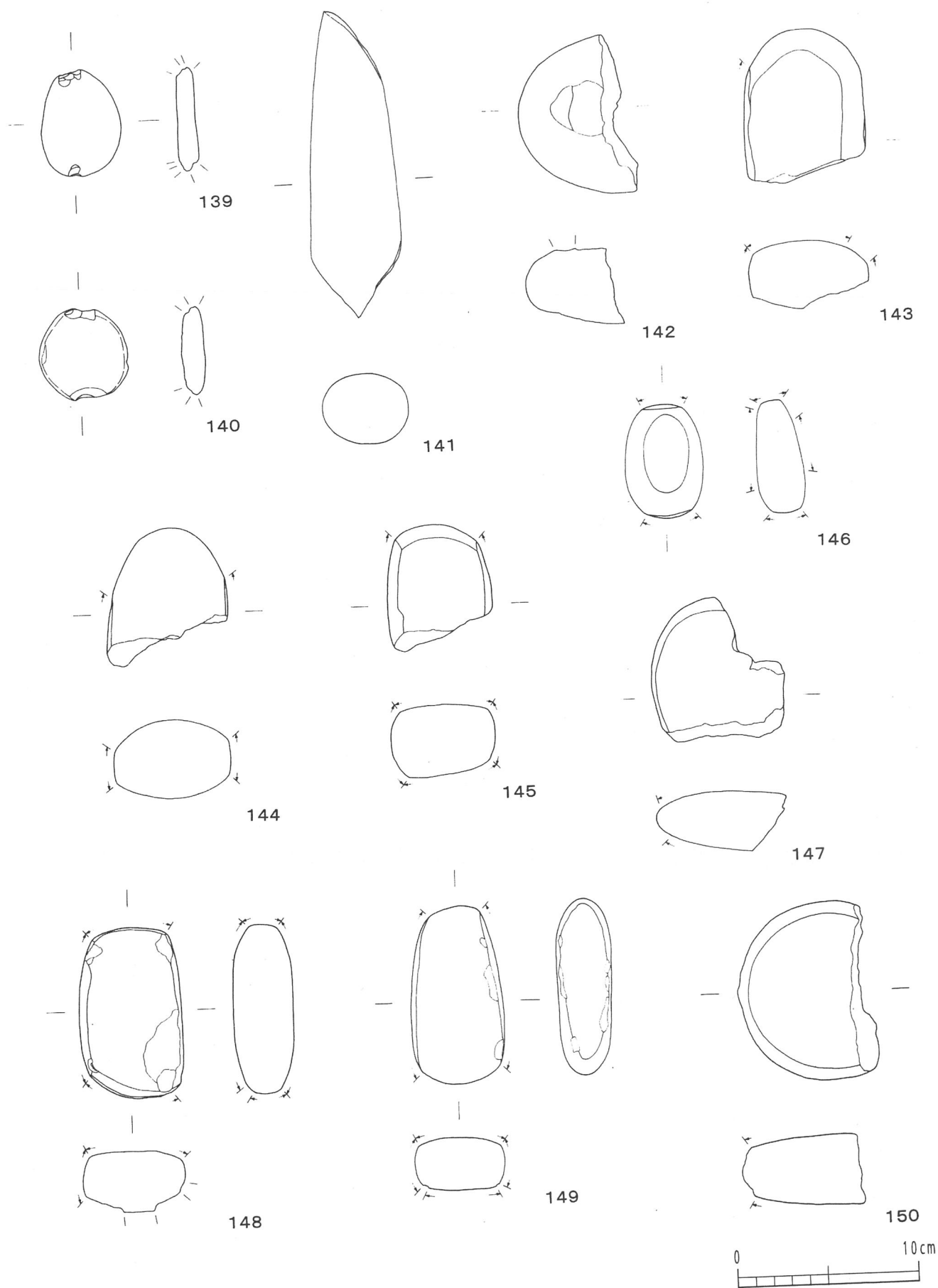
第29図 3区出土遺物（石器）（3）

ホルンフェルス製である。

④石匙（第29図136～138 図版8）

石匙は3点出土した。すべて横形で、幅の広い剥片を縦位または斜位に用い、一端につまみを作  
出する。刃部は片面加工（137・138）と両面加工が（136）認められる。136は黒曜石製で両面か  
ら丁寧な二次剥離を施すが、ガラス質黒色安山岩製の138は図示した形態は端整な姿であるが、裏  
面はつまみの基部の剥離以外は一次剥離面をそのまま利用している。137はホルンフェルス製で、  
刃部のみ荒い調整の二次剥離が見られるが、大半は両面ともに一次剥離面をそのまま残している。他  
の2点と比較して粗雑な作りである。

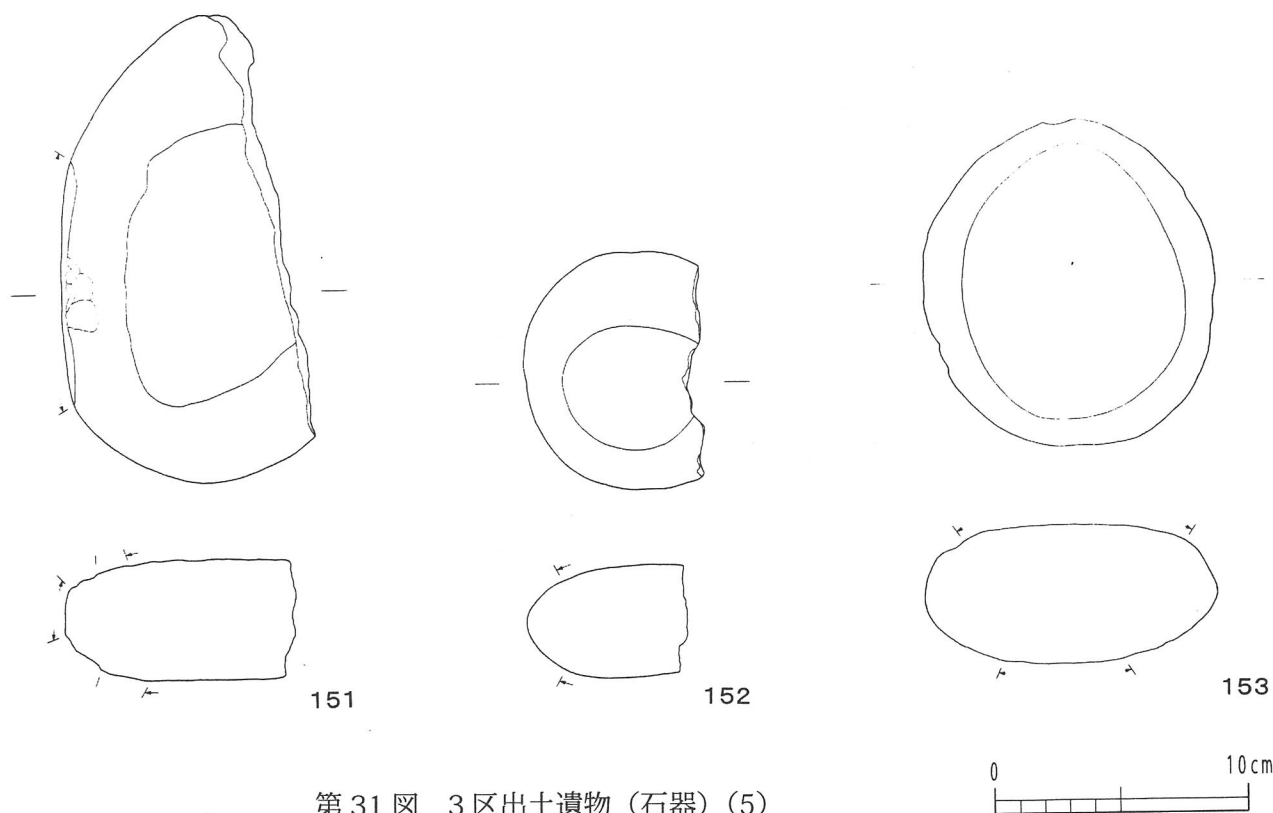




第 30 図 3 区出土遺物 (石器) (4)

### (3) 調理具

#### ① 敲石・磨石 (第 30 図 142～150・第 31 図 151～153 図版 )



第 31 図 3 区出土遺物 (石器) (5)

敲石・磨石は 12 点を図示した。142 の敲石は半分が欠損する。安定を得るために図示した裏面は平坦面を削りだす。中央部の使用痕は全体に凹凸があり一定した形状ではない。使用の痕跡はこの場所のみである。

磨石は 11 点が出土している。形態と点数は、円形を呈するも 4 点 (147・150・152・153) 楕円形のもの 4 点 (143・144・146・151) 扁平で隅丸長方形のもの 3 点 (145・148・149) という内訳を示す。使用痕の特徴を形態ごとにみると次のような傾向が指摘される。

円形を呈するものは、広口面の両面を使用しているが、150・152 では両面とも滑らか、147・153 では片面はやや滑らか、もう一方の面はザラザラしており、未使用の可能性もある。円形を呈するものは、両面または片面を使用しており、寸法や重さに大差はなく、同一な機能用途を持っていたと思われる。

楕円形を呈する 4 点は、使用痕が広口面と側面、側面のみに認められる二者がある。146 ではザラザラしているが広口面に使用痕と側面には敲打痕が、143 と 151 は広口の両面に滑らかな面を認めることができる。144 は側面にのみ使用痕が観察される例である。

隅丸長方形の 3 点は最も形態が類似したグループで、広口面・側面ともに全面を使用している。149 では広口面は滑らかな使用痕に対し、側面は平坦面をつくるがザラザラで明らかに異なった使用痕である。145 と 148 では、広口面・側面ともに平坦面をもつがザラザラした使用痕が残されている。

これらのなかには、ヒビ割れの入るものがある。144・147・151・153の4点であり、他にも打ち欠いた痕跡はないが、大きな割れ口をもつ事例も認められる。これらは円形・楕円形のグループに見られる傾向であり、割れ口やヒビが火熱によるものと仮定すれば、円形・楕円形のグループは火と関係する場所で使用された可能性がある

## 第5章 調査の成果

ジンゲン沢遺跡は、東隣の天間沢遺跡の一部と考えられていた経緯もあり、今までその実態が判然としなかった。今回の調査の成果をまとめるにあたり、天間沢遺跡との比較を行い今後の検討に資することとする。

### ①出土土器の時期について

ジンゲン沢遺跡の遺構が営まれた時期は、土坑群が検出された2区が早期の野島式・鵜ヶ島台式期が主体となり、住居跡が発見され居住域と確認された3区では、中期前半の藤内式期であることが明らかになった。この土器群は明らかに、天間沢遺跡の主体となる中期中葉期に先行する時期といえる。1985年刊行の天間沢遺跡報告書の第180表で出土土器を次のように9分類している。

天間沢遺跡		中部	関東	他の要素
第Ⅰ群	A 類	藤内	勝坂 2	
	B 類	(井戸尻)	勝坂 3	+
第Ⅱ群	A 類	(井戸尻) 曾利Ⅰ		
	B 類			
第Ⅲ群		曾利Ⅱ		+
第Ⅳ群		曾利Ⅲ	加曾利 E 2	
第Ⅴ群		曾利Ⅳ		
第Ⅵ群	A 類			
	B 類		曾利Ⅴ	加曾利 E 4
第Ⅶ群				
第Ⅷ群			称名寺	
第Ⅸ群			堀ノ内Ⅰ	

この表によると、中期前半から後期まで、中部・関東地域と他の要素（東海地域の土器）が出土していることがわかる。

### ②集落の開始と変遷

今回の調査区において、ジンゲン沢遺跡の集落の開始を、藤内式期におくことが確実となった。さらに住居跡が発見されていない2区においては、土坑群の機能用途が集落と関連する可能性は高く、開始期は早期の野島・鵜ヶ島台式期まで遡ることになる。

天間沢遺跡報告書117ページにおいて、住居跡と配石遺構の時期は次のように整理されている。まず住居跡では14軒の時期別軒数を、Ⅰ期・1軒、Ⅱ期・3軒、Ⅲ期・2軒、Ⅳ期・2軒、Ⅴ期・1軒、Ⅵ期・3軒、不明・2軒としている。最古の住居跡は、Ⅰ－B期の井戸尻式期であり、それ以前

の藤内式期には土坑のみが確認されるという。報告書では、この藤内式期をもって集落経営の開始期と位置づけているが、主体となる時期は、中期中葉～後半の曽利式期・加曾利E式期に位置づけられる。配石遺構もⅥ期からⅦ期に築造が完了したと推定され、これも集落の消長と符号している。

### ③東海系土器について

本遺跡からは少量ではあるが東海系の土器が出土している。それらは次の6点である。第20図31、第21図36・39、第22図52・53、第24図77。これらは、藤内式期から曽利式期並行の、山田平式期から北屋敷式期の土器であり、特に3号住居跡出土の土器群は静岡県東部地域の曽利式期の土器群に山田平式期が共伴し、これらの並行関係を示す良好な事例となった。静岡県東部地域での東海系の土器は、細片が多くかつ少量出土のため全体の器形を知る事例に乏しい。3号住居跡出土の東海系土器群は、口縁部から胴部が残存し、縄文中期前半の良好な共伴事例となった。

山田平式土器は、北浦式C式土器とともに分布の東限は西関東といわれるが、出土例が少なく、今後の大きな検討課題といえる。

### ④石器について

縄文時代の石器は、2層～4層にかけて、73点出土した。これらの帰属する時期は、土器の年代観から縄文中期曽利式期を中心とした石器群と捉えることが可能である。

今回報告する石器類を概観すると、狩猟具としての石鏃は27点とやや多い。これらは側縁が内湾する凹基式石鏃を主体とする。

土木具・工具としての打製石斧19点に対し磨製石斧1点と少ない。その多くは、刃部あるいは基部を破損しており、破棄されたものである。

調理具として植物質の加工に伴う磨石・敲石の占める比率が高い。ただし、個々の磨石・敲石の磨耗痕や敲打痕を観察すると、使用期間が短い印象をもつ。また欠損品は約半分程度と高い比率を示す。

本遺跡における石器の状況は、植物の加工に伴う石器類を中心としながら、一定の狩猟具を装備しているものの、土木具・工具が貧弱である。また損傷の状況から大半は破棄されたものと推定される。

### ⑤周辺遺跡との関係・位置づけ

ジンゲン沢遺跡と天間沢遺跡は、東を天間沢、西が福泉川に挟まれた約650mのなだらかな丘陵地に位置している。今回の報告で、天間沢遺跡の集落より先行する中期前半の居住域を確認した。これにより両者の集落経営開始時期の前後関係が指摘される。しかし遺跡立地の環境を考えると、両者は極めて至近距離にあり、ジンゲン沢遺跡と天間沢遺跡B・C・F・G地区は、境間が50m、天間沢遺跡と天間沢遺跡横道下地区とは境間が100mしかない。第3図遺跡位置図でみるように、これらの三箇所の位置関係は、ジンゲン沢遺跡と天間沢遺跡がより至近距離である。

本書の第Ⅱ章第1節において、ジンゲン沢遺跡の初出は昭和36年「静岡県遺跡地名表」であり、昭和59年刊行の「鷹岡町史」に受け継がれている。今後、調査の進展とともにジンゲン沢遺跡は、天間沢遺跡とは異なる遺跡なのか、天間沢遺跡の一部なのか。整理と検討が必要とされる。

第1表 出土土器観察表

挿図 番号	出土 位置	器形・残存 部位	文様	胎 土	色 調	備 考
1	2-1	口縁～胴 部	口唇部は押圧による刻み。斜位の太い沈線の上に、横位及び「N」字状に連続する無文帯。内面荒いナデ調製。	石英・長石・輝 石・白色粒子 多、繊維	橙(7.5YR6/6) 明褐色(7.5YR5/6)	野島
2	2	胴部	弱い屈曲部上は斜位の浅い沈線、下は横位の条痕	長石、輝石、 白色粒子極多	褐灰色(7.5YR4/1) にぶい褐色(7.5YR5/3)	
3	2-3	口縁部	太い押し引き沈線、細沈線で斜位の無文帯を区画。	石英、長石、 白色粒子多、 繊維	灰褐色(7.5YR4/2) 赤褐色(5YR4/6)	鶴ヶ島 台
4	2-3	口縁部	外面太い横位条痕、繊維	長石、輝石、 白色粒子極多	橙(7.5YR6/6) にぶい黄橙(10YR6/4)	早期条 痕系
5	2-3	胴部	横位条痕後に太い弧状と横位沈線。弧状と斜位の細沈線。内面横位条痕。	石英、輝石、 長石、白色粒 子	にぶい黄橙(7.5YR6/4) 橙(7.5YR6/6)	
6	2-3	胴部	縦位・横位の不連続沈線、繊維多	石英 やや多、 長石、輝石 微、白色粒子 少	灰褐色(7.5YR6/2) にぶい橙(7.5YR7/4)	
7	2-3	口縁部	内外横位条痕	石英、長石、 雲母少量	灰褐色(7.5YR4/2) にぶい橙(7.5YR6/4)	早期条 痕系
8	2-3	胴部	断面三角形の垂下隆帯間に無文帯区画、そのなかに斜位の太い沈線。内面横位と斜位の条痕	長石・石英、白 色粒子少量、 繊維	にぶい橙(7.5YR6/4) 橙(5YR6/6)	鶴ヶ島 台
9	2-3	波状口縁	口唇太い刻み、縦位の太い沈線の上に、細沈線による斜位横位の無文帯	石英、長石、 輝石、雲母白 色粒子	にぶい黄褐色(10YR5/3) にぶい橙(7.5YR6/4)	
10	2-3	胴部	太い斜位の沈線の上に斜位・横位の沈線間に無文帯、内面ナデ	石英、長石、 雲母	灰褐色(7.5YR4/2) 褐色(7.5YR4/3)	鶴ヶ島 台
11	2-3	胴部	粘土を追加して屈曲させる。下半に縦位と斜位の沈線、内面横位条痕、繊維	石英、長石、 輝石、白色粒 子少量	にぶい褐色(7.5YR5/4) にぶい褐色(7.5YR5/3)	
12	2-3	口縁部	口縁部刻み、斜位の沈線と横位の波状沈線、斜位の区画沈線脇に細い竹管の連続刺突、内面横位条痕、繊維	石英、長石少 量	にぶい黄橙色(10YR6/4) にぶい橙色(6/3)	野島
13	2-3	胴部	斜位の沈線で区画、その間に縦位の沈線施文。内面条痕、繊維	長石・石英少 量	にぶい黄橙色(10YR6/3) にぶい黄橙色(10YR7/3)	野島
14	2-3	底部、胴部 への屈曲 強い	胴部最下部に羽状縄文、繊維。	石英・長石・輝 石・白色粒子・ 雲母多	にぶい赤褐色(5YR) 黒褐色(10YR3/2)	前期前 半
15	2-3	口縁部～ 胴部	口唇部刻み、外面斜位条痕、内面ナデ	石英、輝石・長 石・雲母少量	橙色(2.5YR6/8) 明褐色(7.5YR5/6)	早期末
17	2-3	円筒形の 深鉢	口唇部刻み、無文、繊維多	石英、雲母、 白色粒子、黒 色粒子	明赤褐色(5YR5/6) 赤褐色(5YR4/6)	
18	2-3	楕円状を呈 する平底の 底部	内外ともに斜位条痕	石英、長石、 白色粒子、雲 母少量	明赤褐色(2.5YR5/6) にぶい橙(7.5YR6/4)	
19	2-3	口縁部～ 胴部	口唇連続する刻み、口縁部粘土貼り付けで肥厚、口縁斜位沈線、胴横位・斜位の沈線施文後に縦位沈線。内面横位条痕。	石英、長石、 白色粒子微量	にぶい橙(7.5YR6/4) 赤褐色(5YR4/6)	野島
16	3 1号住	口縁部～ 胴部、キャ リパー形	口縁下に横位の沈線を引き、間に棒状工具による刺突列を3条巡らせる。地文は縦位の条線、口縁部に渦巻き状隆帯を貼り付け。横位の沈線下から波状沈線を垂下。	石英、長石、 輝石、白色粒 子少量	赤褐色(5YR4/8) にぶい赤褐色(5YR4/3)	曾利Ⅲ ～Ⅳ
20	3 1号住	キャリパー口 縁部	地文はRL縄文、口唇部下には波状の隆帯、「W」状の隆帯を4箇所貼付、半截竹管による蕨状沈線4本垂下。内面横ナデ。	石英、長石、 雲母微	赤褐色(5YR4/6) 明赤褐色(5YRt/6)	加曾利

挿図 番号	出土 位置	器形・残存 部位	文様	胎 土	色 調	備 考
21	3-2 2号住	円筒形の 深鉢	口縁に三本の横位隆帯、下の二本に半截竹管による刺突、最下隆帯下に横位沈線、模様下はRL縄文	石英、長石、 雲母微、白色 粒子少量	橙色(7.5YR6/6) にぶい黄橙色(7.5YR6/4)	藤内
22	3-2 2号住	円筒形の 深鉢、口縁 ～胴部	口縁部にミズク把手1箇所、環状突帯2箇所、渦巻状突帯1箇所、口縁部直下と胴部二箇所に横位の結節沈線で区画、上は無文、中は隆帯の楕円区画を横並びに配置、区画内は爪形文を充填。内面ナデ。	石英、長石、 雲母、白色粒 子、黒色粒子	にぶい橙色(7.5YR6/4) にぶい橙色(7.5YR6/4)	新道
23	3-2 2号住	胴部(底部 付近)	下に沈線、下半は縄文。内面ナデ。	石英、長石、 雲母微量	暗石褐色(2.5YR3/6) 明赤褐色(2.5YR5/6)	
24	3-2 2号住	円筒形の 深鉢胴部 上半	横位の隆帯2本、下は連続する半截竹管の刺突	石英微、白色 粒子少	橙色(7.5YR6/6) にぶい黄(7.5YR6/4)	藤内
25	3-2 2号住	口縁部	地文は条痕、断面三角の隆帯を斜位に交差した間の区画に太い斜位の沈線。隆帯の一部押圧痕。内面斜位条痕。	石英、長石、 雲母微量	橙色(7.5YR6/6) 橙色(5YR6/6)	鶴ヶ島 台
26	3-2 2号住	胴部上半	上半は口縁部模様帯で三角形の下辺に突起、下半は三角形の横帯区画で隆線脇に爪形文を施文。内面ナデ。	石英、長石、 雲母白色粒子	赤橙色(2.5YR4/6) にぶい赤褐色(5YR5/6)	藤内
27	3-2 2号住	口縁部	三角形の突起、縁に添って爪形文、口縁直下に横位の隆帯と沈線。隆帯には連続する爪形文。内面ナデ。	石英少、長石 微、雲母微量	明赤褐色(5YR5/6) 橙色(7.5YR6/6)	藤内
28	3-2 2号住	胴部	斜位の沈線を施文、縦位の隆線で縦長に区画、隆帯部は屈曲部で突起状になる。内面ナデ。	長石・雲母少 量	にぶい橙色(2.5YR4/4) にぶい橙色(5YR6/4)	藤内
29	3-2 2号住	胴部	横位の連続する爪形文、内外ナデ	石英・長石・黒 色粒少量	橙色(7.5YR6/6) にぶい橙色(7.5YR6/4)	
30	3-2 2号住	口縁部	口唇部断面三角形、口唇部は外傾、直下は横位無文帯、下に連続爪形文の横位隆帯。内面ナデ。	石英、長石、 白色粒子少量	にぶい赤褐色(5YR4/4) にぶい褐色(7.5YR5/4)	
31	3-2 2号住	口縁部	山形の細い隆帯、2列の横位刺突の間に2～3列の山形刺突		にぶい黄橙色(10YR6/3) にぶい黄褐色(10YR5/4)	東海系
32	3-2 2号住	口縁部	口唇部内傾、口縁肥厚縦位の規則的な半截竹管、下半は三角形に区画し中は無文。細隆帯に綾杉文。内面ナデ。	長石少量	にぶい橙(7.5YR6/4) にぶい橙(7.5YR6/4)	
33	3-2 2号住	口縁部	口縁突起、口唇部刻み、隆帯に連続爪形文	石英、長石少 量、雲母微量	赤褐色(5YR4/6) にぶい橙(7.5YR6/4)	
34	3-2 2号住	底部	算盤玉を呈する	石英、雲母、 白色粒子	明赤褐色(5YR5/6) 灰黄色(2.5YR6/2)	
35	3-2 2号住	底部	底部内面剥落	石英、長石、 雲母微	明赤褐色(5YR5/6) 橙色(7.5YR6/6)	
36	3-2 3号住	口縁部～ 胴部	口唇部は半截竹管による押し引き、模様は屈曲部までの間に施文され、横位竹管の下に縦位の竹管、屈曲部上の連弧文の順に施文。屈曲部下は無文。内外ともに指頭押圧で調整。	石英・長石・雲 母微・白色粒 子	にぶい橙色(7.5YR6/4) 橙色 7.5YR6/6	山田平 Ⅲ～Ⅳ
37	3-2 3号住	口縁～胴 部	受け口状の口縁無文、垂下隆帯に刻み、縦長長方形に隆線で区画、その中を斜位沈線施文。内面ナデ。	石英・長石・黒 色粒子多	明赤褐色(5YR) 赤褐色(5YR4/6)	藤内
38	3-2 3号住	胴部	半截竹管による縦位・横位の連続する押し引き。内面ナデ。	長石・石英少 量	褐色(7.5YR4/3) にぶい褐色(7.5YR4/3)	
39	3-2 3号住	口縁部	口唇部に三角突帯、連続押し引き。口縁部模様帯は屈曲部間、三角突起下に二本の細隆帯を垂下、その間に三角印刻文、左は沈線下に竹管による交互刺突、右は縦位の竹管文、その下に沈線を施文する。内面指頭押圧調整。	石英・長石・雲 母・白色粒子・ 黒色粒子	にぶい赤褐色(5YR5/4) にぶい褐色(7.5YR)	山田平 Ⅲ～Ⅳ
40	3-2 3号住	口縁部～ 胴部	口唇部肥厚、口縁部上半、内側の押圧部まで無文、下半の地文は荒い縄文、斜位の隆帯貼り付け(2cm～3cm)	長石・石英多 量	橙色(7.5YR6/6) 明黄褐色(10YR6/6)	藤内



挿図 番号	出土 位置	器形・残存 部位	文様	胎 土	色 調	備 考
41	3-2 3号 住	口縁部	受け口の内傾する口縁無文、屈曲下に横位沈線、その下に条線斜位。内面ナデ。	長石・石英少 量	明赤褐色(5YR5/6) 明赤褐色(5YR5/6)	藤内
42	3-2 3号 住	口縁部～ 胴部	口唇部平坦、突起一箇所、口縁部横位沈線まで無文、胴部文様帯は垂下する隆帯により四分割、地文は斜位・縦位の条線、隆線で三角形や長方形に区画。内面は丁寧なナデ調整。	石英・長石・黒 色粒子少量	明赤褐色(2.5YR5/6) 橙色(7.5YR6/6)	藤内
43	3-2	口縁部	口唇部丸み、直下に横位刺突列、無文帯、下半隆帯区画で条線。内面ナデ。	長石・石英多 量	橙色(7.5YR6/6) 明黄褐色(10YR6/6)	藤内
44	3-2	口縁部～ 胴部	口唇部内傾、口縁部無文、隆帯で縦位と楕円状に区画、内側にキャタピラー文。内面ナデ。	長石・石英多 量、雲母微 量。	明褐色(7.5YR5/6) 黄褐色(10YR5/6)	藤内
45	3-2	口縁部	環状把手、縁辺刻み、外面地文縄文。内面ナデ。	長石・石英少 量	橙色(7.5YR6/6) 明赤褐色(5YR5/6)	藤内
46	3-2	口縁部	口唇部丸み肥厚、口縁部下キャタピラー文間は無文帯。内面ナデ。	長石・石英少 量	橙色(7.5YR6/6) にぶい橙色(7.5YR6/4)	藤内
47	3-2	口縁部	口唇部は平ら、地文は斜位の半截竹管による押し引き、その上に縦位の無文帯。内面横位条痕。	長石・石英微 量	橙色(7.5YR6/6) にぶい黄褐色(10YR5/4)	野島
48	3-2	胴部	上半は無文、下半地文は斜位の半截竹管による押し引き、その上に斜位の無文帯。内面横位・斜位条痕。	長石・石英微 量	にぶい黄褐色(10YR6/4) 橙色(7.5YR6/6)	
49	3-2	胴部	上半は無文、下半地文は斜位の半截竹管による押し引き、その上に縦位の無文帯。内面横位条痕。	長石・石英微 量	にぶい黄褐色(10YR5/3) 明黄褐色(10YR6/6)	野島
50	3-2	口縁部	口唇部肥厚、直下に二列の半截竹管文。内面ナデ。	長石・石英微 量	明赤褐色(5YR5/6) 赤褐色(5YR4/6)	新道
51	3-2	浅鉢口縁 部	口唇部肥厚、「く」の字に屈曲する、横位の隆線間に縦位の条線を施文。内面ナデ。	長石・石英多 量	にぶい黄橙(10YR6/6) にぶい黄橙(10YR5/4)	中期中 葉
52	3-2	口縁部	口唇部丸み、棒状工具による横位連続刺突に列、その下に波状の刺突二列。	長石・雲母微 量	にぶい褐色(7.5YR6/3) にぶい橙(7.5YR6/4)	北屋敷 Ⅱ
53	3-2	胴部	先端の尖る工具で、「L」字状に曲がる沈線とやや斜位の沈線。	長石・石英・雲 母微量	にぶい黄褐色(10YR5/3) 灰黄褐色(10YR4/2)	東海系
54	3-2	口縁部～ 胴部	口唇部内傾、斜位無文帯間に沈線を充填、円形の無文もある。内面条痕。	石英・長石少 量	にぶい褐色(7.5YR5/3) 明赤褐色(5YR5/6)	野島
55	3-2	胴部	隆帯と隆線で三角や長方形に区画、隆帯に刻み、内側に条線を充填。内面ナデ。	石英・長石多 量・雲母少量	明赤褐色(5YR5/6) 明黄褐色(10YR6/6)	藤内
56	3-2	胴部	隆帯と隆線で長方形に区画、隆帯刻み、内側に条線を充填。内面ナデ。	石英・長石多 量・雲母少量	にぶい赤褐色(5YR4/3) にぶい褐色(7.5YR5/4)	藤内
57	3-2	口縁部	口唇部内傾して凹む、直下に横位隆線、その下に横位の爪形二列、爪形の間に半截竹管による連続刺突、内面ナデ	石英・長石多 量・雲母少量	にぶい赤褐色(5YR4/3) にぶい赤褐色(5YR4/4)	藤内
58	3-2	口縁部～ 胴部	口唇部肥厚、口縁部下に段、この間無文、さらに下半荒い縄文、内面ナデ。	石英・長石・輝 石多量・雲母 少量	にぶい黄橙(10YR6/4) にぶい黄橙(10YR6/4)	中期中 葉
59	3-2	口縁部～ 胴部	口縁部「く」字状に屈曲、口唇部やや肥厚、屈曲下から模様帯、刻み隆帯を中心に隆線、その脇をキャタピラー文、半截竹管に細かい波状沈線。内面ナデ。	石英・長石・雲 母・白色粒子 多量	橙色(5YR6/6) 橙色(7.5YR6/6)	藤内
60	3-2	口縁部～ 胴部	やや開く口縁部、ひし形の沈線中央に横位の三状の沈線。内面横位条痕。補修穴。繊維含む。線、内面ナデ。補修孔。	石英・長石・雲 母多量	明るい赤褐色(2.5YR5/6) 明るい赤褐色(2.5YR5/6)	早期末 ～前期 初頭



挿図 番号	出土 位置	器形・残存 部位	文様	胎 土	色 調	備 考
61	3-2	胴部	横位の二条の不連続の沈線、上半は「く」字の連続する太い沈線、下半は無文。内面に上下接合時の粘土追加で盛り上がる。繊維多い	石英・長石・赤 色粒子多量	明赤褐色(2.5YR5/6) 明赤褐色(2.5YR5/8)	野島
62	3-2	浅鉢 口縁 部～胴部	「く」字に屈曲する口縁部で、口唇部内側に肥厚、口唇部と屈曲部の間に渦巻き隆帯と長方形区画隆帯内に細かい竹管刺突。内面ナデ。	石英・長石多 量	橙(5YR6/6) 橙(5YR6/6)	藤内
63	3-2	口縁部～ 胴部	キャリパー型の口縁部に突起、口縁部は無文、胴部地文縄文、垂下する隆線区画に縦位の波状沈線を施文。内面ナデ。	石英・長石多 量、雲母微量	橙(7.5YR6/6) にぶい黄橙色(10YR6/4)	加曾利 E
64	3-2	口縁部	口唇部直下に刻み、刻みのある渦巻き状隆帯、隆線側面を交互に刺突。内面ナデ。	量石英・長石 微量	赤褐色(5YR4/6) にぶい赤褐色(5YR5/4)	井戸尻
65	3-2	口縁部	口唇部直下に刻み、刻みのある三角形線と交互刺突の隆線、区画内は条線。内面ナデ。	石英・長石微 量	赤褐色(5YR4/6) 赤褐色(5YR4/6)	井戸尻
66	3-2	胴部	上位は無文帯、横位キタビラー文の区画内に縦位と斜位の隆帯、その脇にキタビラー文を施文。内面ナデ。	石英・長石少 量、雲母微量	明赤褐色(10YR5/8) 明褐色(7.5YR5/6)	藤内
67	3-2	胴部	上部に中空の突起、二股に垂下する刻み隆帯、縦長の隆線区画内に横位条線。内面ナデ	石英・長石・白 色粒子・雲母 少量	黄褐色(10YR5/8) 褐色(10YR4/6)	藤内
68	3-2	胴部	刻みのある垂下隆帯の交点に突起、縦位の隆線間に横位条線。内面ナデ。	石英・長石・雲 母少量	明赤褐色(10YR5/8) にぶい黄褐色(10YR4/3)	藤内
69	3-2	胴部	刻みのある垂下隆帯、斜位・横位の隆線、区画内に条線、キタビラー文と細かい竹管刺突。内面ナデ。	石英・長石少 量	暗赤褐色(5YR3/4) 褐色(7.5YR4/6)	藤内
70	3-2	口縁部～ 胴部	「く」字に屈曲する無文の口縁部で、口唇部内側に肥厚、胴部との境に把手。内面ナデ。	石英・長石多 量	赤褐色(5YR4/6) 褐色(7.5YR4/6)	井戸尻
71	3-2	口縁部	キャリパー形の口縁部、突起の隆帯に刻み、口縁部模様は垂下隆線、その一部に竹管による刻み。内面丁寧なナデ。	石英・長石・黒 色粒子少量	橙(7.5YR6/6) 橙(7.5YR6/6)	藤内
72	3-2	口縁部	楕円状の大きく窪む把手を三角形に接合、縁に連続する刻み、口縁部上端は無文帯、下は隆帯とキタビラー文ヲ施文。内面丁寧なナデ。	石英・長石多 量	にぶい褐色(7.5YR5/4) 明褐色(7.5YR)	藤内
73	3-2	口縁部	口縁部把手は内側からえぐり、外縁と中心への渦巻き隆帯に刻み、口縁部区画内に隆線と横位条線。内面ナデ。	石英・長石多 量	にぶい赤褐色(5YR5/3) 赤褐色(5YR4/6)	藤内
74	3-2	口縁部	口縁部突起頂点に刻み隆帯、垂下隆帯の左を隆線で区画、渦巻き隆帯とキタビラー文ニ半截竹管の刺突。内面ナデ。	石英・長石多 量	明黄褐色(10YR7/6) 赤褐色(2.5YR4/6)	藤内
75	3-2	浅鉢口縁 部	強く「く」字に屈曲、内傾する口縁部に文様、突起、斜位の竹管文を半分消し三角形のモチーフとする、弧状の隆帯縁にキタビラー文と半截竹管の刺突。内面ナデ。	石英・長石少 量	橙色(7.5YR6/6) 橙色(7.5YR6/6)	藤内
76	3-2	浅鉢口縁 部～胴部	口縁部に刻みをつけた隆帯、無文帯の下に胴部文様帯、横長の横位楕円状隆帯にキタビラー文、棒状工具による連続刺突。内面ナデ。	石英・長石・黒 色粒子少量、 雲母微量	明赤褐色(5YR5/6) 明褐色(7.5YR5/6)	新道
77	3-2	口縁部	口唇部尖る、荒い刻み、内外無文。	石英微量	赤褐色(5YR4/6) にぶい褐色(7.5YR5/4)	山田平 並行
78	3-2	胴部～底 部	上端に竹管を施文する横位隆帯で区画し、さらに縦長長方形の上下区画、その中に横位・やや斜位の沈線。内面ナデ。	石英・長石微 量	橙色(5YR6/8) にぶい黄褐色(10YR5/3)	藤内
79	3-2	底部	平底、摩滅	石英・長石・雲 母微量	橙色(7.5YR6/6) 橙色(7.5YR7/6)	
80	3-2	底部	平底、摩滅	石英・長石多 量・雲母少量	明赤褐色(5YR5/6) 灰黄褐色(10YR)	

第2表 出土石器観察表

挿図 番号	出土位置	器 種	形 状	長 さ 〈cm〉	幅 〈cm〉	厚 さ 〈cm〉	重 さ 〈g〉	欠 損	石 材
81	2-1 4トレンチ	石鏃	凹基式	1.41	1.33	0.23	0.33	完形	黒曜石
82	2-1 3トレンチ	石鏃	凹基式	(1.61)	1.51	0.42	(0.65)	頭部欠損	黒曜石
83	2-1 4トレンチ	石鏃	凹基式	(2.00)	(1.70)	0.35	(0.84)	頭脚部欠損	黒曜石
84	2-1 3トレンチ	石鏃	凹基式	2.13	(1.54)	0.36	(0.69)	脚部欠損	黒曜石
85	2-2	石鏃	凹基式	1.91	1.32	0.27	0.56	完形	黒曜石
86	2-3	石鏃	凹基式	2.09	1.53	0.39	0.79	完形	黒曜石
87	2-3	石鏃	凹基式	1.94	1.45	2.50	0.54	完形	黒曜石
88	2-3	石鏃	平基式	1.86	1.54	0.38	0.65	完形	黒曜石
89	2-3	石鏃	凹基式	(1.61)	1.82	0.46	(0.98)	頭部欠損	黒曜石
90	2-3	石鏃	平基式	(1.40)	1.45	0.42	(0.78)	頭部欠損	黒曜石
91	2-3	石鏃	凹基式	2.46	(1.87)	0.53	(1.55)	脚部欠損	黒曜石
92	2-3	石鏃		(1.61)	(1.40)	0.50	(0.78)	脚部欠損	黒曜石
93	2-1	磨石	円形	8.84	7.95	4.45	420.54	完形	—
94	2-1	磨石	円形	9.35	8.51	4.63	531.77	完形	—
95	2-1	磨石		(13.2)	(4.3)	(3.4)	(261.01)	欠損	砂岩
96	2-1	磨石	俵形	7.07	4.15	2.53	119.61	完形	砂岩
97	2-1	磨石	円形	5.52	5.28	3.82	146.61	完形	安山岩
98	2-2	磨石		(8.5)	6.28	2.65	(202.03)	欠損	—
99	2-3	磨石		(6.1)	7.00	3.09	(194.43)	欠損	砂岩
100	3-2	尖頭器	木葉形	(4.97)	2.0	0.74	6.41	未製品	ホルンフェルス
101	3-2	石鏃	凹基式	2.58	1.75	0.53	1.76	完形	黒曜石
102	3-2	石鏃	凹基式	2.50	1.53	0.31	0.74	脚部欠損	黒曜石
103	3-2	石鏃	凹基式	2.12	1.60	0.3	0.74	完形	ホルンフェルス
104	3-2	石鏃	凹基式	1.95	1.48	0.30	0.53	完形	黒曜石
105	3-2	石鏃	凹基式	1.83	1.43	0.44	0.79	完形	黒曜石
106	3-2	石鏃	凹基式	1.97	1.32	0.25	0.37	完形	黒曜石
107	3-2	石鏃	凹基式	1.73	1.50	0.40	0.61	完形	黒曜石
108	3-2	石鏃	凹基式	1.54	1.06	0.20	0.30	完形	黒曜石
109	3-2	石鏃	平基式	1.85	1.28	0.43	0.76	完形	黒曜石
110	3-2	石鏃	凹基式	(1.94)	1.90	0.46	(1.48)	頭部欠損	黒曜石
111	3-2	石鏃	凹基式	(1.52)	1.46	0.43	(0.60)	頭部欠損	黒曜石
112	3-2 3号住	石鏃	凹基式	2.32	(1.66)	0.49	(1.33)	脚部欠損	黒曜石
113	3-2	石鏃		(1.82)	(1.46)	0.30	(0.64)	脚部欠損	黒曜石
114	3-2 2号住	石鏃		(2.14)	(1.33)	0.39	(0.99)	脚部欠損	黒曜石
115	3-2	石鏃		(1.80)	(1.00)	0.27	(0.49)	脚部欠損	黒曜石

挿図 番号	出土位置	器 種	形 状	長 さ 〈cm〉	幅 〈cm〉	厚 さ 〈cm〉	重 さ 〈g〉	欠 損	石 材
116	3-2 3号住	打製石斧	撥形	14.00	5.80	1.88	166.93	完形	砂岩
117	3-2	打製石斧	撥形	11.20	4.1	1.22	68.71	完形	頁岩
118	3-2	打製石斧	撥形	11.20	3.25	1.70	70.95	完形	砂岩
119	3-2 2号住	打製石斧	撥形	10.60	4.5	1.85	79.44	完形	頁岩
120	3-2	打製石斧	撥形	10.10	4.66	2.10	115.13	完形	頁岩
121	3-2 3号住	打製石斧	撥形	(10.85)	4.05	1.63	(96.64)	基部欠損	—
122	3-2 3号住	打製石斧	撥形	(9.7)	5.20	1.60	(83.39)	基部・刃部欠損	—
123	3-2	打製石斧	撥形	(11.40)	4.70	1.33	(77.19)	刃部欠損	頁岩
124	3-2	打製石斧	撥形	(9.80)	4.60	2.07	(109.55)	基部欠損	頁岩
125	3-2 2号住	打製石斧	撥形	(11.30)	8.9	3.97	(363.78)	基部欠損	砂岩
126	3-2 3号住	打製石斧	撥形	(7.50)	8.30	2.46	(122.95)	基部欠損	頁岩
127	3-2	打製石斧	撥形	(6.50)	(5.10)	1.45	(44.15)	刃部欠損	頁岩
128	3-2 3号住	打製石斧	撥形	(6.30)	4.30	1.72	(57.24)	基部欠損	安山岩
129	3-2	打製石斧	撥形	(7.65)	4.30	1.43	(52.00)	基部欠損	頁岩
130	3-2	打製石斧	撥形	10.40	6.10	1.81	(135.34)	基部欠損	頁岩
131	3-2	打製石斧	撥形	(8.0)	(3.47)	1.11	(35.31)	刃部欠損	頁岩
132	3-2 3号住	打製石斧	撥形	(9.40)	4.60	2.60	(105.50)	基部・刃部欠損	ホルンフェルス
133	3-2	打製石斧	撥形	(10.70)	(5.10)	1.91	(129.94)	刃部欠損	砂岩
134	3-2	打製石斧	撥形	(8.90)	6.70	1.83	(110.12)	基部欠損	頁岩
135	3-2	石錐		2.58	1.35	0.67	3.76	完形	ホルンフェルス
136	3-1 10トレンチ	石匙		2.80	5.90	0.85	8.11	完形	黒曜石
137	3-2	石匙		5.30	6.20	1.2	37.07	完形	ホルンフェルス
138	3-2	石匙		5.50	3.60	0.52	9.62	完形	ガラス質黒色 安山岩
139	3-2	石錐	円形	5.86	4.89	1.24	48.91	完形	頁岩
140	3-2	石錐	円形	4.93	4.86	1.22	45.96	完形	片岩
141	3-2	磨製石斧	乳棒状	(17.0)	(5.00)	3.70	(531.15)	欠損	—
142	3-2	敲石		(8.3)	(6.6)	4.24	(312.33)	欠損	安山岩
143	3-2	磨石		(8.5)	6.62	(3.7)	(281.46)	欠損	砂岩
144	3-2	磨石		(7.6)	6.56	4.57	(245.02)	欠損	砂岩
145	3-2	磨石		(7.1)	5.24	3.92	(258.19)	欠損	安山岩
146	3-2	磨石	楕円形	6.31	4.27	2.68	98.82	完形	砂岩
147	3-2 2号住	磨石		(8.0)	(7.4)	3.35	(234.77)	欠損	砂岩
148	3-2	磨石	長方形	9.43	5.69	3.42	325.28	完形	安山岩
149	3-2	磨石	長方形	9.74	5.04	3.02	272.91	完形	—
150	3-2	磨石	円形	9.64	(7.3)	3.89	(409.90)	欠損	—
151	3-2	磨石		18.45	(9.9)	4.83	(1364.01)	欠損	—
152	3-2	磨石	円形	9.35	(6.5)	4.31	(415.04)	欠損	鮮緑岩
153	3-2	磨石	円形	12.75	11.44	5.40	1168.62	完形	安山岩

図版 1



1. 2区 試掘調査全景



2. 2区 試掘調査遺物出土状況



3. 2区 本調査全景



4. 3区 調査前



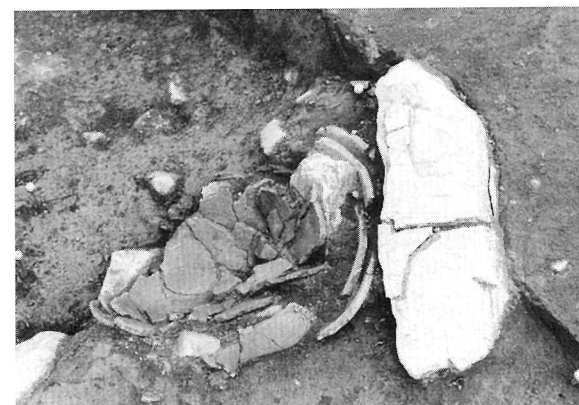
5. 3区 試掘調査全景



6. 3区 全景

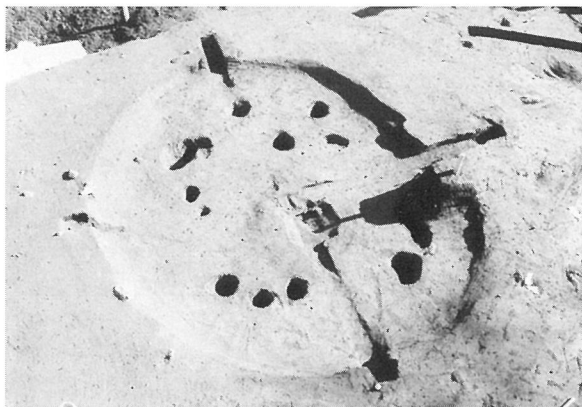


7. 3区 1号住居跡 完掘

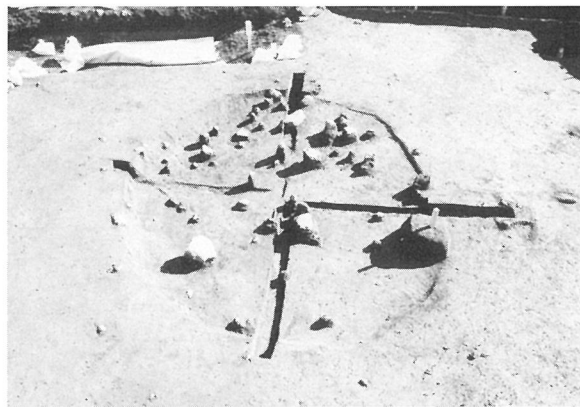


8. 3区 1号住居跡 炉

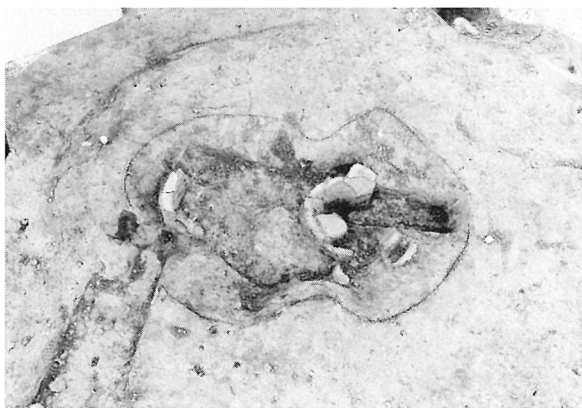




9. 3区 2号住居跡 完掘



10. 3区 2号住居跡遺物出土状況



11. 3区 2号住居跡 炉



12. 3区 3号住居跡 完掘



13. 3区 3号住居跡遺物出土状況



14. 3区 3号住居跡遺物出土状況

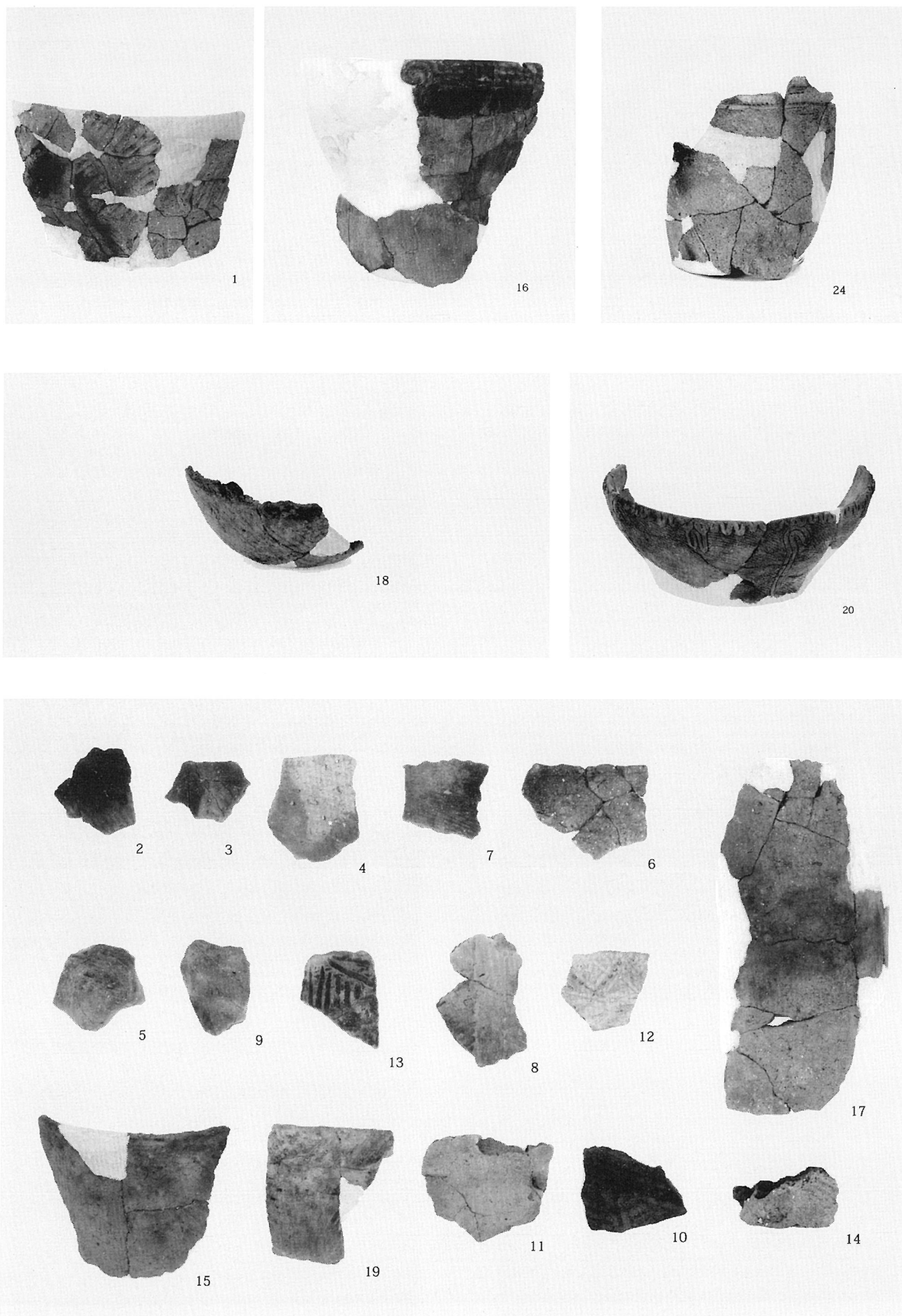


15. 3区 配石遺構

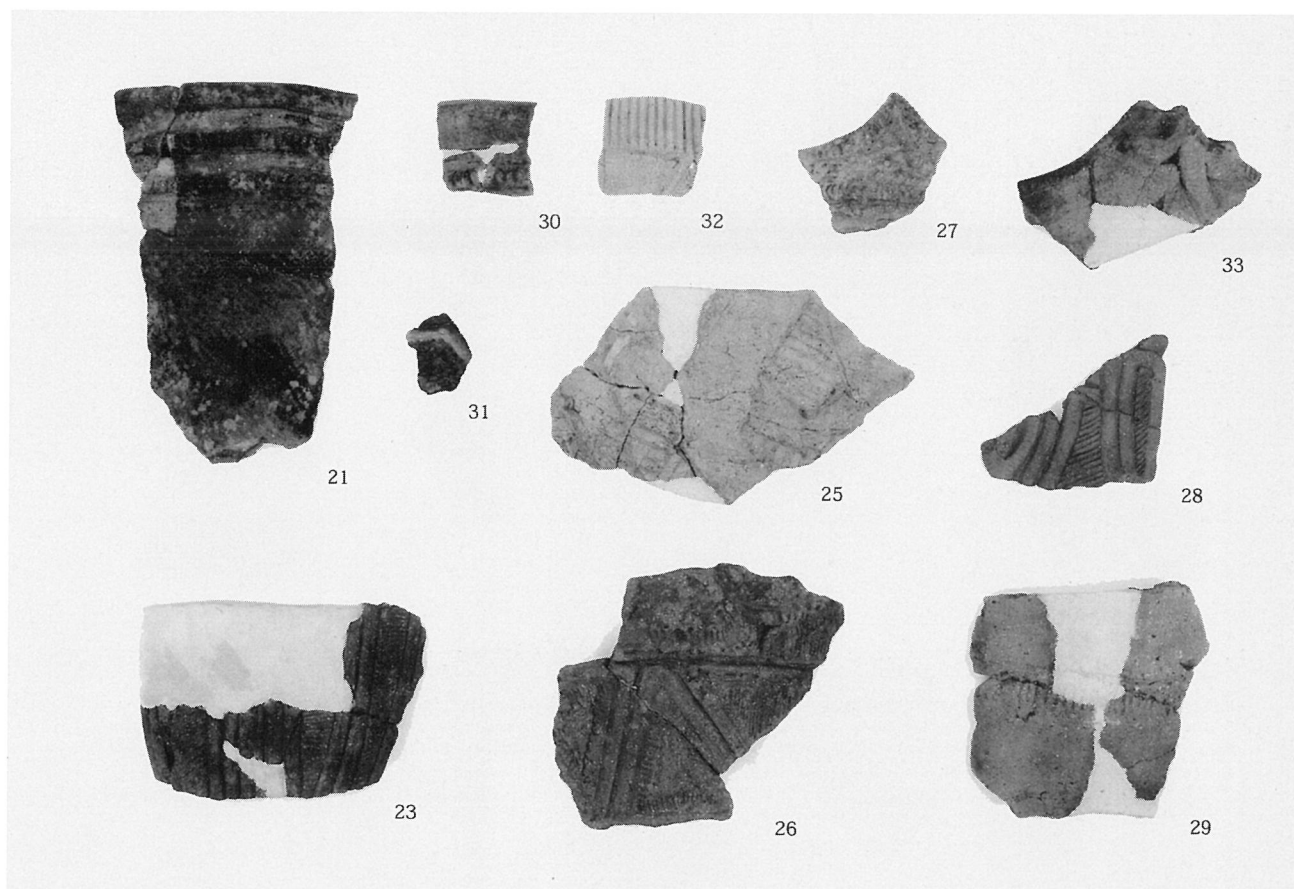
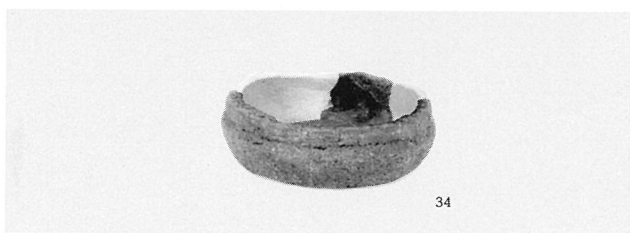
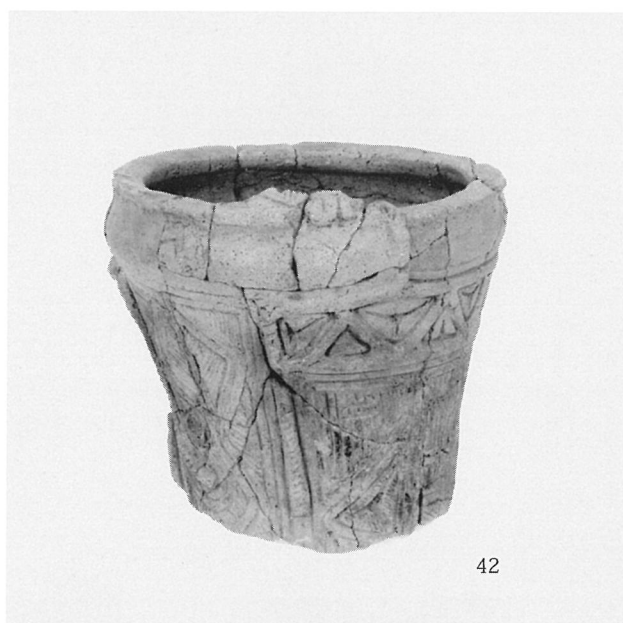


16. 3区 石器出土状況

图版 3

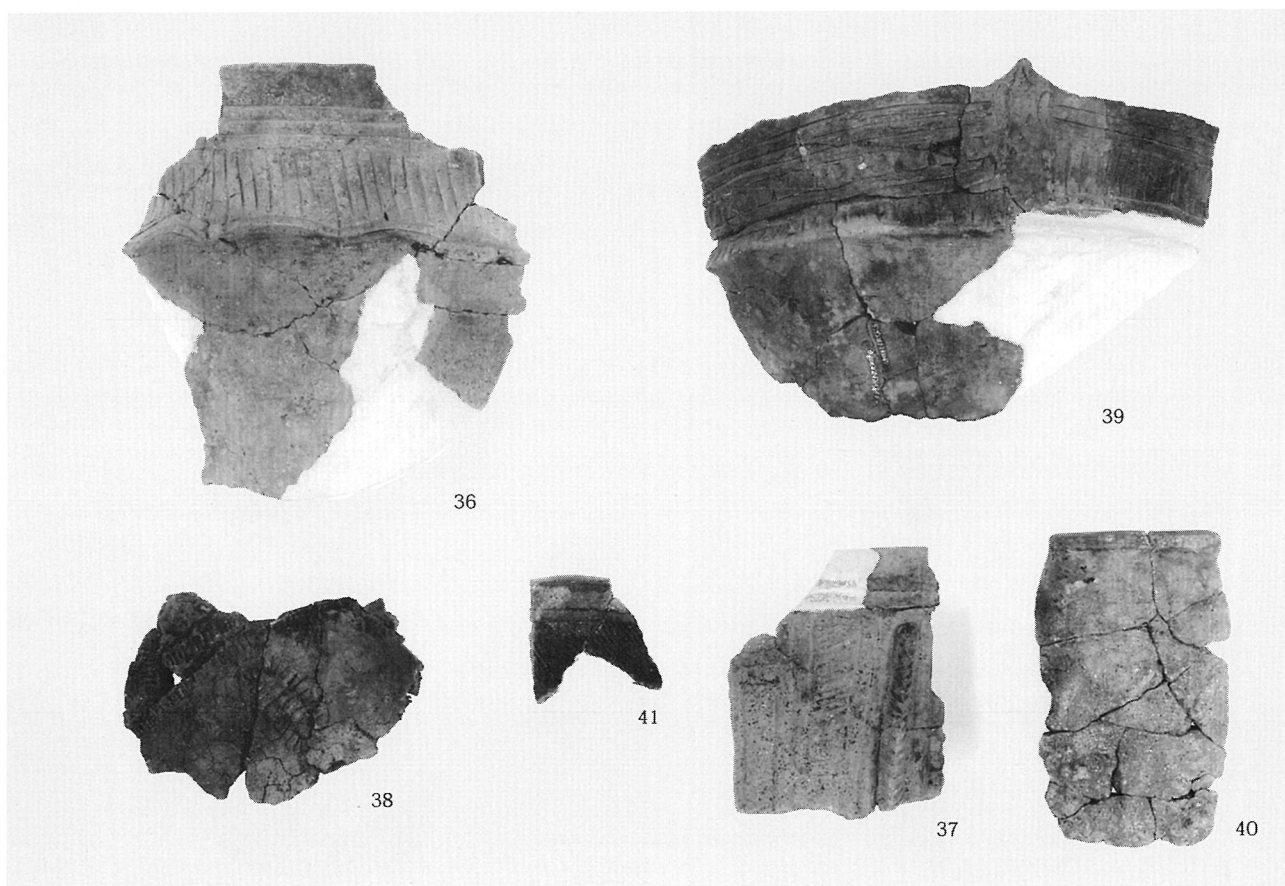


2区 包含層出土土器

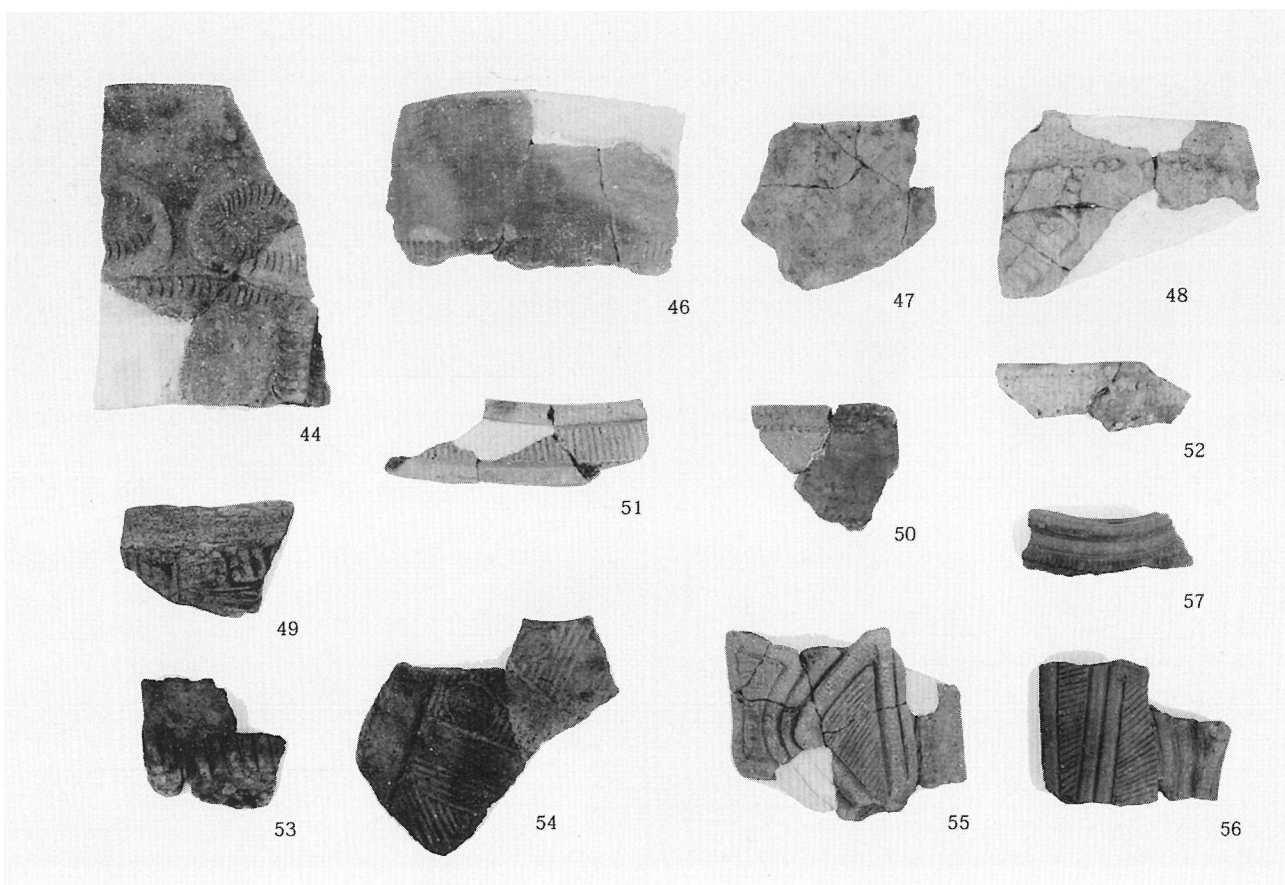


3区 2号・3号住居跡出土土器



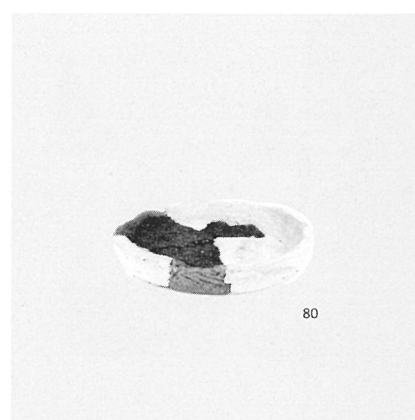
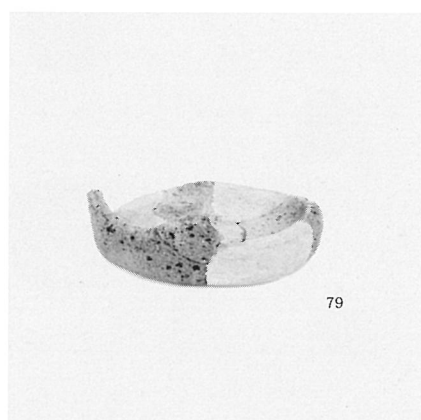
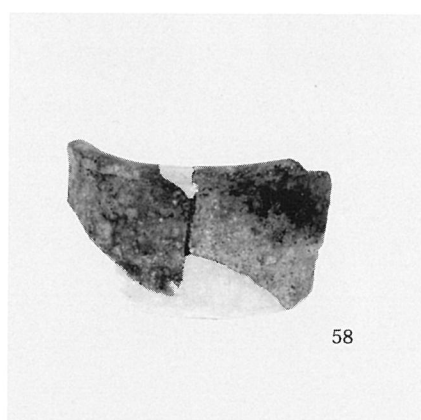
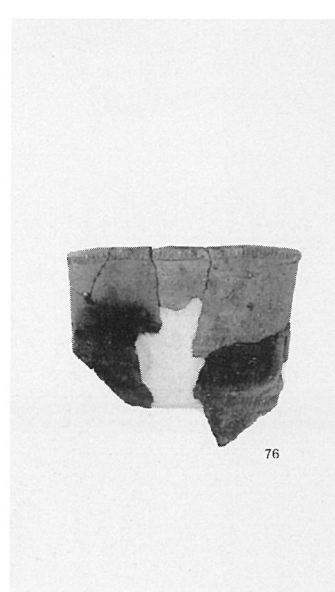
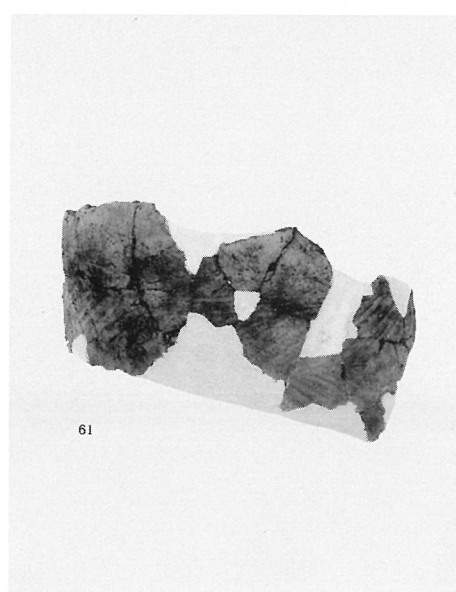
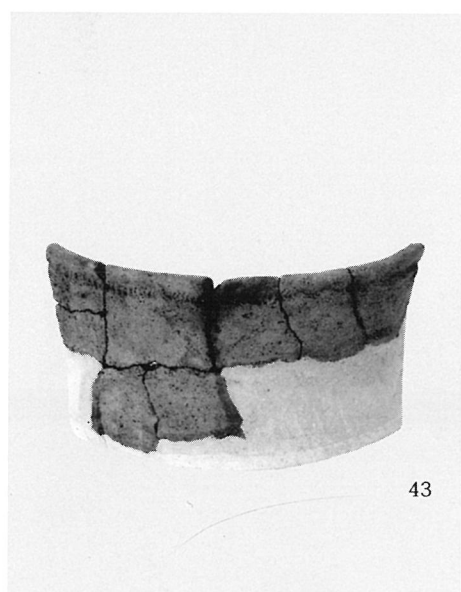
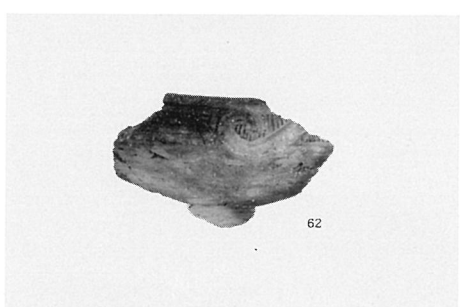
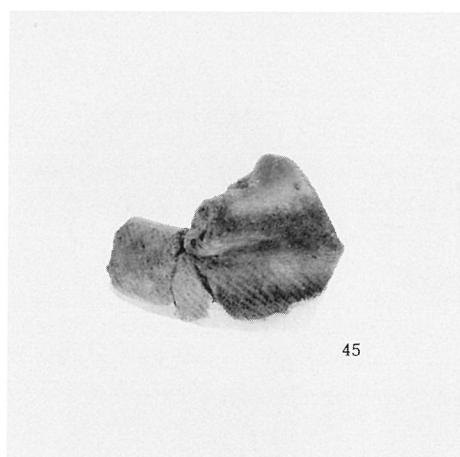


3区 3号住居跡出土土器

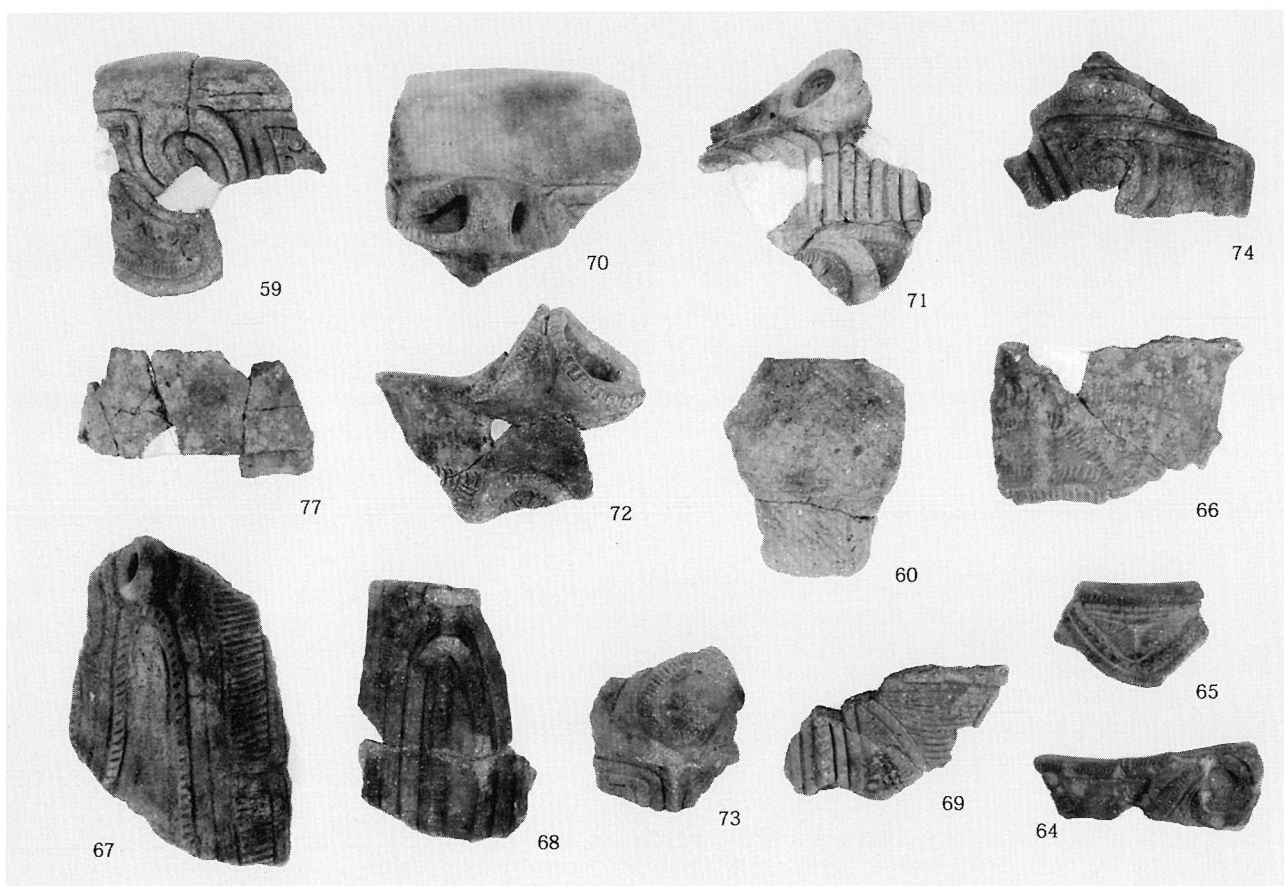


3-2区出土土器

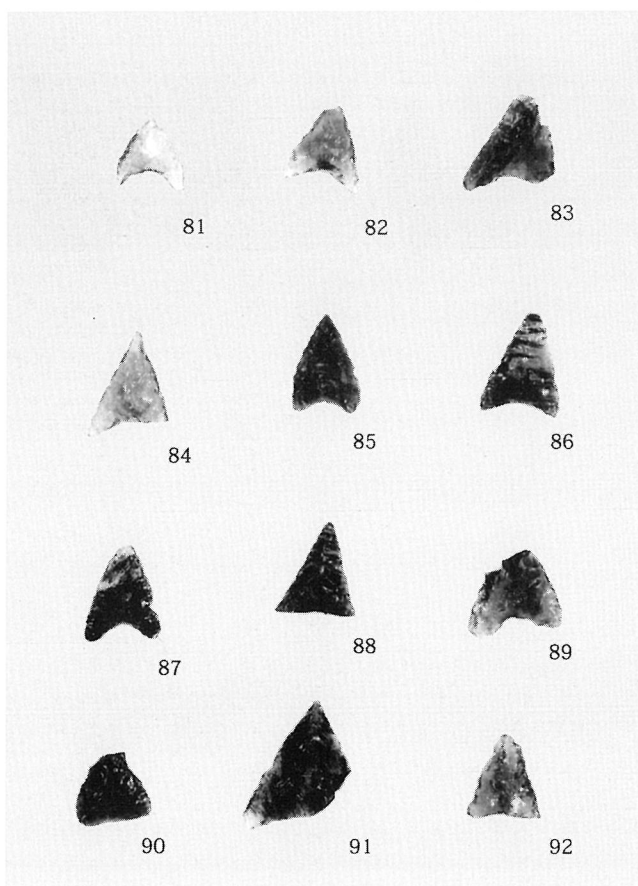




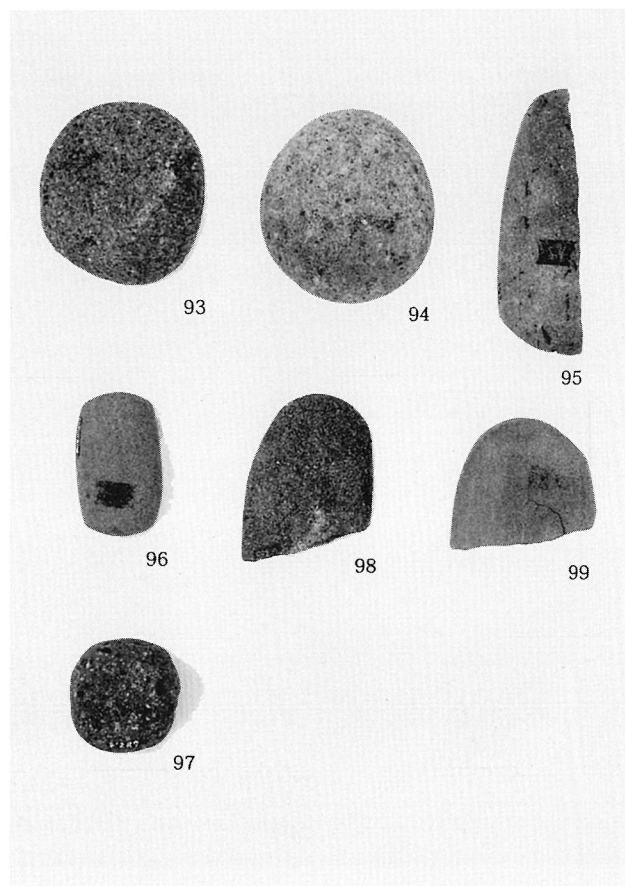
3—2区出土土器



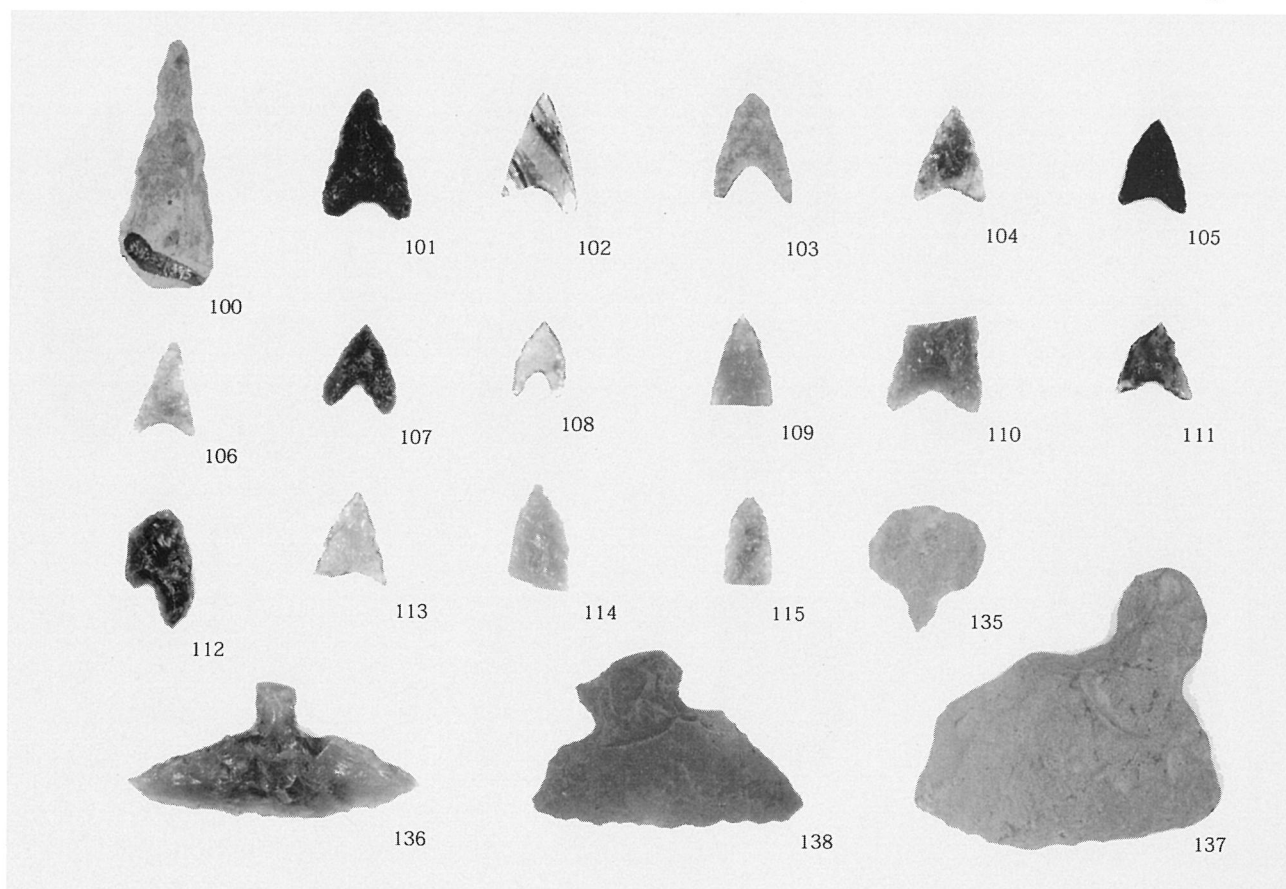
3—2区出土土器



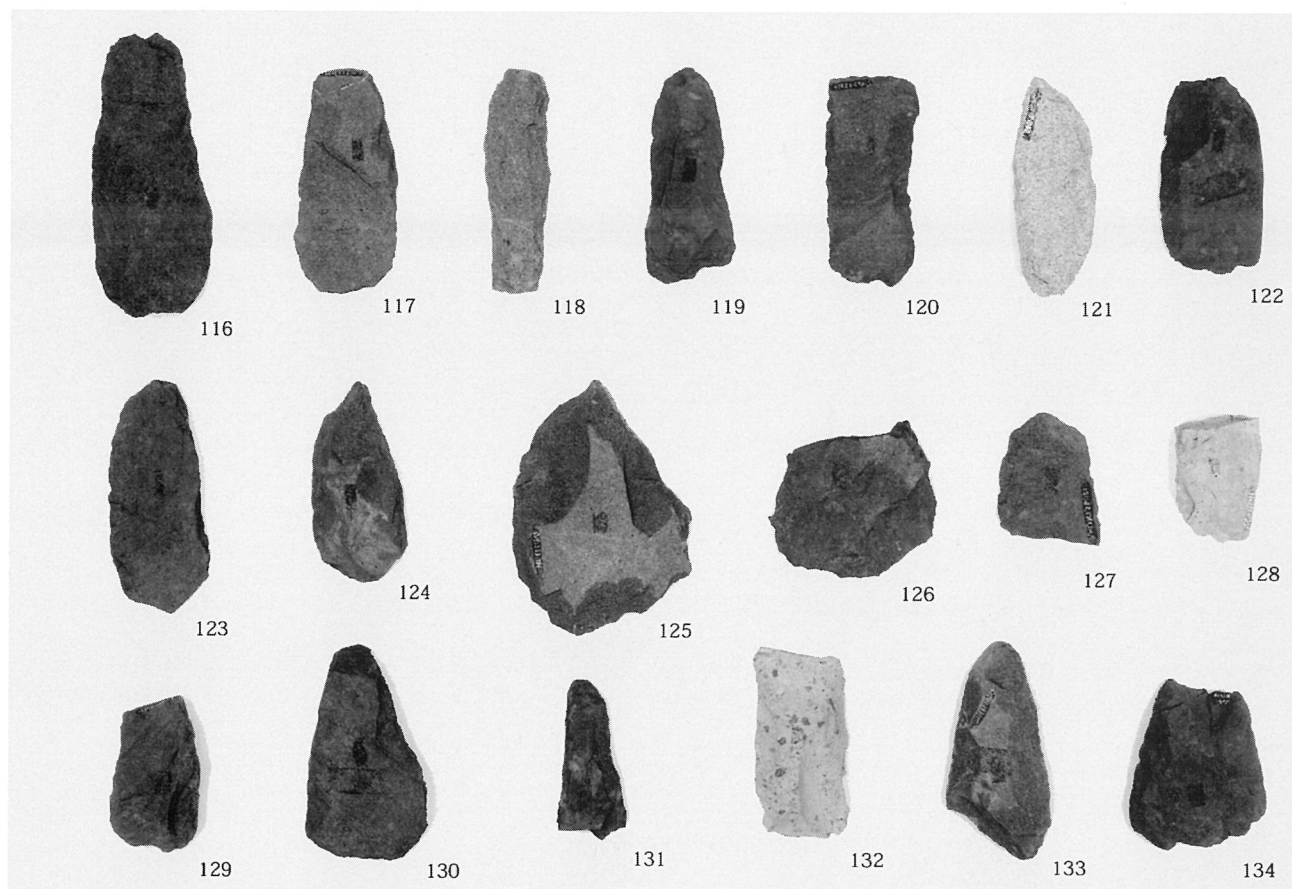
2区出土石器(石鏃)



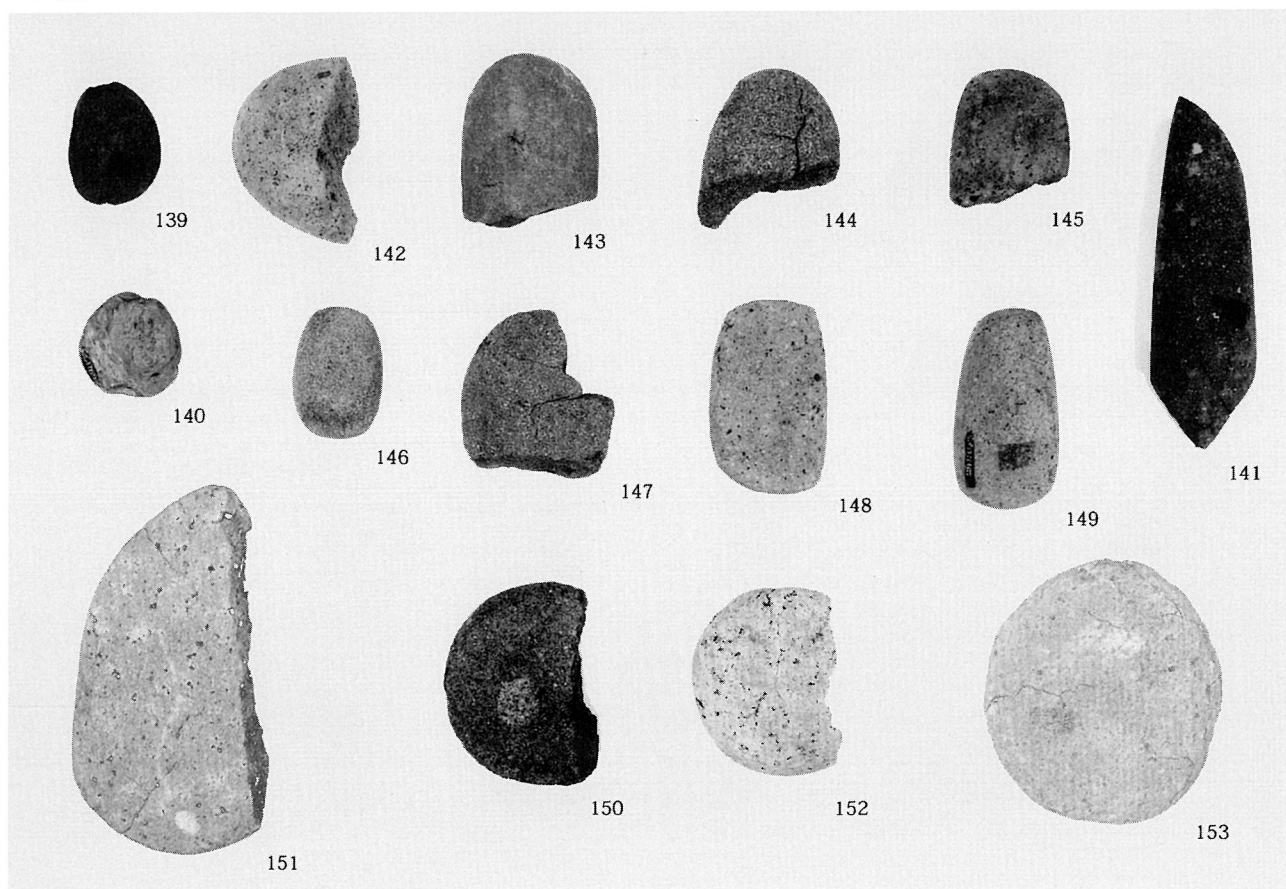
2区出土石器(磨石)



3区出土石器（石鏃・石匙）



3区出土石器（打製石斧）



3区出土石器（敲石・磨製石斧・磨石）



# 報告書抄録

ふりがな	じんげんざわいせき							
書 名	ジンゲン沢遺跡							
副 書 名	宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	(編著者) 前田 勝己							
編集機関	富士市教育委員会							
所 在 地	〒417-8601 富士市永田町1丁目100番地							
発行年月日	西暦2007年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ジンゲン沢 遺跡2区	静岡県 富士市 天間堰戸 955-1	22210	S 6	35° 12′ 35″	138° 38″ 29″	20051017 ～ 20051110	234m <sup>2</sup>	宅地造成工事
ジンゲン沢 遺跡3区	静岡県 富士市 天間堰戸 954-3	22210	S 6	35° 12′ 36″	138° 38″ 29″	20051107 ～ 20051221	1058m <sup>2</sup>	宅地造成工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特 記 事 項		
ジンゲン沢 遺跡	散布地	縄文時代 中期前半	竪穴住居跡 配石遺構・土坑	土器  石器		遺跡は天間沢遺跡の西側に位置する。 縄文時代早期から中期の土器が多数出土。 遺構数は、多くないものの、縄文時代中期 前半の竪穴住居跡3軒が検出された。		

富士市埋蔵文化財発掘調査報告書

## ジンゲン沢遺跡

宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 19 年 3 月 30 日 発行

編集・発行 富士市教育委員会文化振興課

〒417-8601 静岡県富士市永田町 1 丁目 100 番地

TEL0545-55-2875

印刷 小泉印刷株式会社

〒416-0931 静岡県富士市蓼原 637

TEL0545-62-6001

富士市行政資料登録番号

18-64

